
市原市文化財センター

研究紀要Ⅰ

1987, 3

財団法人市原市文化財センター

序 文

市原市は、首都圏に位置し、京葉臨海工業地帯の建設を契機とし、以来、地域開発が急速に進展しつつあります。この間、開発行為に先行する埋蔵文化財の調査は市内各所で行われ、これは結果として、全国的にも脚光をあびる原始古代の新事実を次々に明らかにしました。しかし反面、埋蔵文化財はとりまく状況は非常にきびしいものがあり、これらを後世に保存し、同時に開発との調和をはかること、さらに市民と地域文化の充実に寄与するために、行政に課せられた責務は日々重くになりつつあります。

このような状況のなかで、財団法人市原市文化財センターは、市原市内の埋蔵文化財の調査研究に対応すべく、昭和57年4月1日に設立されました。以来施設、設備等拡充に努めてまいりましたが、同時にこれを直接担う人材の育成が最大不可欠な課題であることは言うまでもありません。一片の土器、石器より「事実」を復元し、これを日本列島の歴史のなかに、あるいは地域史のなかに位置付け、歴史教育、社会教育の場で市民に還元する不断の努力こそ埋蔵文化財保護思想の涵養と普及につながるものであると確信しております。そのためには各職員の不断の研鑽と研究の深化が要請されるところであり、また組織としてその環境を整備していく必要があります。

本書は、職員の日々の研究と発掘調査をもとにした、研究成果の発表の場として企画したものであり、これが埋蔵文化財の保護、そして地域史の解明になんらかの貢献ができれば幸いです。今後とも、研究活動を一層推進し、価値ある冊子として育ててまいりたいと存じております。関係各位のご指導とご協力をお願いする次第であります。

昭和62年3月

財団法人 市原市文化財センター

理事長 星 野 一 郎

市原市文化財センター 研究紀要Ⅰ

市原市の先土器時代

—— 地形・地質を中心として ——

近藤 敏 (1)

草刈、大和田、永田・不入

—— 市原市における土器研究をめぐる諸問題 ——

高橋 康男 (27)

房総における改葬系区画墓の出現期

—— 方形(円形)区画改葬墓の提唱 ——

木對 和紀 (47)

千草山遺跡の再検討

田中 清美 (73)

市原市の先土器時代

— 地形・地質を中心として —

近 藤 敏

はじめに

1. 先土器時代洪積世の環境

2. 市原の先土器時代の環境

3. 市原の層序と遺跡

おわりに

はじめに

市原市の地理的環境説明をする際には、東京湾東岸に位置することと、清澄山系から源を発して、市内を南北に貫流する養老川の存在をあげる。東京湾東岸の立地とは、西と北を東京湾に面し、養老川デルタ地域においては、海を経て富士山・丹沢山地を望み、太陽が沈む。北も同様に海を経て、船橋沿岸を見て遥か筑波山を望むことになる。東においては、村田川を境界にして下総台地(下総国)が続く。南では台地から丘陵となり、養老川を南北軸にして東西とも次第に標高を上げ、東に権現森173.3m・高星山149m・野見金山180.2mとなり、西は音信山189m・大福山285mを計る。以上のように自然地理的に変化のある市原市である。それらの起伏の変化は、房総半島中央部に位置し、南北に貫流する養老川と、関東平野の奥まで進入している東京湾が起因していることは言うまでもない。加えて、海岸部を有することで、洪積世から沖積世にかけての地形変化は激しいものがある。そのため先土器時代をよりよく理解するためには、洪積世の古環境を復元し、当時の自然地理を知ることが研究の一步と考えたい。

1. 先土器時代洪積世の環境

図1は、約2万年前ウルム氷期の日本列島の姿である⁽¹⁾。日本海は大内陸海となり、日本列島は北の間宮海峡、宗谷海峡が陸橋となり、南の朝鮮海峡も陸橋となった。ウルム氷期は、海水面の変動によって海峡が幾度か陸化したことが知られている⁽²⁾。図4、Aの時期に大陸から動植物が南下しており、それはまた人類の移動も可能にしたことだろう。

房総半島の誕生は、関東平野の成立と同じく、関東堆積盆地つまり、関東造盆運動を生因としている。それは関東平野の中心部の沈降現象と、平野周辺部山地の隆起現象つまり、沈降・

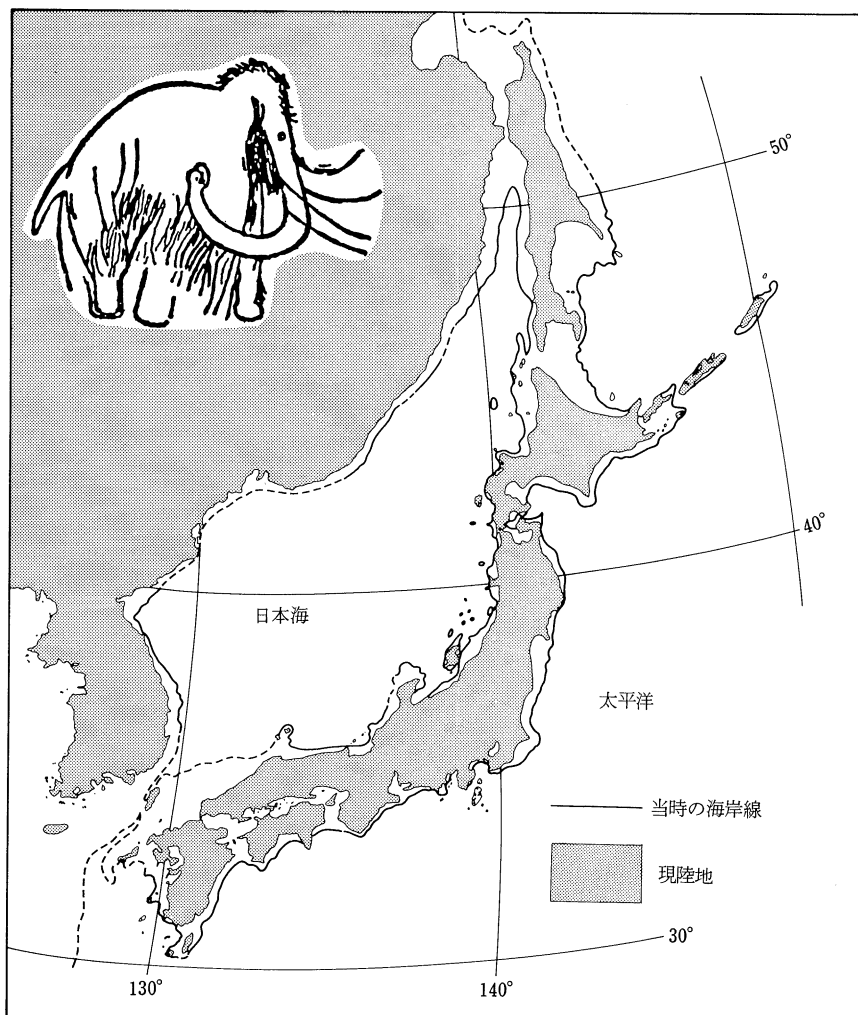


図1 第四世紀洪積世後期の古地理(約2万年前)

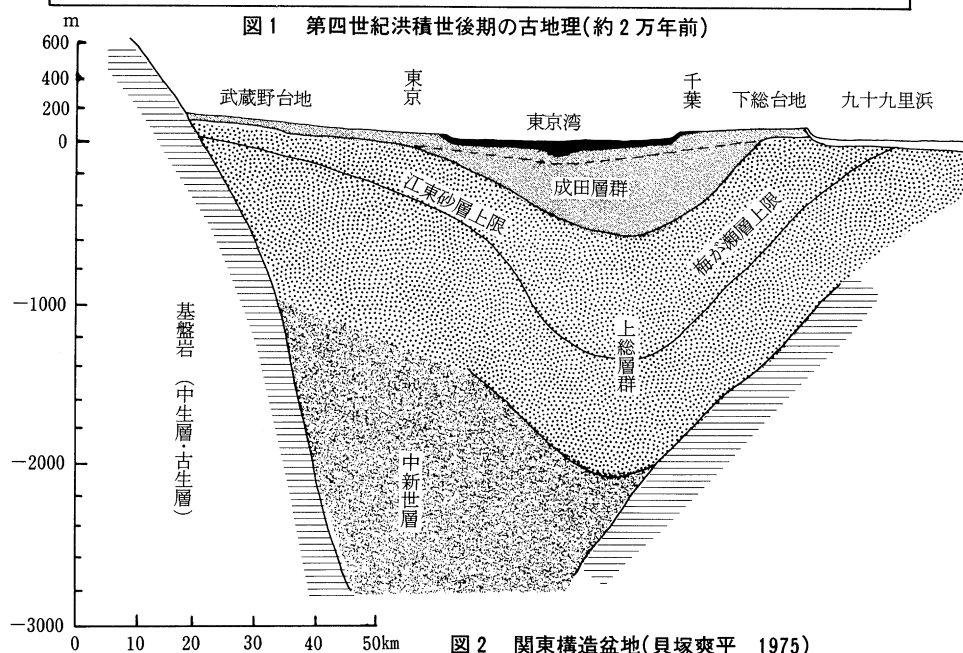


図2 関東構造盆地(貝塚爽平 1975)

隆起の相対運動による造盆現象である。そして造盆された凹地を埋める堆積物が、上総層群と呼ばれるものである⁽³⁾。上総層群中には、下部から中部にかけて市内を模式地とする梅ヶ瀬層(U)、国本層(KU)等があり、有孔虫・軟体動物化石(貝類)の深海性化石を産する。上部の万田野砂礫層(MD)は、前期洪積世後半の地質年代となり、化石相は開いた湾の状態となる。哺乳動物化石はトウヨウ象、鯨、野牛、海獣等が産する⁽⁴⁾。

中期洪積世は古東京湾の時代になる。古東京湾の堆積物は下総層群(成田層)と呼ばれる。古東京湾は浅い湾で約50万年前～約40万年前に出現して、約10万年前に消滅している。市内では、房総半島南部にある嶺岡山の隆起が前期洪積世以降から続き、市内南部域まで達して南部域から次第に隆起がはじまっている。しかし北部域では、古東京湾の形成中であり、浅海域から潮間帯域に移行する時期が古東京湾時代全般に渡る⁽⁵⁾。

下総台地上の下末吉ロームの降灰は、松戸付近と房総半島中部付近の台地を除き、すべて湿地あるいは氾濫原の上に堆積した。それらは下総台地上に常総粘土層として市内の北部に広範に認められる⁽⁶⁾。常総粘土はほぼ平坦に堆積しており、地形の高度差は市内北部域ではほとんどない。つまり、現在の地形変化は、その後による堆積と侵食、隆起によるものである。そして、それは現在も続いているのである。

約10万年前から7万年前に陸化した市内の下総台地は、武蔵野ロームの下部に東京軽石層(TP)を含む。東京軽石層は約10cmの厚さで、白いパミス層として台地露頭でまず目につくものである。常総粘土層直上の小原台軽石(OP)の7万年前から、東京軽石層(TP)の5万年前までは箱根山火山の噴出物で風成ロームを形成している⁽⁷⁾。これらの7万年前から5万年前はウルム氷期(第四氷期)早期にあたる。人類史では旧人の時代、旧石器時代中期となる。現在、南関東では当該期の資料の発見と発掘は行政の調査ではなされていない。しかし、東北地方、特に宮城県内の調査研究の報告は次第に明らかにされて来ている⁽⁸⁾。またそれよりも、さらに古い年代測定結果を有する調査報告書も行政から送り出されている⁽⁹⁾。

武蔵野ローム層下部に位置する東京パミス(TP)・(4万5千年前)から、立川ローム層中位に位置する始良丹沢パミス(AT)・(約2万2千年前)の間はウルム氷期中期にあたる。この時期は氷河期中でも極寒期にあたり、大陸氷河が発達し現海面より140m程低下したと考えられている。図4参照⁽¹⁰⁾。この時期の南関東地方は、現在の北海道札幌などの平均気温であり図1のように日本は大陸の一部であった。東京湾は図3⁽¹¹⁾の様に干し上がり、養老川は青柳付近から東京湾底に溪谷を刻み、古東京川に流れこんでいた。東京湾内の大部分は、20～30mの水深域であるため、ウルム氷期中・後期には常に干し上がっていたと考えられる。また現海底には、埋没している波食台及び立川面が有り、当時の生活の場は現海底域にも及んでいたことだろう。

市原市の所属する千葉県は、房総半島の全域をしめている。約6千年前の縄文海進時には、現利根川・江戸川流域はすべて内湾化したので、正に房総半島は島状化してしまう。また、房総半島は第三紀から第四紀にかけて隆起した新しい大地なので山がない。県内最高峰が標高400m程の非常に起伏が少ない平坦な土地である。そのため大河川も県境界にはあっても県内にはない。つまり、東京湾側へ流れる河川と太平洋側へ流れる河川の争奪が、丘陵上、台地上でおきることになる⁽¹²⁾。その中央部、房総半島東京湾東岸部より、養老川が侵刻している清澄山からの流域が市原市である。図5⁽¹³⁾で見られるように市原市の北部域は下総台地に位置し、南部は丘陵となるのである。それでは現状地理ではどこまで古地理の把握ができるだろう。

2. 市原の先土器時代の環境

市内北部・西部の東京湾東岸は、現在すべて埋め立てられて京葉コンビナートの一翼を担っている。その海岸と埋め立て部分は、図3に示すように-10m以浅の波食台であり、埋没波食台である。この部分は沖積世の海面の上昇とともに海岸となったため、海流の侵食を受け失われてしまった台地部分である。地形図を見ると養老川を中央にして、姉崎、八幡の海岸平野の台地の崖線が一直線になっているのは、縄文海進時までに形成された侵食崖線である。つまり、現在の台地自体は侵食前には2km程海側へ延びていたことがわかる。

図6⁽¹⁴⁾は市原市の地質と河川水系を表わしたものである。市内中心部に南北軸をもつのが養老川である。養老川水系の西側は、椎津川水系と小櫃川水系との分水嶺としてあり、それは袖ヶ浦台地から丘陵と音信山、大福山に連なる。養老川水系東側は、村田川とその支流神崎川との間に市原台地を有し、市原台地から鶴舞丘陵までは一ノ宮川との分水嶺をもつ。南部丘陵は月出付近で標高250m程になり夷隅川の分水嶺を形成している。北西部の養老川河口には、古養老川と呼ぶべき溪谷が青柳付近で-40mの谷を形成している。

図7は図6に現在確認されている遺跡を●印で入れたものである。図8は、図7のA～B点を養老川を中心として作製した比高図である。A点は姉崎面に位置している。A～B点中には南原遺跡⁽¹⁵⁾と図9の中高根南名山地点がある。南名山は標高80mを超えている。また南名山は西に小櫃川の支流松川の開析谷があり東は養老川水系の開析谷がある分水嶺に位置している。そして、南名山の西200mには南原遺跡がある。比高図にも明瞭にわかるのが、養老川の河岸段丘である。▲の上高根貝塚は南総Ⅰ面に位置し、南名山との間には市原Ⅱ面がある⁽¹⁶⁾。市原面は市原層の堆積面であり、武蔵野ローム層に直接覆われている。また南総面では立川ロームのみに覆われている。養老川右岸の土宇東林寺は下原遺跡として調査されている⁽¹⁷⁾。先土器時代の遺物は検出されなかったが、水成堆積の白色粘土層上に5cmの厚さの始良丹沢パミス(AT)を挟んで50cm程の厚さのソフトロームが覆っていた。南総Ⅱ面とされている⁽¹⁴⁾。

図 7 遺 跡 一 覧 表

番号	遺 跡 名	出 典
①	新井花和田	鈴木英啓 1985 市原市文化財センター年報 S59年度
②	雪解沢	国平健三 1978「遺跡周辺の採集遺物」『千葉南総中学校』市原市教育委員会
③	南総中学校	同 上
④	南富士台	近藤 敏 1986 市原市文化財センター年報 S60年度
⑤	大蔵屋	②と同じ
⑥	境	小沢 洋 1985「境遺跡」君津郡市文化財センター第8集
⑦	中六遺跡	S61年度 君津郡市文化財センター調査
⑧	永吉台No.2	豊巻幸正他 1983「永吉台遺跡」君津郡市文化財センター年報No.1
⑨	清水川台	佐久間 豊 1983「清水川台遺跡発掘調査報告書」君津郡市文化財センター第2集
⑩	外迎山	木對和紀 1986「外迎山遺跡」市原市文化財センター年報S60年度
⑪	南原	田村 隆他 1985「市原市門脇遺跡」千葉県文化財センター及び註16を参照
⑫	南名山	層位のみ記録
⑬	上高根貝塚	縄文後期の地点環状貝塚 上高根字塚越に位置する。
⑭	土宇	田川 良 1979「千葉県市原市土宇遺跡発掘調査報告」日本文化財研究所
⑮	上原台	大村 直 1986「奉免上原台」市原市文化財センター年報S60年度
⑯	諏訪台	S61年度調査
⑰	天神台	1984「先土器時代」房総考古学ライブラリー(財)千葉県文化財センター
⑱	西広貝塚	西田道世 1977「西広貝塚」上総国分寺台調査団
⑲	小田部新地	山口直樹 1984「小田部新地遺跡」市原市文化財センター年報S57・S58年度
⑳	持塚	田村 隆他 1984「先土器時代」房総考古学ライブラリー(財)千葉県文化財センター
㉑	台C地点	㉑と同じ
㉒	西谷	㉑と同じ
㉓	祇園原貝塚	㉑と同じ
㉔	巳ノ輪	㉑と同じ
㉕	稻荷台	㉑と同じ

②⑦	上細工多	宮本敬一 1985「能満上細工多遺跡」市原市文化財センター年報S59年度
②⑧	大厩	古内 茂他 1974「大厩遺跡」千葉県企業局
②⑨	菊間手永	近藤 敏 1983「菊間手永貝塚」市原市文化財センター年報S58年度
③⑩	菊間	斉木 勝他 1974「市原市菊間遺跡」千葉県企業局
③①	草刈(F区)	1986「草刈(F区)遺跡」千葉県文化財センター年報No.11 1985
③②	草刈六之台第2次	1983「草刈六之台遺跡」千葉県文化財センター年報No.7 1981
③③	ナキノ台	1983・84「草刈ナキノ台第1次, 第2次」千葉県文化財センター年報No.8・No.9 1982・1983
③④	ばあ山	1980「野馬掘遺跡・ばあ山遺跡他」千原台ニュータウン1 千葉県文化財センター
③⑤	野馬掘	同 上
③⑥	押沼大六天	1984・85「押沼大六天遺跡」千葉県文化財センター年報No.9・10 1983・84
③⑦	バクチ穴	1983「バクチ穴遺跡」千葉県文化財センター年報No.7 1981(これは千葉市内)
③⑧	草刈遺跡群	1982・83「草刈遺跡・中永谷遺跡・草刈遺跡C区・D区」千葉県文化財センター年報No.6・No.7 1980・81

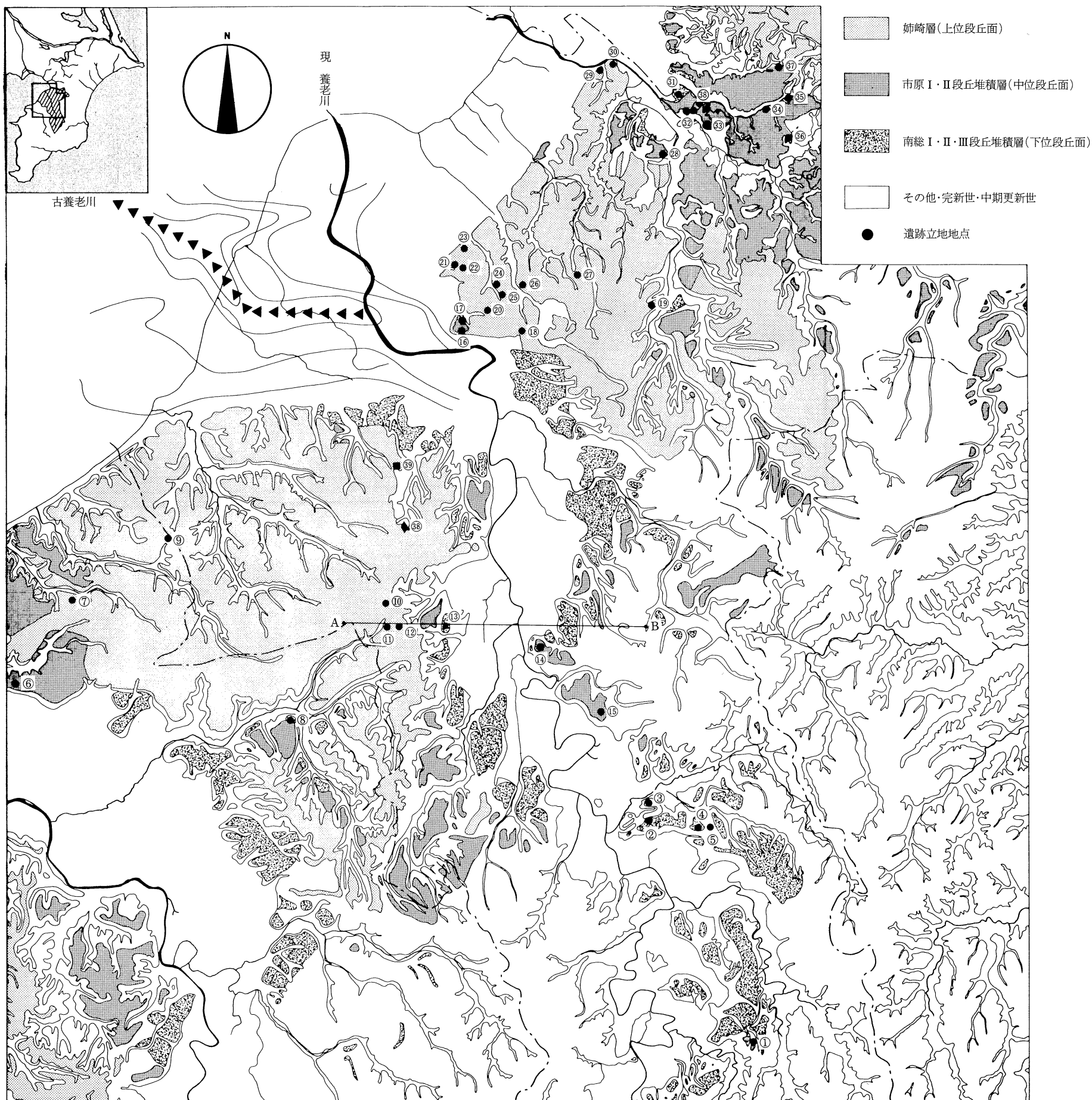


図7 市原市の地質と遺跡分布

図 8 の比高図の A B 間は約 6.7 k m あり、その内標高 10 m 以下の沖積地は 1.7 k m ある。養老川左岸(西岸)の姉崎面の分水嶺標高が約 80 m、市原Ⅱ面とされる河岸段丘面が約標高 70 m、南総Ⅰ面とされる河岸段丘面が標高 50 m である。右岸(東岸)においては、丘陵部で標高 130 m を超え、市原Ⅱ面では約標高 70 m、南総Ⅰ面では約標高 50 m、南総Ⅱ面では約標高が 30 m となっている。両岸ともに河岸段丘面の標高対比は、市原Ⅱ面 70 m、南総Ⅰ面 50 m、南総Ⅱ面 30 m とうまく正合している。

以上引用を多用して説明したが、ここでまとめてみよう。古東京湾時代後半より、市原は海水から淡水、そして水流の速い状態の湖沼から水流の遅い沼沢に移り、一部は離水をはじめる。この時期は姉崎層が堆積した時代で、姉崎層の一部は木下層最上部と同時異相の可能性がある⁽¹⁸⁾。木下層中には市内引田においてニホンムカシジカの発見が報告されている⁽¹⁹⁾。木下層は間氷期に堆積した谷埋め層であり、海退期に谷が形成され海進期に埋積された層のことである。また姉崎層の上部にナウマンゾウの化石が同地区で発見されている⁽²⁰⁾。姉崎層の上層には、常総粘土⁽¹⁴⁾がある。この凝灰質粘土層は、下末吉ロームの上部に対比されるもので火山灰が水中に堆積したものである。粘土層上以上は、新期段丘堆積層及び新期関東ローム層である。常総粘土層堆積以降は(7 万年前)陸化することになる。「市原台地内の国分寺台は、古東京湾に注ぎこんでいた、かつての養老川のデルタが陸化することによって形成される⁽²¹⁾。」つまり、武蔵野台地が多摩川の扇状地によって形成されたものと同様である。

新期段丘堆積層及び、新期関東ローム層については^(14, p 99)に詳細にあるが、ここで概略しておく。市原面は武蔵野ローム・立川ローム層の全層準をのせるため、武蔵野面に相当する。しかし、市原Ⅰ面は市原Ⅱ面より段丘面が高く、小原台軽石(OP)の段丘堆積層にのる。市原Ⅱ面は三浦パミス(MP)を基底部に含み、武蔵野ローム層に整合に覆われる河岸段丘堆積層である。南総面は立川ロームのみのせる河岸段丘面である。つまり武蔵野台地での立川面にあたる。南総Ⅰ面は、下部暗色帯(BBⅡ)を含む立川ロームをのせる。南総Ⅱ段丘面は、上部暗色帯(BBⅠ)以上をのせる河岸段丘面で、下部に始良丹沢火山灰(AT)を挟むことがある。南総Ⅲ段丘面は、立川ローム層最上部のソフトロームのみのせる河岸堆積層である。以上が新期関東ローム層と段丘面の関係である。しかし南総面より下位には、段丘面に風成褐色ロームをのせない、久留里面群がある⁽²²⁾。これらの中で最上位の久留里Ⅰ面上には、黒ボク土があり火山灰起源のスコリア等が観察されているので、久留里Ⅰ面は先土器時代最終末に相当する遺物を有する遺跡があるかもしれない。以上のことから、市原の先土器時代(旧石器時代)は、陸化する 7 万年前を境に以前・以後で全く環境が異なることがわかる。7 万年前以前の姉崎層時代には、水流のある湖沼地形の状態があり、ニホンムカシジカや、ナウマンゾウがおり、さらに離水する過程で沼沢化して、常総粘土層が形成された。7 万年前頃には陸化して平坦な平

原状態があり、養老川をはじめとする水系によって侵食がはじまり、隆起しながら起伏を形成していく。数度の海面変動によって段丘化する状況がつづき、その間主として箱根山を起源とする火山灰の降灰が、今日に見られる台地、丘陵を形成するのである。

3. 市原の層序と遺跡

図7は現在までに報告されている先土器時代遺物の出土例がある遺跡の分布図である(一覧表参照)。分布は北部に集まるが、これは大規模開発に伴う調査によるものである。しかし、市原市草刈一帯の千原台ニュータウン地域の発掘調査では非常に密度が高い先土器時代の包含層が発見されており、先土器時代の遺跡群を形成している。また、それと同様な立地条件で遺跡が多いとされているのは、市原台地北西部から南にかけての国分寺台の一部であり、やはり、先土器時代の遺跡群を形成していたと考えられる⁽²³⁾。

市原市の立川ロームの基本的層序は、基本的には武蔵野台地と変化がない。武蔵野台地でのローム層下の調査経験があれば十分理解が可能である。しかし、ローム層序自体が地質学の分野では分離不可能とされる部分まで行なおうとしているので、考古学的な概念規定で便宜的に層序を作ること多いだろう。千葉県においては、先土器時代の調査が房総半島の中での下総台地、特に北総地域が主体に進められて来たため、村田川以南の下総台地、特に上総地域の先土器調査の遅れは10年余りになる。ここでは、調査のテストピットで得られた立川ローム層の断面図を基礎に、橋本勝雄氏(1983)の指摘⁽²⁴⁾を検証してみたい。

図9の⑫は中高根南名山のローム層序である。近接した遺跡として南原がある。南原は縄文時代草創期の出土遺物が有名である。それらの遺物はソフトロームの上層の上部から出土し、ソフトローム中には包含層を有していなかった⁽²⁵⁾。これらの草創期の遺物の包含層の下ソフトローム中からは、数点の先土器時代の遺物が出土している⁽²⁶⁾。図9からのローム層序は1/80を原則としており、例外はスケールを付した。図9の⑫の南名山の層序は、市原市内の立川ロームの層序の基本形をなすものである。Ⅰ層は表土層であり、黒褐色を呈す、耕作土の場合は灰褐色を呈すこともある。Ⅱ層は暗褐色土層で縄文時代以降の包含層になることが多く、分層の可能である場合、a, b, cと分離する。Ⅲ層は武蔵野台地と同様に、黄褐色ソフトローム層である(淡トーン)。上層とは漸移的な移行となることが多い。Ⅳ層は明褐色(黄土)ハードローム層であり、赤色、濃青色のスコリアを混入する。Ⅲ層とⅣ層間には不連続な面を有する。Ⅴ層は暗褐色(コーヒー牛乳)で武蔵野台地Ⅴ層第一暗色帯(第一ブラックバンドBBI)に相当する。橙色、濃青色スコリアを混入する(中間トーン)。Ⅵ層は明褐色ローム層で武蔵野台地Ⅵ層に相当し、始良丹沢パミス(AT)を含む層である。全面に明るく、火山ガラスが光る様であるが、純層はない。赤色、濃青色スコリアの大粒3mmφが目立つ。このⅥ層相当層

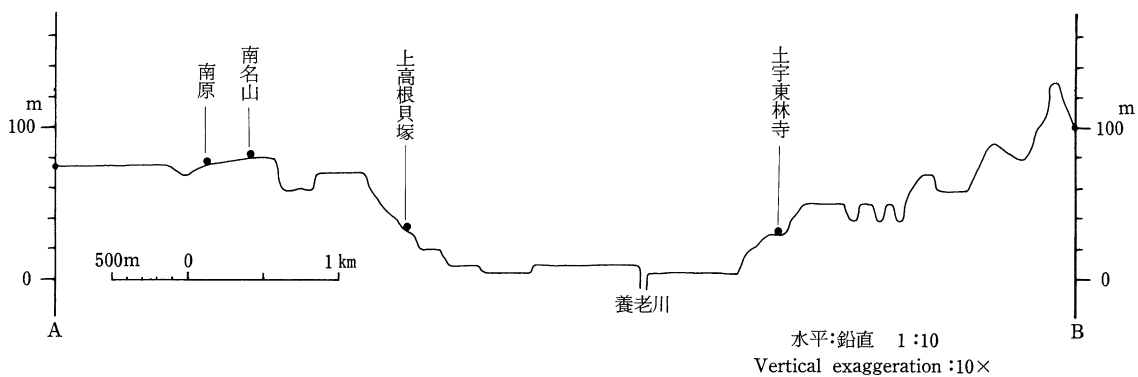


図8 図7A・Bの比高図

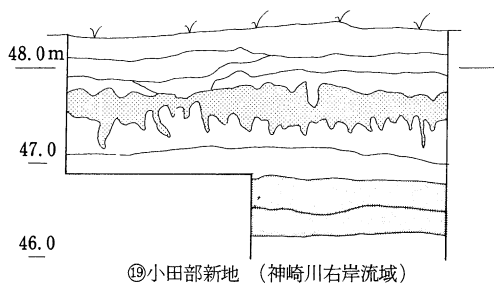
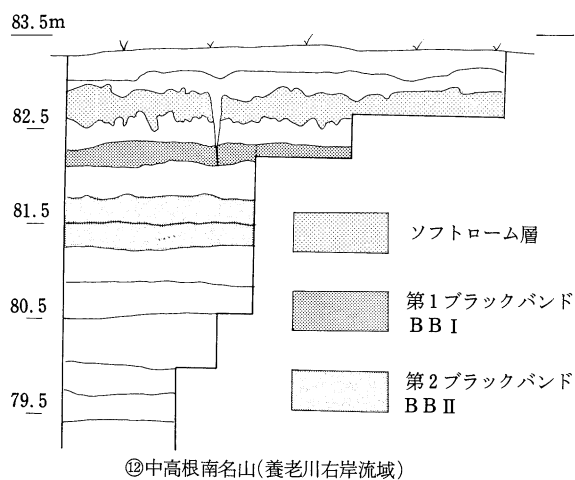


図9 ⑫⑬立川ローム断面図

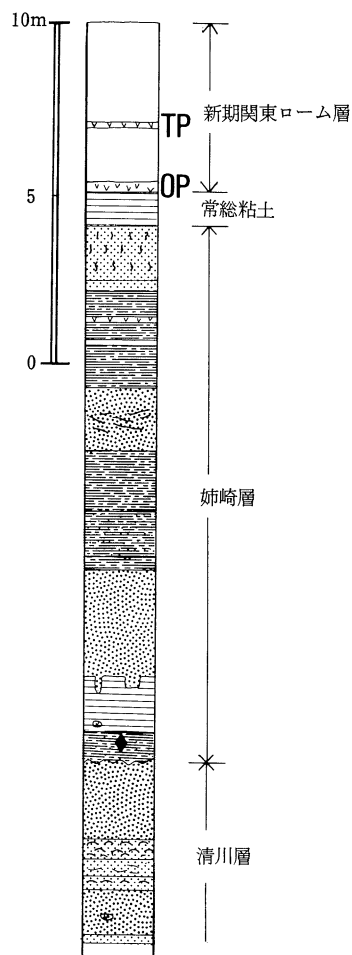


図10 ⑭市原市引田露頭地質柱状図(シカの会)

は、橋本氏の指摘のとおり、武蔵野、大宮台地に比べて幅広く2～3倍の層厚を有する。市内にも図16千草山のように、ブロック状に水平堆積をするATが発見されているがVI層中の位置については検討されていない。「シンポジウム房総の先土器時代」において織笠昭氏の指摘⁽²⁷⁾のように立川ローム層中のATの層序はそのATの位置によって石器の所属が変容してしまう。特に指摘されたとおり、武蔵野台地に比較して不思議なほど層厚があるのは、VI層という文化層を再考しなければいけないだろう。また橋本氏の指摘のようにVI層下にVI'層を設ける必要もあるだろう。しかしATが本来VI層中のどこに位置するかは、条件のよい遺跡と伴う石器群との比較が重要なポイントになりそうである。それには、VI層の層厚が安定し、AT層の純層が確認できる上総地域の先土器の調査を充実していくことが必要になるだろう。VII層は暗褐色ローム層の武蔵野台地VII層に相当し、第二暗色帯上部(第二ブラックバンド上部BBIIU)に比定される、赤色、橙色、濃青色スコリア、白色細粒が入り、スコリアの量が増す。VIII層は暗褐色ローム層の武蔵野台地IX層に相当する第二暗色帯(第二ブラックバンド下部BBII L)に当る。普通はBBIIUより暗色だが、ここではBBIIUより明るい。BBIIUとBBII Lの間には、武蔵野台地のVIII層に相当するスコリア層があるが、市原では層としては観察できない。しかし、BBIIUとBBII Lの境界部分には赤色スコリアの集中が認められる。そのためスコリア集中部分でBBIIUとBBII Lの分離が可能な場合がある。IX層は褐色ローム層となり、武蔵野台地X層に相当する。赤色、濃青色スコリアが混入、濃青色スコリアは小さくなる傾向がある。X層は、褐色ロームであるが粘性を帯びる。赤色スコリアの細粒が若干みられるが、青色スコリアは少なくなる。XI層は灰色がかった褐色ローム層であり、赤色スコリア等の細粒が入り砂質になる。削りを入れるとシャリシャリと音がする。XII層は褐色ローム層でやや硬質となる。上層からの鎌入れの際抵抗があり、ひっかかりがある。砂ぼつくなる様であるがスコリアが細粒で多く全面に入るためだと思われる。XIII層は下部まで掘り込まなかったので層厚は不明であり、褐色ロームとなる。さらに硬くなり、赤橙色、濃青色スコリアを混入している。以上が南名山の基本層序である。4m以上掘削したが東京パミスは発見できなかった。図10は引田のニホンムカシジカの化石産出地点の地質柱状図である⁽¹⁹⁾。TPの下には小原台軽石層があり以下常総粘土となる。引田は南名山と同一尾根上にあるので同一層序をとると考えられる。ムカシジカの出土層位は◆で示す木下層中にある。TPは市原市内においては乳白色の軽石層で粒もよくそろっていて層厚は10cm程あり、軽石層の上下によく風化した白色粘土がある。これは陶土に最適で、遺跡において採掘穴が発見されている。OPは小原台軽石層で、水気があれば橙色を呈し、乾燥すると白っぽくなる。アラズナのような軽石で発見しやすい。

図9⑱は、小田部新地遺跡である。黒曜石製のナイフ形石器を表採したためテストピットを設けたが、剥片数点をVI層より検出したのみであった。BB Iは明確でなかったが、BB II

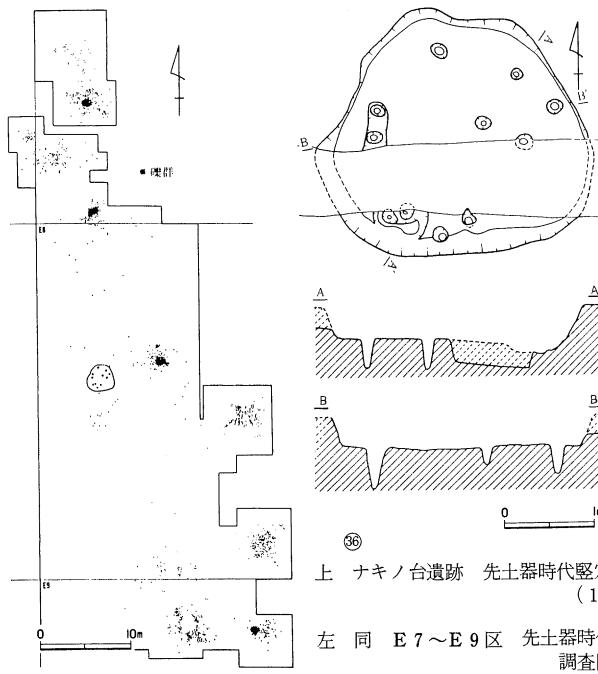


図11

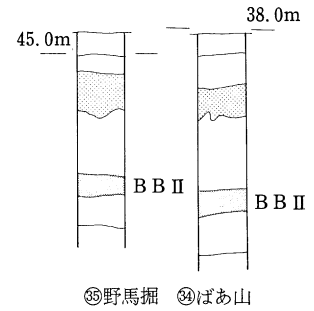


図12

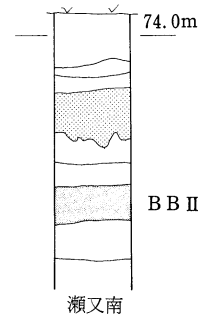
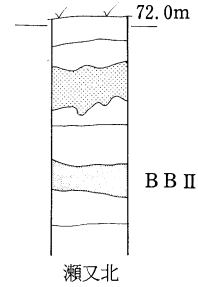
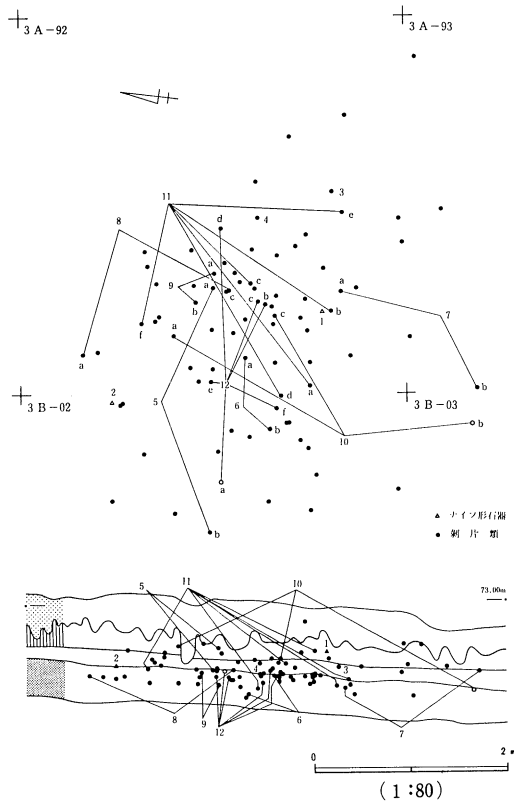
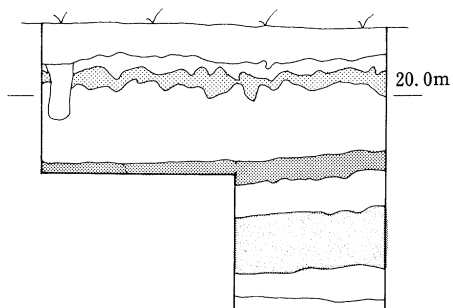
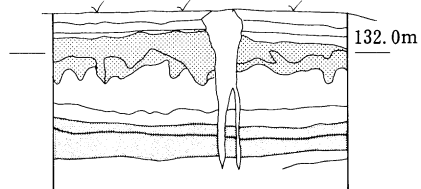


図13

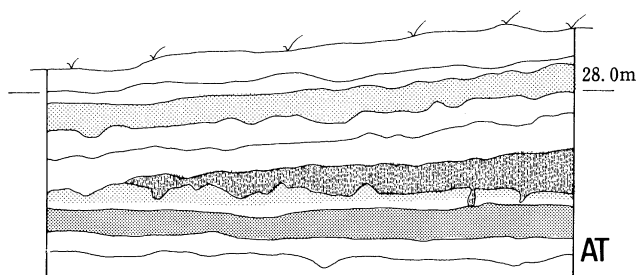
瀬又南遺跡 第3ユニット遺物出土状況図



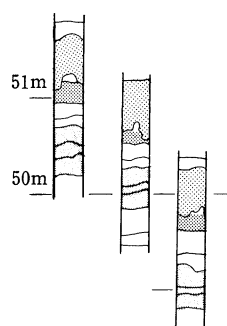
② 菊間手永
図14



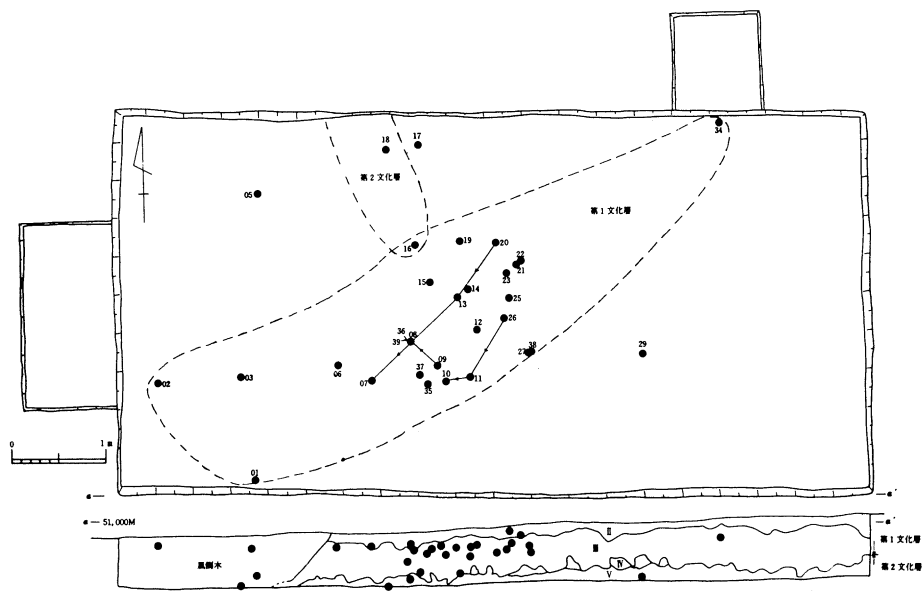
① 新井 花和田
図15



能満 千草山
図16

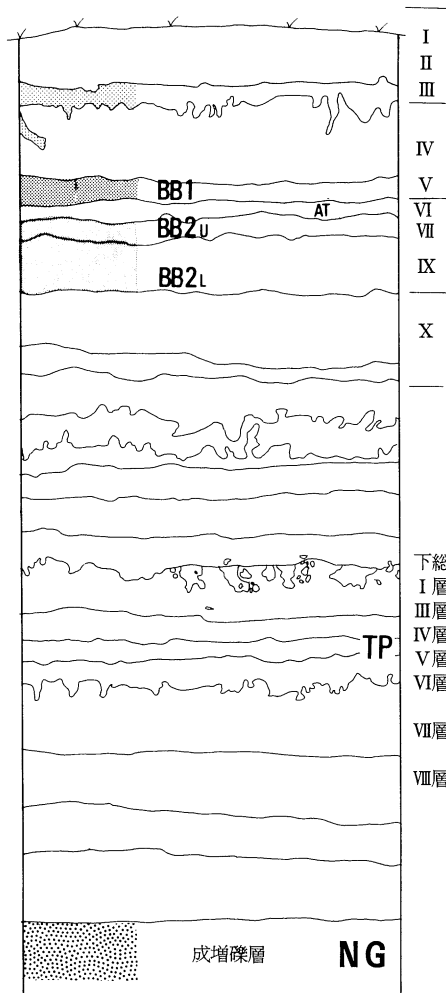


⑨ 清水川台
図17

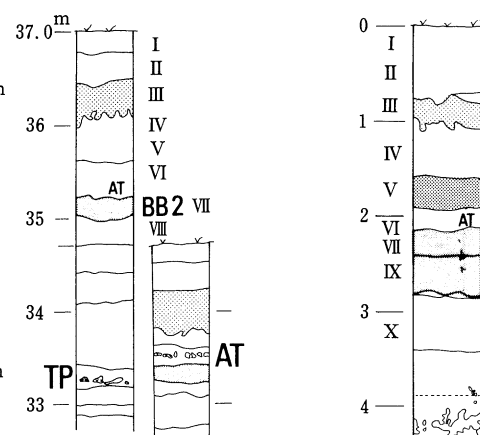


袖ヶ浦町清水川台 I ブロック 遺物分布図及び出土層位

(1:80)



①東京・鈴木遺跡の層位 図18

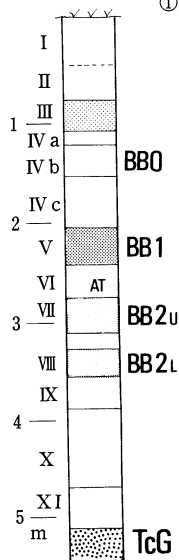


②千葉・星谷津遺跡の層位 図19

下総台地の立川ローム層位の標式となった。

- I層 表土 II層 暗褐色土層
- III層 黄褐色軟質ローム層
- IV層 黄褐色硬質ローム層。クラックの発達が著しい。
- V層 IV層と肉眼的には本遺跡では分離不能。
- VI層 黄褐色硬質ローム層。IV層より明るく、乾燥すると白味を帯びる。
- VII層 暗褐色ローム層。黒色の微細粒を多く含み、粘性が強い立川ローム第II黒色帯。
- VIII層 黄褐色ローム層 立川ローム最下部。スコリアを少量含む。

③東京・高井戸東遺跡の層位 図20



④東京・野川遺跡の層位 武蔵野台地 立川ローム層位の標式となった

- I層 表土 II層 黒褐色土層
- III層 黄褐色軟質ローム層。いわゆるソフトロームで30cm程の厚さをもつ。下底部は凹凸が激しく次のIV層と不連続線を示す。
- IV a層 褐色硬質ローム層 III層と不連続面で接した赤色スコリアを多く含む。
- IV b層 暗褐色ローム層 暗色帯 (Black band) でBBOと呼ぶ。
- IV c層 灰褐色ローム層 いわゆるハードローム最下部にあたるもので白味が強く粘性がない。
- V層 暗褐色ローム層 立川ローム第1黒色帯 IV bと比べると濃く粘性がない。
- VI層 黄褐色ローム層 砂質の白っぽいローム。
- VII層 暗褐色ローム層 立川第2黒色帯。比較的粘性強くチョコレート色を呈す。
- VIII層 橙褐色ローム層 スコリア層を想わせる明るい色調の粒子の粗い層
- IX層 暗褐色ローム層 立川第2黒色帯下部にあたる、VII層と比べると粘性黒味ともに強い。
- X層 褐色ローム層 やや軟質のローム層。
- XI層 黄白褐色ローム層 Xより軟く下部では砂層に近くなる。

図21

中の野川遺跡Ⅷ層のスコリアの集中は確認できた。図11、12、13は村田川右岸域の遺跡である。ナキノ台遺跡は、市原市内ではじめて発見された先土器時代の堅穴状の遺構があり、瀬又北、瀬又南⁽²⁸⁾は、市原市内で最初に報告された先土器時代の遺跡である。図13はⅥ層A T～Ⅶ層B B II Uの遺物として報告されている。図13のⅥ層A Tもかなり厚く報告されている。

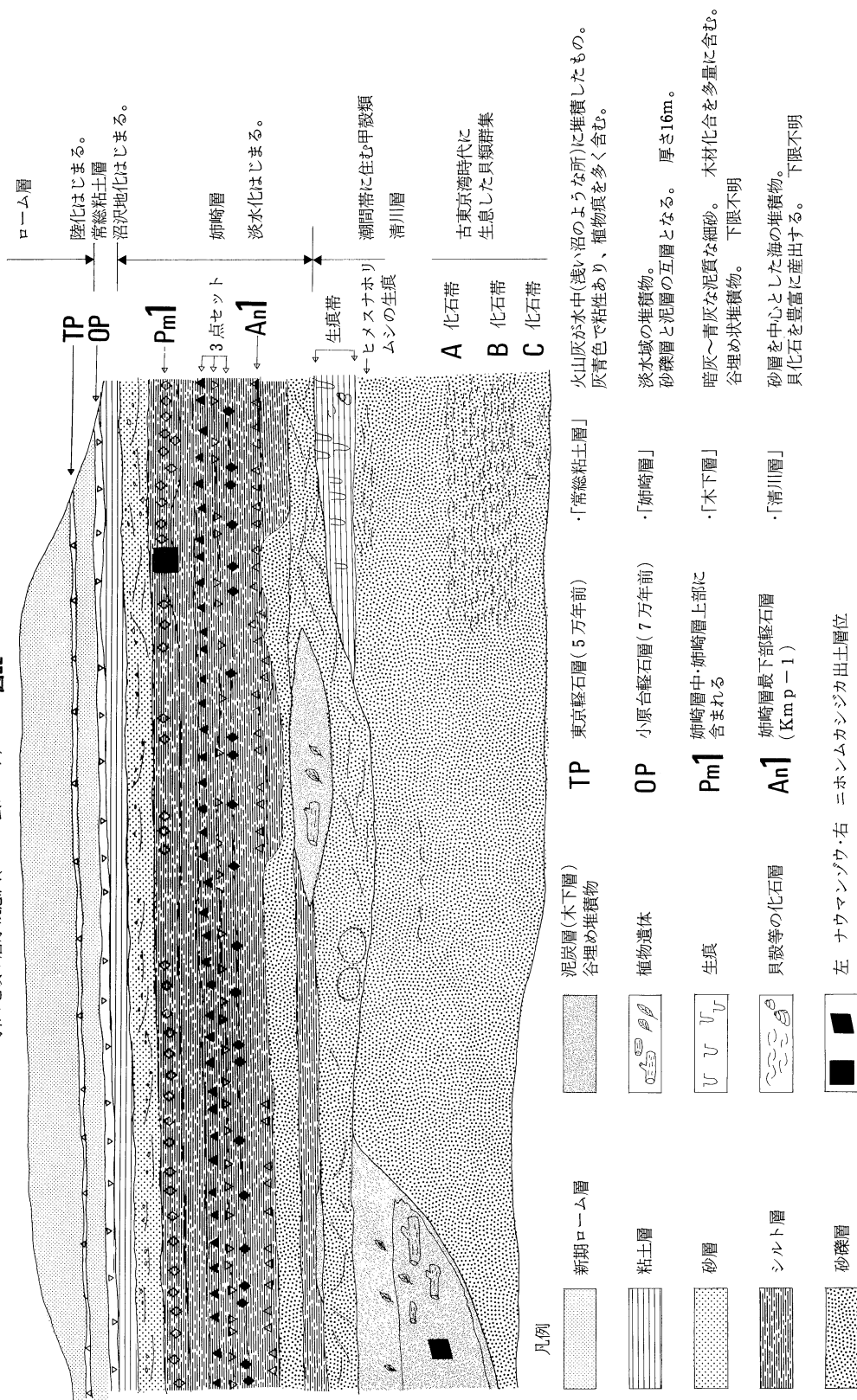
村田川左岸流域では、まとまった報告がない。菊間遺跡⁽²⁹⁾、大厩遺跡⁽³⁰⁾には表採資料としてナイフ形石器、木葉形槍先形尖頭器等の報告がある。菊間手永貝塚遺跡ではナイフ形石器が表採されたので、プレのテストピットを設けたがその他の遺物は発見できなかった。図14は手永の断面図であるが、ハードローム層Ⅳ層とB B I とB B II 間のⅥ層が異状に層が厚い。

図15の新井花和田遺跡⁽³¹⁾は養老川の上流域の標高130mの市原Ⅱ面に位置する層序である。先土器時代の資料の検出はなかった。B B I はとらえられず、B B II はA T 相当層下に観察された。図16の能満千草山遺跡は市原台地中央、新田川の源流部にある。緩斜面には縄文時代の黒ボク土上に新期褐色テフラをのせている。黒ボク下にわずかにソフトロームがあり、ハードロームⅣ層に移行する。B B I が厚くあり、A T 層Ⅵ層がある。A T はⅥ層中にブロック状に広範囲に分布していた。

袖ヶ浦台地には、図17の清水川台遺跡⁽³³⁾が小規模な2つの文化層を有している。Ⅰ文化層はソフトローム中にあり、Ⅱ文化層はB B I 中にあるようだ。またここでは、厚いⅥ層A T をⅥ' と2つに分離して報告している。袖ヶ浦台地は近年発掘調査が急速に進められており、永吉台、中六遺跡等、有望な包含層を有した遺跡の調査がある。

市原市周辺の立川ロームの層序を概略で説明した。比較に武蔵野台地と北総台地の層序を示す。図18は東京鈴木遺跡⁽³⁴⁾の層位である。東京都内の先土器時代の大規模調査の発端となった遺跡である。立川、武蔵野、下末吉ロームをのせ成増礫層が基底にある。武蔵野ロームと下末吉ローム中に暗色帯を確認している。図19は佐倉市の星谷津遺跡である。下総台地の北総地域の標式層位となった⁽³⁵⁾。鉦物分析等を本格的に行なって、武蔵野台地と下総台地の層序の関連を明確化した。図20は高井戸東遺跡の基本層序である。立川、武蔵野ローム層をのせ、武蔵野礫層まで確認している⁽³⁶⁾。鈴木遺跡は標高73mを超えており、高井戸東遺跡は47mを計る。図21は武蔵野台地の先土器研究の発端になった野川遺跡である。野川遺跡は立川ローム層が立川礫層を覆っている⁽³⁷⁾。標高は48mを計る。この4遺跡は、個々異なった段丘面に立地するが立川ロームについてはほぼ同様な所見を有している。同じ火山を供給源にもつ火山灰の降下層序は基本的に同じである。このことについては異論はないだろう。しかし、供給源からの位置と降下地の立地は多様である。この多様さを考古学的所見と調査で調整する必要がある。

引田地域の層序概念図(シカの会1986年) 図22



おわりに

図22は引田地域の層序概念図である⁽²⁰⁾。この引田の大露頭の中に市原の多くの歴史が刻まれている。市原化石ジカ研究グループによるニホンムカシジカの研究は現在も継続中である。大分県代ノ原遺跡(稲田1983)のようなナウマンゾウが埋まっている遺跡が市原にも存在するかもしれない。またニホンムカシジカが生息していた環境があれば、10万年以上前に人類が市原にいた痕跡がある可能性がある。事実ナウマンゾウやオオツノジカは大陸における人類の狩猟対象になっていたからである。図23は第四紀の動植物の変遷図である⁽²⁰⁾。ニホンムカシジカは、ニホンジカの系統にあることがわかる。ナウマンゾウは南方系の動物でかつての温暖期には海岸近くに棲息していたが、早期ウルム氷期の高冷地にも進出し、北方系のヘラジカや野牛、オオツノジカと共棲して、野尻湖に出土例がある⁽¹⁰⁾。引田の場合は初期のリス、ウルム間氷期の産物であると地質年代は語っている。しかし、環境適応をしながらナウマンゾウは、ウルム氷期最盛期まで日本に生息し、2～3万年前に絶滅したのである⁽¹⁰⁾。それらの動物化石は千葉県内でも多産しており、人類とのかかわりも古いと考えられる(金子1986)。図24、25、26は当時の動物の姿を今に伝える化石標本である。

市内の先土器時代の環境から、自然地理、特に地質地層について概観してきた。地質地層は私にとって専門外である。そのため誤用・誤認も多いと思う。しかし全く専門外にしてしまうと先史時代、特に旧石器の研究は成立しないだろう。素人の地質地層の研究者が、考古学の研究調査ということで地面深く掘り込むのである。第四紀の研究が盛んになることによって、自然科学の研究者が人文科学の考古学研究者と共同で研究をはじめたばかりである。物質文化の研究をする考古学が、研究深化するうちに自然科学の成果を取り込み、なお自然科学との成果の交換が可能になれば望ましいだろう。埋蔵文化財の調査研究は、それらの科学の交流の場になりつつある(参考文献①②)。

市原市内の旧石器の資料は、千葉県文化財センターの発掘調査が村田川より南下することによって飛躍的に増加することだろう。しかし、養老川流域全域をカバーする市原市という地域研究(AreaStudies)は、地域研究者が専門学問分野(discipline)を個々進める内に地域研究を総合し、多専門的(multidisciplinary)又は、学際的(inter-disciplinary)に統合すべきで、空間的なひろがりとしての地域を地理的な概念としてでなく、時間の蓄積としての実存として対象にしたいのである。県センターの房総考古学ライブラリー1「先土器時代」は、房総半島を地域研究の対象とした、出色の図書である。地域センターの活動は、文化財行政が市民に対する義務として、文化財を共有財産化する一翼を担うものである。

註

- (1) 湊正雄 1980『変動する海水面』(ウルム氷期の日本の古地理)東海大学出版会
- (2) 湊正雄氏原図 Aにマンモス象の北海道への南下。Bに津軽海峡最後の陸化。Cに宗谷海峡最後の陸化。
- (3) 貝塚爽平原図 1975 郷原保真 1975「氷河時代の日本列島」『アーバンクボタ・11』
- (4) 三梨昂 1980「関東堆積盆地の構造とその発達」『アーバンクボタ・18』
木村泰治 1979「市原市の地形と地質」『市原市史(別巻)』市原市教育委員会
- (5) 菊地隆男 1980「古東京湾」『アーバンクボタ・18』
- (6) 小玉喜三郎・鈴木尉元 1980「台地の成立」『アーバンクボタ・18』
- (7) 町田 洋 1978「箱根火山のおいたち」『火山灰は語る』蒼樹書房
- (8) 東北歴史資料館 1981『旧石器時代の東北』展示パンフレット
- (9) 藤沼邦彦・菊地逸夫・小川出 1985『中峯遺跡発掘調査報告書』宮城県文化財調査報告書 第108集 宮城県文化財保護協会
- (10) 郷原保真 1975「氷河時代の日本列島」『アーバンクボタ・11』
- (11) 貝塚爽平原図 1975 羽鳥謙三 1976「第四紀の日本」『日本列島の歴史』新地理学講座 8 東海大学出版会
- (12) 藤原文夫 1979「養老川」『市原市史(別巻)』市原市教育委員会
- (13) 立岩巖監修 1959「千葉県地質図」沼田地質研究所
- (14) 徳橋秀一・遠藤秀典 1984「姉崎地域の地質」(付図)『地域地質報告』地質研究所
国土地理院 1971「姉崎」土地条件図(2つの地図を再編集して原図を作製した)
- (15) 大塚達朗・小川静夫・田村隆1979・1980「市原市南原遺跡第1次・第2次調査抄報」『伊知波良1・4』
- (16) 杉原重雄 1976「国分寺台周辺の自然地理」『南向原付篇』上総国分寺台調査団
- (17) 近藤 敏 1986「土手下原遺跡」『市原市文化財センター年報S60年度』
- (18) 註14 P86 姉崎層
- (19) 市原化石ジカ研究グループ 1986「房総半島北部の上部更新統産出のニホンムカシジカ化石」『地質学雑誌第92巻第11号』
- (20) 市原化石ジカ研究会 1986「日曜ハイキング・氷河時代の化石を調べよう。」パンフレット
- (21) 註16と同じ
- (22) 鹿島 薫 1982「小櫃川流域と養老川流域の更新世末期の地形発達史」『地理学評論55巻2号』
- (23) 田村隆他 1984「市原市根田遺跡」『房総考古学ライブラリー1・先土器時代』(財)千葉県文化財センター
- (24) 橋本勝雄 1983「立川ローム層の層序区分」『研究連絡誌第5号』(財)千葉県文化財センター
- (25) (23)同文献 市原市南原遺跡

- (26) 田村 隆他 1985「市原市門脇遺跡」(財)千葉県文化財センター
- (27) 織笠 昭 1986「シンポジウム房総の先土器時代」千葉県風土記の丘の討論より
- (28) 横山 仁他 1984「市原市瀬又北・瀬又南・千葉市大木戸・板倉町遺跡」(財)千葉県文化財センター
- (29) 斉木 勝他 1974「市原市菊間遺跡」(財)千葉県都市公社
- (30) 古内 茂他 1974「市原市大厩遺跡」(財)千葉県都市公社
- (31) 鈴木英啓 1985「新井花和田遺跡」『市原市文化財センター年報S59年度』
- (32) 田中清美 1986「千草山遺跡」『市原市文化財センター年報S60年度』
- (33) 佐久間豊 1983「清水川台遺跡発掘調査報告書」君津郡市センター第2集
- (34) 戸田正勝 1978「鈴木遺跡Ⅰ」鈴木遺跡刊行会
- (35) 杉原重夫他 1978「星谷津遺跡の自然地理」『佐倉市星谷津遺跡』(財)千葉県文化財センター
- (36) 小田静夫他 1977「高井戸東遺跡」高井戸遺跡調査会
- (37) 小林達雄他 1971「野川先土器時代遺跡の研究」『日本旧石器特集号第四紀研究第10巻4号』

引用参考文献

- R・J. BRAIDWOOD 1969『先土器時代の人類』泉靖一訳 新潮社 ①
- 加藤晋平 1976『マンモスハンター』学生社
- COLIN RENFREW 1979『文明の誕生』大貫良夫訳 岩波現代選書 ②
- 間壁葎子 1979「食生活」『日本考古学を学ぶ第2巻』有斐閣
- 川島利道 1983「先土器時代遺物集中個所の広がりについて」『研究連絡誌4号』(財)千葉県文化財センター
- 稲田孝司 1983「大分県代ノ原遺跡におけるナウマン象加工骨の調査」『日本考古学協会第49回総会・研究発表要旨』
- 小林達雄 1983「層位論」『日本の旧石器文化第1巻 方法論の問題』雄山閣
- 長谷川善和 1983「動物相」『特集日本旧石器人の生活と技術・季刊考古学第4号』雄山閣
- 鈴木定明 1984「ローム層の層序区分と分析について」『研究連絡誌10号』(財)千葉県文化財センター
- 金子浩昌 1986「第四紀の化石獣類」週刊朝日百科・『日本の歴史』(歴史のなかの動物35)
- 一瀬和夫他 1986「日本の旧石器時代の住居－はさみ遺跡から」『考古学ジャーナルNo.262』
- 山田晃弘他 1986「1985年の動行・旧石器時代」『考古学ジャーナルNo.263』
- 澤野 弘 1986「下総台地における立川ロームの層序区分」『シンポジウム・房総の先土器時代』資料

草刈、大和田、永田・不入

——市原市における土器研究をめぐる諸問題——

高橋 康 男

はじめに

1. 草 刈 —型式学的に—

2. 大和田 —「第三の土器」の問題—

3. 永田・不入 —生産体制について—

おわりに

はじめに(図1)

市原市内における、これまでの発掘調査の成果のうち、標記三遺跡をとりあげ、その内容から派生する問題点について明らかにし、今後の筆者としての検討指針を明らかにするのが本稿の目的である。問題点の抽出については、あくまで、出土遺物そのものに内在する点を主眼とし、他遺跡の状況等との比較検討について後日を期したい。

1. 草 刈⁽¹⁾ —型式学的に—(図2)

草刈遺跡から出土した、特徴的な一群の土器については、「草刈型土器」として報告した。その特徴については、須恵器的要素として、器種(坏・広口壺)、ロクロ整形が認められ、土師器的要素として、酸化炎焼成、赤彩を施す点を挙げることができる。遺構に伴うものではなく、年代については共伴関係の検討が困難であるが、須恵器の年代綫を援用して、6C前半としておくのが妥当ではないかと考えられる。あえて「草刈型土器」とし、「須恵器」「土師器」といった名称を冠さなかった点については、上述のような特徴を有するところによる。「赤焼き須恵器」あるいは「ロクロ土師器」といった形で表現することも論理的には可能であったが、土師器・須恵器ではない「第三の土器」として措定し得るかどうかの検討も踏まえた後からでも遅くないと考えていたため、このような名称とした次第である⁽²⁾。

ここで「第三の土器」としての措定の可能性について型式学的に考えてみたい。

歴史学の一般的なあり方として、通時の事象、共時の事象の複合体としての歴史事象の分析および、それら具体的事象から抽出される、社会的な動態、さらにその歴史の流れと平行する理論的側面の構築が置かれる。考古学においては、その時間軸の設定のために土器が用いられ

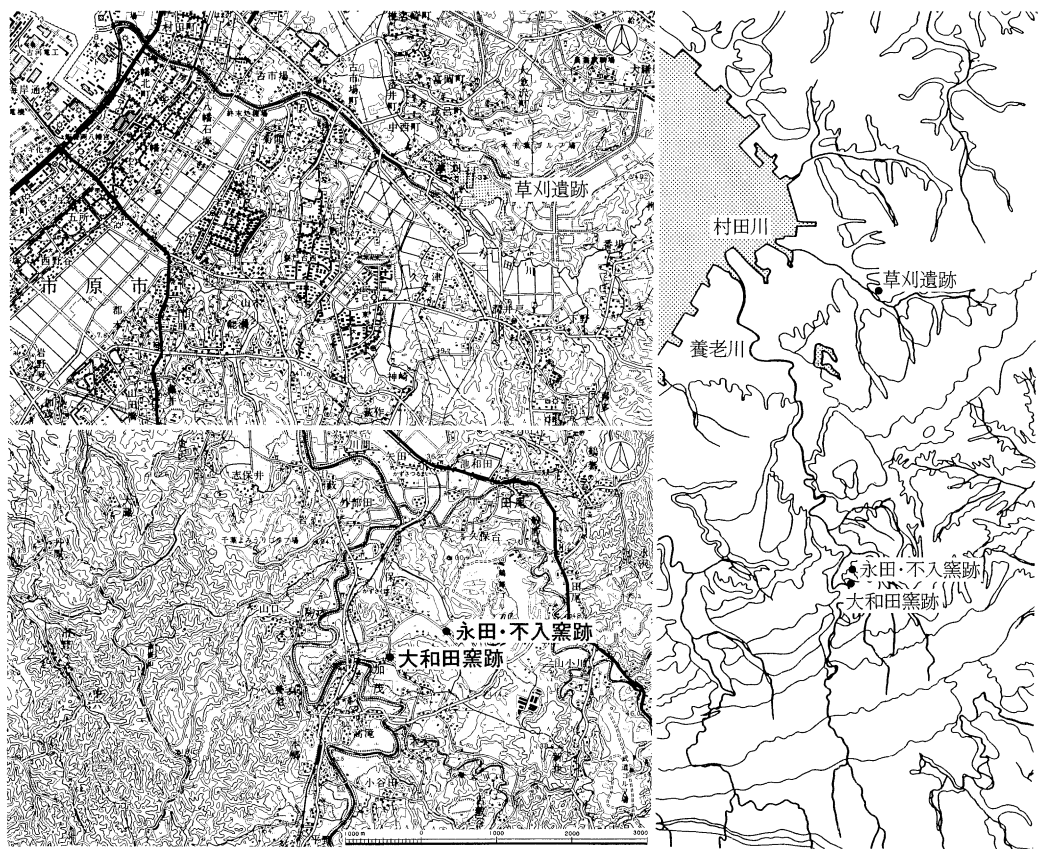


図1 草刈遺跡、大和田窯跡、永田・不入窯跡位置図

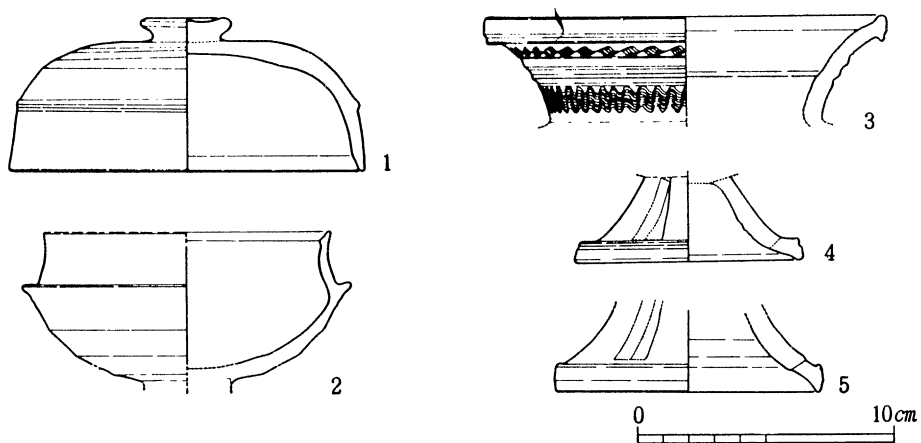


図2 「草刈型土器」

ることは言うまでもない。より広い範囲における時間軸の設定のためには、その範囲をカバーし得るだけの普遍性を有する物である必要がある。さらに、その空間における形態変化の同一性が認められることも不可欠であろう。このような、時間軸設定のために相対的年代決定法がとられる。さらに、型式学的検討をふまえた上で、土器編年が行なわれ、1つの時間軸が与えられることとなる。ここで、論点がややずれるが、型式学的方法論とそこから生じる問題点について指摘しておくことにする。

型式学が有効であるために、ある種の土器(形式)が時間の変化に伴って、形態的な変化を生じているといった具体的な事象がまず存在し、ある形式が、まったく異なった形式にとってかわっている必要がある。徹視的には微妙な変化の積み重ねによるものが、より長い年月の中で当初の形からはかけはなれたものになる。したがって、考古学の発達過程においては、その相互にかけ離れた形態の土器群を抽出することから始められ、それは多分に恣意的に抽出される。さらに、その任意に抽出された群同士をつないでいくためのさらなる細分が行われることになる。恣意的と言うと語弊があるかもしれないので、典型的と置き換えた方がいいかもしれないが、その典型的な共時的な土器の総体が縄文土器でいう「型式」、弥生土器でいう「様式」であると考ええる。このような時間的な横ならびを構成する様々な器種は、それ自体独自の形態変化を遂げている可能性があり、また編年の細分が進むにつれ、その領界がぼやけ、連続性のみが現れてくるのは、当然の帰結であると考えられる。切り取ってくる時間の間隔が短いほど、差異の抽出は困難となる。

さらに、型式学については、よく生物学的な進化論になぞらえて言われる。これはイコールの関係ではないことは言うまでもない。むしろ、土器が人間を介して生産される点からしても留意してかからなければならない部分がある。ただ、生物学的な進化論をそのまま援用するわけにはいかないにしても、進化そのものが、突然変異の積み重ねであることは考慮しておいても良いのではないか。遺伝子レベルの話を土器の変化に結びつけるわけにはいかないが、次の点を視野に入れておく必要が生じる。すなわち、新たな土器の出現によってそれまでの土器が全くとってかわられるものではないことである。時間の経過とともにまったく姿を消すではあるだろうが、問題とする時間の幅が短いほど、新旧両様を包み込んでいる可能性が高くなると考えられる。つまり、新種が旧種にとってかわる、いわば「淘汰」の時間を必要とすることを念頭に入れておかなければならない。ある形の土器の型式序列と、実際の共時的様相は、一致しないのである。型式学的序列そのものは、型式出現の序列を示すにすぎないのであって、新旧2者あるいはさらに複数の型式の共存を排除し得ないと考えべきであろう。そもそも、型式序列の設定には、共伴関係による検討が不可欠なのであって、このことは新旧両式の併存が前提である。

より広範囲にわたる共通の時間軸を設定するためには、遺跡ごとあるいは小地域における個性を捨象せざるを得ないのは仕方のないことであるが、その作業により組み立てられた、時間軸は、それ自体抽象的なものであることに常に留意しておく必要がある。昨今、広く行われている諸シンポジウムや、個人的な会話において、たとえば土器一点について、実年代で25年幅の中で捉えがちな傾向については、慎重にならざるを得ない。理念的な形式の出現の序列と実際の生産あるいは消費における様相が一致していると言い得るかどうか、それ自体の検証を必要とするはずである。一つの土器について、実年代観が数十年も隔たってしまうような現象が見出されるのは、一つの土器形式そのもののもつ年代幅についての理解が欠如している場合もあり得るのではないかとと思われる⁽³⁾。編年作業の過程の中で捨象される、多様な共伴関係が「編年表」の中に表れてこないところに一つの問題がある。

論点を「草刈型」に戻す。問題は、既述のような特徴をもつ土器をこれまでの研究の中でどのように位置づけるかにかかっている。少なくとも、類例の報告が周辺地域においては認められない。また、前代あるいは後代にかけての連続性は認められないのであって、これまでに発表された、いかなる編年表の中にも組み込めない土器と言っても過言ではなかろう。あえて組み込むとしても、「枠外」の存在である。諸属性の総体として見れば「第三の土器」と考えることには問題がないと考えられる。なお、「第三の土器」については、次項でも触れる。

「第三の土器」とすること自体には問題がないとしても、一体どのような経緯をもって出現したかが次の問題として浮上する。土器の生産体制そのものについては、いまだに不明な点が多い。土師器にしても須恵器にしても同様である。それぞれの土器における地域相あるいは編年については、研究が進んでいるが、体制そのものについては、不明と言える。この点については、後項で述べることにする。ただ、報告書でも触れたように、土器生産者の独自の生産という形は考え難く、需要者側の要請があったものと理解しておきたい。在地の生産か、他地域からの搬入かはこの際問わない。少なくとも、「第三の土器」に対する需要者側の要請を受けて、生産者からの供給があったことだけは間違いなかろう。それが、一地域のわずか一時にすぎないところでしか認められないことは、より広い範囲にわたる要請にまで至らなかったか、要請に対応し得る条件が、生産者側に欠如していたとも考えられる。多分に抽象的な言い回しとならざるを得ないが、現時点においては、これ以上の論及は行ない得ない。

2. 大和田⁽⁴⁾ —「第三の土器」の問題—(図3・4)

大和田遺跡は、古墳と横穴と窯がほぼ同一地点に営まれた、極めて珍しい遺跡と言える。ここでは、この窯跡およびそこからの出土品を中心に話を進め、上に述べた「第三の土器」についても触れることとする。

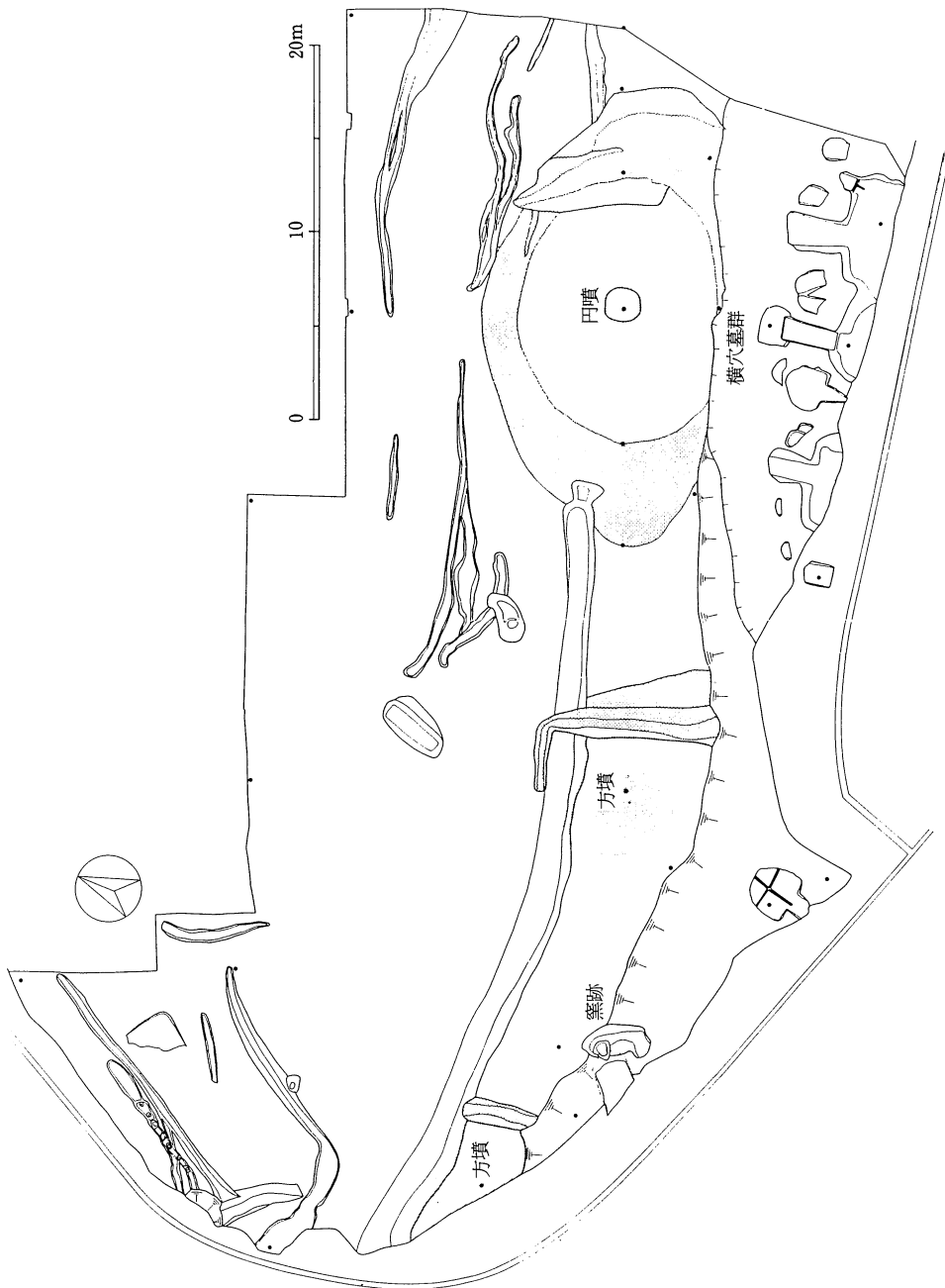


図3 大和田遺跡遺構配置図

大和田窯は、窯体の下半が後世の切り通しにより欠失しており、窯体上半のみが残存していた。また煙道部上方から東下方にかけて排水溝がのびていた。窯体は還元状態が十分ではなく、窯体内および排水溝底部から出土した遺物も焼成の状態は極めて悪い。同遺跡の整理報告については、昭和62年度に予定されているので、詳細については、同報告に譲ることとして、現段階における問題点の指摘をしておきたい。

同窯から比較的良好な遺物を出土したのは、排水溝底部である。ここからは、坏蓋、坏身、短頸壺、埴が出土している。いずれも、上述のように焼成は不十分で、暗灰色ないし暗褐色を呈し、器壁も軟質であって、生焼けの感がある。特に問題としたいのは、坏類について、赤彩の可能性であることである。器壁の状態が悪く、わずかに痕跡らしきものが認められるにすぎないが、そのわずかな可能性を拠り所にして以下論を進める。

ロクロ整形、赤彩という点については、「草刈型土器」と一致する。赤彩という点をもってすれば、当初より酸化炎焼成をめざしたものであった可能性もある。可能性の積み重ねの上に立論するには慎重を期さねばならないが、ロクロ整形+酸化炎焼成の土器について、類例も報告されているので管見に触れた範囲で紹介し、その問題点について指摘しておきたい。

「草刈型土器」の報告後、北部九州において「赤焼き土器」についての検討が進んでいることを知った。高島忠平・西弘海両氏により、寿命王塚出土の一群の土器が注目されたことをその嚆矢とする⁽⁵⁾。その後、様々な論及がなされている。それらの一つ一つの論考を紹介する余裕はないが、その位置づけについては「赤焼き土器」という名称を使用するか、「土師器」「須恵器」の範疇に組み込むかに分かれていると言えよう。後者の立場に立つ橋口達也氏は、「赤焼き土器」と総称されている土器を「擬土師須恵器」「似非土師須恵器」「擬須恵土師器」「似非須恵土師器」の四類に分けている。この論が開陳されているのは、福岡県所在の「野間窯跡群」の報告の中においてであるが、同窯跡において出土した一群の土器については、「似非土師須恵器」とされている⁽⁶⁾。「擬」とか「似非」といった概念が多分に主観的である点もさることながら、高島、西両氏の提起した問題を倭小化することにもなりかねないものとも思われる。生産地が明らかになったこと自体は一つの成果であるが、ここで、窯跡とその製品についての考え方を整理しておく必要がある。

あくまでも、論理的な問題として捉えておくべきことであるが、須恵器と窯の論理的関係についてである。須恵器は、窯で生産されるという一般的な規定そのものは動かす必要はないと考えるが、逆についてはどうかということである。つまり、窯で焼いたから須恵器かという問題である。ここで机上の論理で歴史的事象をもてあそぶ気は毛頭ないが、多少なりとも考えておく必要がある。つまり、大和田の排水溝出土の土器群、または「赤焼き土器」といわれる一群が、窯で焼成されたにしても、そのことがただちに須恵器であると言えるかどうか考えてみな

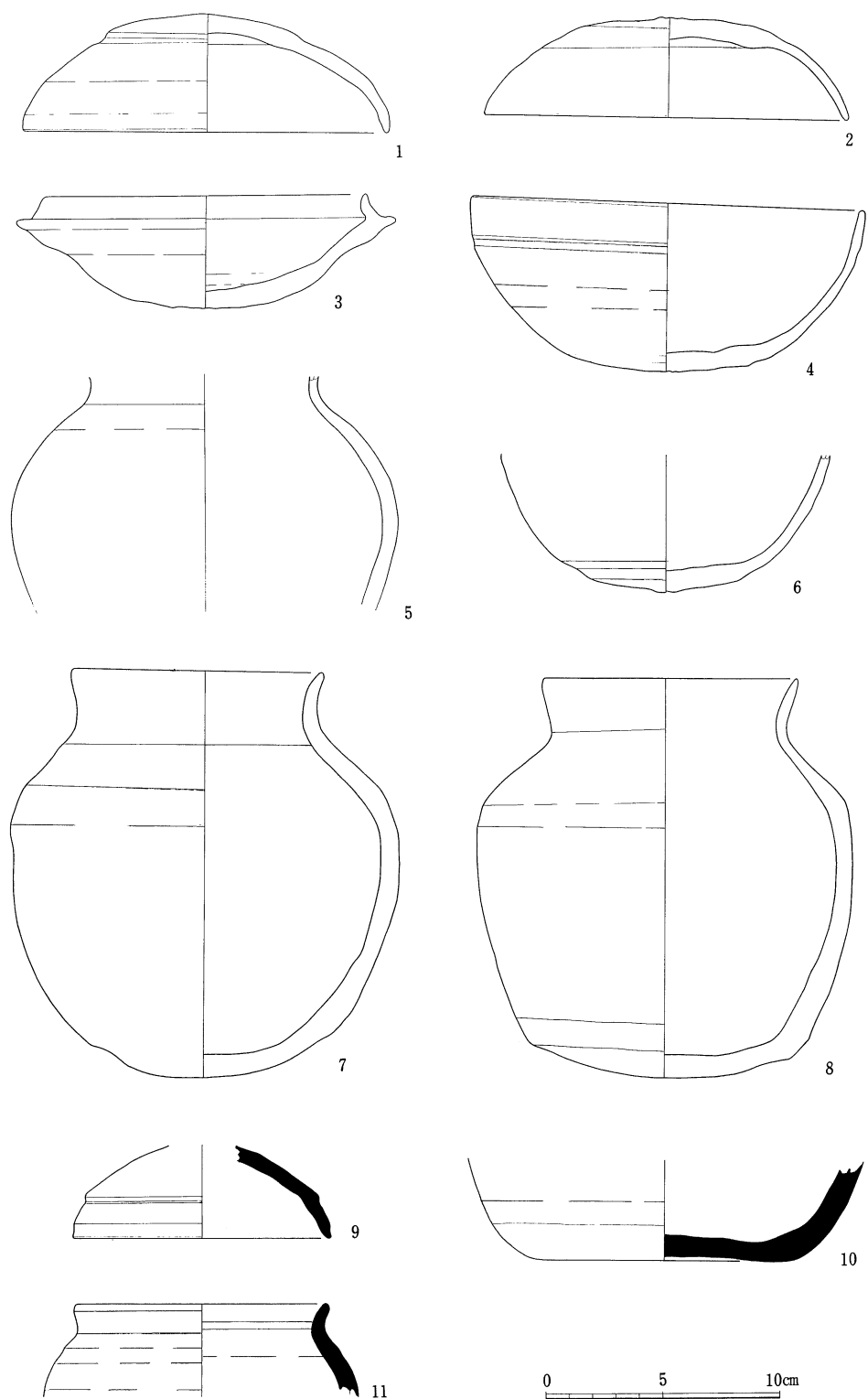
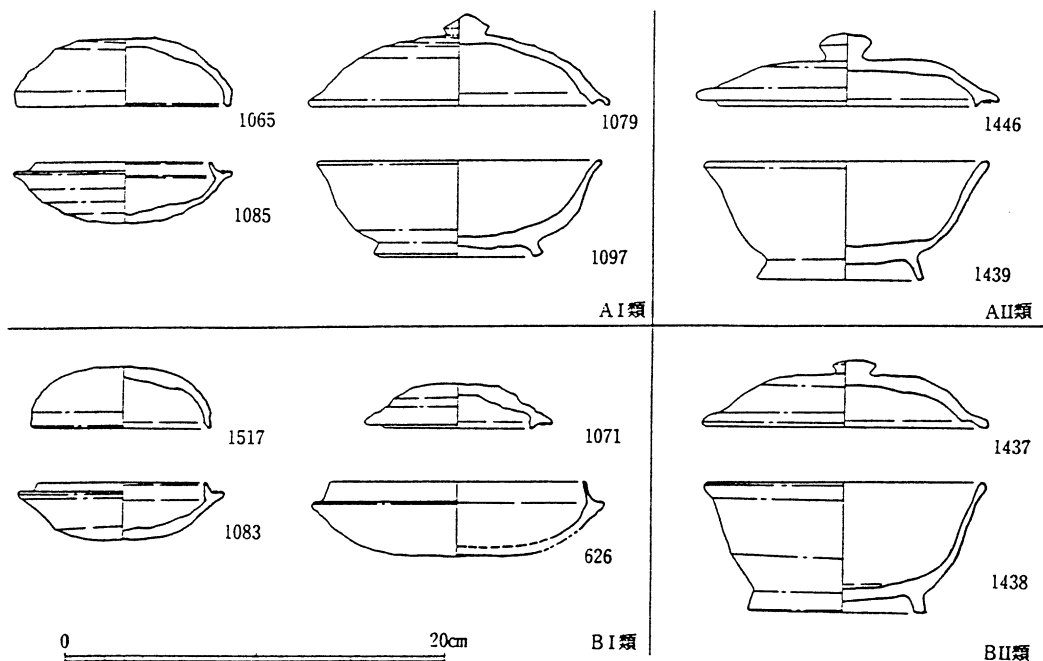


図4 大和田窯跡出土遺物

(S=1/3, 1~8は排水溝出土、9~11は窯体内出土、断面黒マリは還元炎焼成を示す。)



赤焼き土器分類図(1/4)

「赤焼き」土器分類表

分類	項目	色 調	胎 土	焼 成	調 整 ・ 器 形	代表例
須 恵 器 (赤焼き, 類似)		赤紫色を特徴とし、 一部赤褐色・赤橙色 のものも	通常の須恵器同様 若干砂粒含む	良 好	通常の須恵器と同様	906・1011 1934・1505
「赤 焼 き」 土 器	A	I	内外面とも赤褐色 (古いものは須恵器と同様)	良好なものが多い	須恵器と同様であるが、一部丹塗 りのものも	1065・1079 1085・1096
		II	内外面とも赤褐色 橙褐色	良質ものと不良なも のと半々	細部の調整があまい、端部が厚く 丸味をおびる	1439・1445 1446・1474
	B	I	黄橙色・黄灰色で黒 曜あり	やや不良なものが多 い	須恵器に近い	626・1071 1083・1517
		II	"	"	器形が部分的に須恵器と異なる。 細部の調整があまく、端部が厚い	959・1437 1439・1499
土 師 器 (ロクロ成形)		赤褐色・橙褐色	須恵器より精良	"	器形部分的に須恵器と異なる	1479・1481

「赤焼き」土器類型別一覧表

項目 類型		器 種						計	時 期				
		杯蓋	杯	高杯	壺蓋	壺	甕		6 C 後	7 C 前	7 C 中	7 C 後	8 C 前
A	I	7	5			1		13	6	1	2	2	
	II	13	11				1	25	1	2	4	16	
B	I	6	2	1	1	1		11	4	4		2	1
	II	3	2					5		2		3	
計		29	20	1	1	2	1	54	11	9	6	23	1

図 5 佐賀県における「赤焼き土器」の一例(金立開拓遺跡、註(7)、文献⑦より)

ければならない。窯を用いて、須恵器以外の製品を焼成したと考える余地はまったくないのか、そこが問題である。土器一つを構成する諸属性の特異さをもって抽出された、これら特徴的な土器群は、同様にこれまでの通念的な理解とは別の生産体系の中で生産されたと考えてもよいのではないだろうか。

北部九州と房総をただちに結びつけるわけにはいかないが、古墳時代後期において類似する現象が現れていることに注目する必要がある(7)。

大和田窯から出土した遺物は、上に述べたような褐色を呈するような製品ばかりでなく生焼けに近いとはいいいながらも、確実に還元炎で焼成された製品が窯体内からは出土している。したがって問題がより複雑になるわけである。ただ、少なくとも技術的未熟さをもって説明し得る問題とも考えられないのである。それまでの土師器、須恵器といった画然とした枠組みが動揺するような状況があるとすれば、その規範から逸脱するような土器群が出現してもおかしくないであろうことは既に述べた通りである。

大和田窯で生産されたと考えられる土器群は、同一斜面に展開している横穴墓群、および台地上の古墳からも出土が認められていない。この点については整理の進行に伴って明らかにされるであろうが、この点を如何に解釈するかも今後の検討にまきたい。

現段階においては、千葉県内において最古と考えられる須恵器窯が、のちに展開する永田、不入窯の隣接する箇所に築造されたことの意味についても考えなければならないところであるが、この点については、後項で若干考えたい。

3. 永田・不入 一生産体制について一

永田・不入窯は、国士舘大学による調査以来(8)房総における須恵器生産を考える上で欠くことのできない成果を提供してきた。この窯跡の性格については、従来、須田勉氏により、上総国分寺の創建を契機とするものと説かれてきたところである(9)。これに対し、筆者は、過日、疑義を呈したところである(10)。それは以下の点によってであった。第一に、須田氏がその根拠とされた仏器類の生産が、開窯当初ではなく、最終段階において認められること。第二に、同窯の製品と言われる製品が、特に国分寺を指向して供給されたとは考えられないこと。第三として、生産集団が、国分寺造営そのものによって編成され得るものかどうかの検討を行っておく必要があること。大略以下のような点を指摘し、したがって、少なくとも実年代の定点として、741年は与えられず、一旦その年代観を白紙に戻すべきであるとし、さらに、田所真氏による集落側からの検討結果(11)を援用し、その年代観についてはさかのぼる可能性を指摘した。これらの点については、いまだに変更の必要は感じていないが(12)、ここでさらに問題を深化させておこうと思う。大風呂敷を広げるようなものであるが、土器の生産体制さらには、手工業

者そのもののあり方から第一に検討してみたい。

原始・古代における土器生産の実態については、不明な点が多いのは、これまで述べてきたところである。雄略紀に見出される「陶部」にも疑問が出され⁽¹³⁾、また律令期以降においても、国家的な掌握がなされたことを示すような記載は認められない。このことは、既存の体制そのものが温存されていたことの現れと見做し得る。そこで、既存の体制とは如何なるものであったか考えなければならない。土師器にしる須恵器にしる、それらを製作した人間は、共同体の成員であったと考えて、以下論を進める。共同体成員であることは、共同体首長の下におかれたことを意味する。どのような支配形態であったかは今後の検討を必要とするが、特に須恵器生産の場合、律令制の解体にともなって、ほとんどの須恵器生産が終焉を迎えることは、律令体制を規定する総体的奴隷制の下にこれら工人が置かれていたことを意味するのではないか。総体的奴隷制は、アジア的共同体の残存の上に築かれるものと、理解しておきたいが、このアジア的共同体の下に存在していたからこそ、その動揺とともに須恵器の工人はその消滅と軌を一にしたのではないだろうか⁽¹⁴⁾。

ここで、総体的奴隷制、あるいはアジア的共同体に関する研究について、これまでの研究をふまえた検討を行うべきであることは言うまでもないが、立ち入った議論をする力量を持ち合わせていないが、筆者なりに考えている点について明らかにしておきたい⁽¹⁵⁾。「総体的奴隷制」も「アジア的共同体」もマルクスの措定した概念であるが、マルクスのアジア観もさることながら、マルクスの前にヘーゲルを考える必要がある⁽¹⁶⁾。それぞれ膨大な研究の積み重ねがある現段階において、主観的な、短絡的な思考は許されないところであるが、ヘーゲル及びマルクスにおける歴史の発展段階の序列の同一性については認められるところである。すなわち「アジア→ギリシャ・ローマ→ゲルマン」である⁽¹⁷⁾。ヘーゲルにおける歴史観によれば、1人の自由人から多数の自由人への過程として歴史の流れをとらえており、アジアは1人の自由人の段階、すなわち、君主による専制的な国家形態を想起していると考えられる。マルクスは、ヘーゲルの観念論の否定の上に立つものであるが、それはあくまでも弁証法的な否定と考えるべきであろう⁽¹⁸⁾。したがって、発展段階の序列そのものは継承しつつ、観念論的理解を排除し、唯物論的理解により再構築したものと考えられないであろうか。以上から、単純に考えるならば、マルクスにおけるアジア観については、アジア的専制国家段階を広く取り込んでいるものを理解しておく。さらに、総体的奴隷制については、アジア的共同体そのものを残存しつつ、専制君主のもとに、全ての人民が奴隷状態に置かれることを意味すると考える。

律令国家が、総体的奴隷制の最終段階と捉えられるのは、個別人身支配が、令により規定されるに至り、農民の剰余労働の収奪が全国土に達したことを意味すると考えられるからである。その収奪を可能にしたのは、郡司層の介在によるところが大きいと説かれているところである

が、郡司層については国造の系譜をひいたものと考えられる。国造は、小デスポットと考えるべき存在であり、小共同体の首長層の上に存在するものであったと考えられる。いわゆる畿内王権は、これら小デスポットを介して、庸役等の提供を受ける段階に至っていたと思われる。その前提として、物と物の交換⁽¹⁹⁾があつて、それが人と物の交換に転化するのではないか。その交換は、共同体の代表者である首長間で結ばれる関係と捉えられる。自分の意志からまったく切り離されて交換の対象となる人間は、奴隷に他ならないのであつて、首長下の隷属民として位置づけられる。

上で、物と物との交換を前提としたが、それは、共同体の自立性の欠如から導き出される。まったくの自給自足的な単位として共同体を捉えた場合においては、自立性の欠如は想起し得ないが、房総の地域一つとっても、石材の欠如、鉄の欠如等、基本的な労働用具の原材料の確保は、先土器時代から他地域に依存せざるを得ない状況下に置かれている。したがって、農耕の開始およびそれに伴う鉄器の使用開始、それによりもたらされる生産力の上昇は、恒常的な原材料または製品の確保により裏づけられていたと考えざるを得ない。これら恒常的な物の流通が中断することは、共同体の再生産をおびやかす得るものであるので、供給側が優位に立つものであったであろう。ここにおいて、首長間の上下関係が生じる可能性がある。この上下関係は、共同体間・小地域間さらには、房総と畿内といった間でも現れたものと考えられる。このような上下関係が出現した時点で、物と物の交換から、人と物との交換に転化する条件が出現する可能性があるのではないだろうか⁽²⁰⁾。ただし、これはすべての交換形態が転換するのではなく、両様の交換が存在する状況が出現するという風に考えておきたい。

以上のような理解の上に立って、須恵器生産について考えてみたい。須恵器そのものは、大陸からの工人の渡来により生産が開始されたと見て間違いあるまい。。これら工人の渡来の経緯については不明であるが、少なくとも自己の生産基盤を欠如していることから、共同体首長の下に置かれたのではないか。須恵器そのものは、古墳への大量の副葬に見られる如く、日常生活に不可欠な器物であつたとは考えられない。単純な理解となるが、「新たな文物」の域を出ないのではないか。そのいわば、流行に便乗しようとする、多分に恣意的な首長層の意志を介して、各地に須恵器が分布したと考えたい。ここに物の移動のみの段階を見てとることができる。次の段階として考えられるのが、生産集団そのものを、自己の領域下に導入することである。工人そのものが移動した場合、上述のように、自己の生産基盤をもたないのであるから、自己の再生産の保証のために、共同体首長との間に、一定の関係、すなわち、首長の管理下に自らの身を委ねたと考えざるを得ない。また、技術のみの伝授を受けたにすぎないと仮定しても、その生産の開始に伴ってそれまで従事していた生産活動における労働投下の総和が減少せざるを得ないのであるから、その総和の減少をカバーし得る労働力を伴った共同体以外では、

技術のみの導入すら困難ではなかったかと考えられる。須恵器の製作の実態がどうであったかは措くにしても、これまでの成果から見る限り、陶土の収集の時点において、大量の失敗品が生じることを想起するような活動を行っていたのではないか。築窯による高火度焼成は、必然的に大量の焼けひずんだ失敗品の出現をその中に包んでいる。一方、在地における土師器の製作については、土師窯の実態が不明瞭な部分もあるがそれにさかのぼる縄文土器、弥生土器ともに、その生産址は見出せない。これはあるいは、その生産において、ほとんど失敗品が出現しなかったことによるのではないか。このように考えることが許されるならば、それらの土器生産は、焼けひずみという、無駄を生じさせない技術の上に立脚していたとも考えられる。逆に、失敗を見越すような陶土の採集をするだけの余力がなかったのかもしれない。あるいは、大量の失敗品の出現もやむなしとするような発想自体が生じていなかったとも考えられる。先ほど、労働投下の総和の減少と書いたのは、陶土の採集活動及び燃料の採集、焼成にかかって、その工人がそれまで投下していた労働量が分割されるという意味である。仮定の積み重ねになるが、この人間が農業にしろ他の手工業に従事していたものであるにしろ、その労働力の分割により減少する部分を、放置しておくことは、生産力の低下をもたらすものであり、新たな労働力を投下せざる得ない状況に置かれる。新たな労働力の確保は、共同体の代表である首長の手に委ねられていると考えられる。それを可能とするような首長の存在なくして、須恵器生産の導入は不可能であったであろう。

さて、須恵器そのものの流通は首長の恣意的部分によるところが大きいとし、さらに、生産体制そのものも首長の管理下に置かれたとしたが、このことは逆に、その不使用、生産の中止も首長の恣意に委ねられることをも意味すると考えておきたい。

ところで、ここで大和田窯と永田・不入窯の関係について触れておきたい。大和田窯については、大略6世紀後葉から7世紀にかかる時期と推定され、永田・不入窯については、同窯跡群中、初現とされる永田14号窯の時期を8世紀前葉としても100年近い開きがある。14号窯の製品(図6)と大和田窯の製品を比較しても、その連続性は認められない。それにもかかわらず、非常に近接した地点に築窯されたことの意味を考える必要があろう。この点については、いまだに成案をもっていないが、これまで述べてきたように、須恵器の生産にあたっては、新たな労働力の編成を可能にする首長の存在が想起されるのであって、養老川中流域右岸という視点で見ると、同一の生産基盤を背景にして存在した、共同体首長なり、郡司層なりを想定してもいいのではないだろうか。大和田と永田・不入の系譜的な関係については、以上のように考えられるが、それでも、大和田の窯の終末については、現時点では不明確である。先に恣意的に終了する可能性について触れたが、その恣意を引き起こさせた歴史的背景も考える必要があるのは勿論である。あるいは、須恵器の流通に大きな変化が生じたことによるかもしれない。

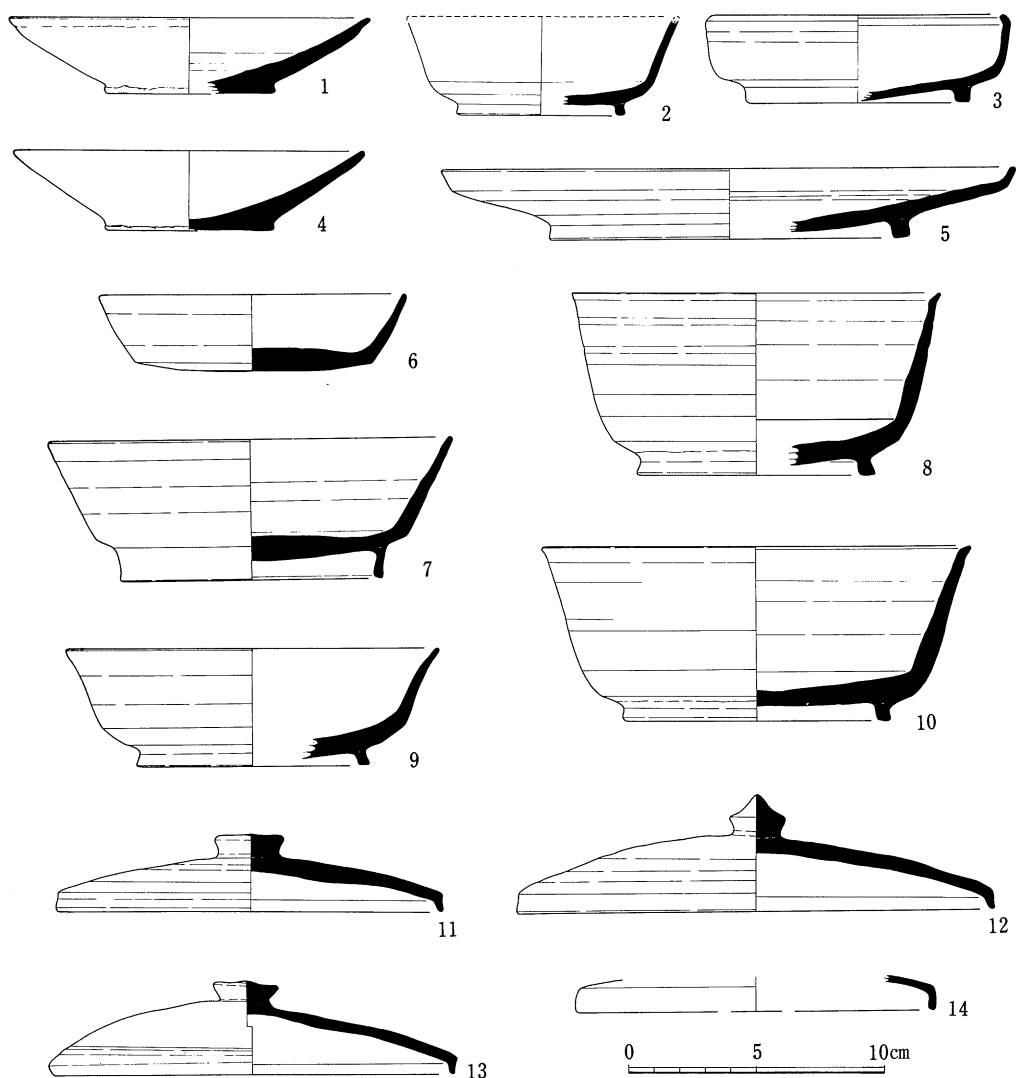


図6 永田14号窯出土遺物(S=1/3)

須恵器が大阪・陶邑から搬入される時期から、東海からの搬入へと転換する時期、それがいつ頃かは、よくわからないが、その転換とのかかわりも考えてみたい。これは今後の課題であるが、入手先が東海地方へと移ることにより、須恵器の入手が前代よりは容易になり、また、量的な増加に伴って、地元での生産を中止してしまったのではないかと。空論の域を出ないが、そのような可能性についても検討する必要があると思われる。

話を永田・不入に戻す。永田・不入の開窯の契機について、国分寺創建事業の一環として捉えられないことは既に述べた通りである。ではいかなる契機が考えられるかが問題となるが、直接的な契機となるような歴史事象は、現段階においては想起し得ない。笹生衛氏は、「儀制令」

記載の「五行之器」実現のためとされたが⁽²¹⁾、これも特に論証を経たものではない。ただ少なくとも、郡司という形で律令制の地方支配官僚の中に組み込まれたであろう共同体首長と、国府との関連性は考えても良いと思う。ただし、他の一般集落においても同製品の供給が指摘されている点⁽²²⁾、国分寺への供給も認められる点からすると、問題は単純ではない。ただ、官民の枠を越えた供給を可能にするだけの素地を形成し終えている首長の存在は想起し得よう。その終末の問題についても首長層動向の中で捉えられるのではないだろうか。荘園制の展開に見られる山野の開墾への指向も視野に入れておく必要がある。須恵器生産工人を、一般構成員へと転化し山野の開拓に向かわせることによって、須恵器生産は終了する。他地域の土師器と須恵器の比率の相違を考えなければならないが、少なくとも、市原周辺において須恵器が土師器を凌駕するような時期は認められない。このことは、須恵器の供給が停止したところで、一般の生活にはさしたる影響を与えないことを意味する。必要不可欠の存在となり得なかった須恵器であるからその生産の中止も容易に行い得たかもしれない。

おわりに

冒頭に述べたように、これはあくまで自己の研究の指針を開陳することを目的としたものであって、多分に暴論に過ぎたところがある。現段階における筆者の考え方の大枠を提示したものと理解していただきたい。

ここで、もう一度問題点について要約し本稿を閉じることとしたい。①草刈型土器の検討から、型式学的意味における「第三の土器」の指定の可能性を指摘した。同時に型式序列の作成の過程で捨象される部分について留意する必要がある。②実体としての「第三の土器」として「草刈型」「大和田窯」の製品を取り上げ、北部九州の状況を紹介した。また、論理的には、窯で焼成されている土器がイコール須恵器ではないのではないかという提起を行った。③土器生産、とくに須恵器生産について、生産集団が共同体首長の下に隷属せざるを得ない歴史的状況を考え、永田・不入の生産の諸相について考えた。律令体制の動揺から荘園制への移行を視野に入れる必要についても指摘した。

机上操作に終始してしまい、遺跡毎の具体的な様相についてはほとんど触れずじまいであった。今後は、個別の遺跡に即した検討を行いたい。

註

- (1) 草刈遺跡については、千原台団地の造成に伴う調査が、千葉県文化財センターにより継続して調査が行われている。同遺跡にかかる都市計画道路草刈・西広線の建設に先行する調査を市原市文化財センターにおいて実施し、昭和59年度に報告書を刊行した。この項で取り上げる一部の土器については「草刈型土器」(仮称)という一項を設けて紹介した。

高橋康男 「草刈遺跡」1985 (財)市原市文化財センター

- (2) 酒井清治氏が5世紀後半代の「轆轤土師器」を紹介している。また、個人的にも類例についての御教示を得た。記して謝意を表する次第である。

「轆轤土師器」の出土地として、藤岡市堀ノ内遺跡、群馬町三ツ寺工遺跡、渋川市空沢遺跡が紹介されている。

酒井清治 「関東地方における発生期の須恵器窯」考古学ジャーナル259, 1986

- (3) 型式学を含めて考古学的法論についての理解さらには批判的検討が必ずしも充分に行われていないのではないだろうか。各研究者は、それぞれ独自の方法論は確固たるものとして持っている考えたいが、正面きった議論、論争が昨今の研究の中には見出しにくい。日々の業務に追われる中で、既存の方法論に拠って立たざるを得ない状況も理解できるが、この状況を放置しておいていいものかどうか疑問である。方法論だけでなく、歴史理論的な立場の相違から生じる議論の咀嚼も多いと考えられる。諸シンポジウムにおいても議論がすれ違いのまま終わるのは、単なる見解の相違ではなく、根本的な方法論、認識の枠組の相違から生じるものと考えられる。試みに、討論の記録等を分析して、その方法論的相違を抽出してみる作業も必要ではないかと考えている。

型式学的な業績の一つに坪井良平氏の墓標の研究があり、このデータを基に、横山浩一氏がグラフ化を行っている。墓標と土器をまったく同一視して取り扱うことはできないのは当然のことであるが、まったく異なった様相かどうか検討する必要もある。この墓標から型式序列を組み立てることはできるが、共時的な有り様とまったくかけ離れたものになるであろうことは明らかであろう。(図7参照)

坪井良平 「山城木津惣墓墓標の研究」『歴史考古学の研究』1984 大洋社

横山浩一 「型式論」『岩波講座 日本考古学』第一巻 1985 岩波書店

- (4) 昭和61年度市原市文化財センターにより調査実施。台地上に円墳1基、方墳2基が存在し、同台地南斜面に約20基の横穴墓群と窯跡1基が検出された。この窯は現段階では県内最古の須恵窯と位置づけられる。昭和62年度に、報告書刊行の予定である。

- (5) この報文の中で、問題とされる一群の土器について、「この「赤焼き」の一群の存在は、この種の土器の比較的多く分布する九州において、一般の須恵器工人とは異なった系統の工人集団の存在がうかがわれる興味ある事実である。」という風に提起された。また高島氏はのちに「一般の須恵器工人とは異なった系統の工人集団の存在、朝鮮半島からの製陶技術移入の多元性を推測しうる興味ある事実であるのかもしれない。」とさ

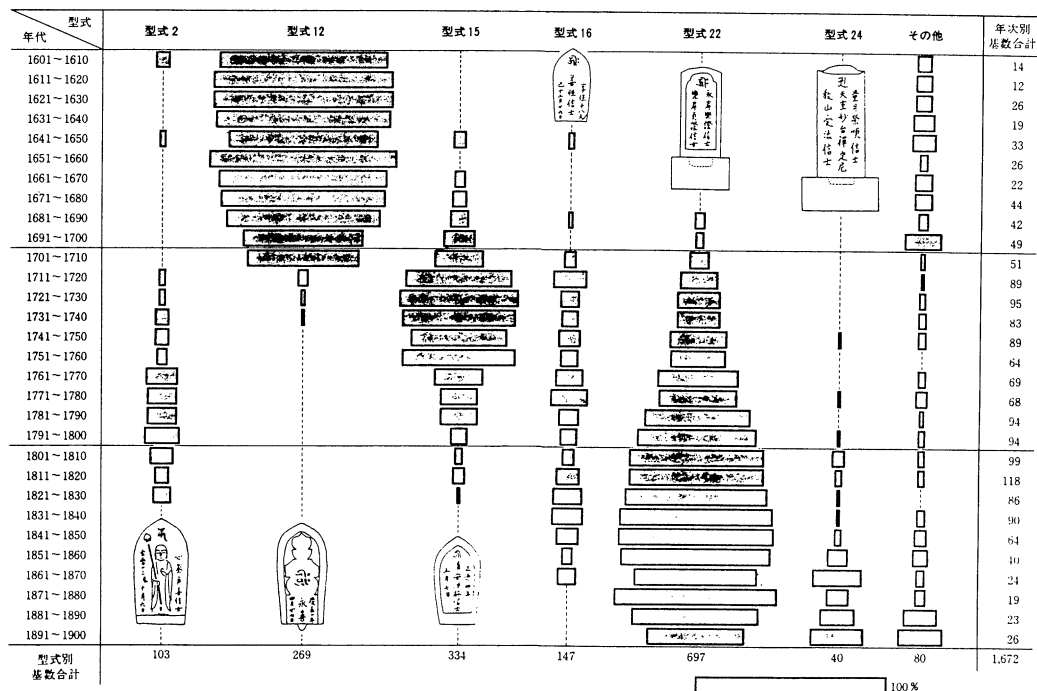


図7 型式学的研究の1例(註3 横山論文より)

上のグラフは、坪井良平氏のデータを基に、横山浩一氏がグラフ化したものである。このグラフと、ある時期のある地域における土器構成の様相が一致するかどうかはともかくとして、以下の点について留意する必要がある。

このグラフからは、型式2から型式12への移行については、仏像のかわりに五輪塔を刻むことから読みとれ、さらに五輪塔を省略した型式15、さらには光背すら省略した型式16への変化が説かれる。また型式22、24は独自のあり方を示す。さしあたり問題とすべきは、型式2、12、15、16の間の問題である。すなわち、型式出現の序列としての型式2→12→15→16は明らかに見てとれるが、極端な場合(たとえば1700年代の前半)には、4型式が併存する場合が認められるのである。また、一つの型式の存続年代についても注意してかからなければならない。型式の序列の構築の前段階には、このような複雑な様相が認められるのではないか。これを編年表という段階では、旧要素が脱落した形で表現されがちである。抽象的な序列と実際の目のあたりにする様相がかけはなれる可能性をはらんでいると思われるのである。土器一個体をもって25年の枠の中にはめ込むことの危険性もこの表は表現している。たとえば、最後出型式である型式16をもってその盛行期(型式22、24を除いた中で)である19世紀前半と単純には位置づけられないのである。もちろん、土器における変化の様相は同一ではないのは勿論であるが、議論の咀嚼をきたす可能性は指摘し得る。

れた。

高島忠平・西弘海 「寿命王塚古墳」『奈良国立文化財研究所年報』 1971

高島忠平 「5. 王塚古墳」『嘉穂地方史』先史編 1973

- (6) 橋口氏は、その当時までにおける「赤焼き土器」の研究史をまとめられているので、参照されたい。またこれらの土器の位置づけについては、「赤焼き土器」には須恵器、土師器の両者があることは否定できない。しかしながら須恵器であっても研究史の項でみてきた一般の須恵器工人集団とは別系統の工人集団の存在を想定する必要はなく、一般の須恵器工人集団が片手間程度に土師器をまね、又は土師器に似せて作り、焼いたものと理解するのが実態に近いものであろう。」と結んでいる。

橋口達也 「野間窯跡群出土の似非土師須恵器について」『岡垣バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第1集 野間窯跡群』1982 福岡県教育委員会

- (7) 各地域における歴史的背景の中で捉えていくべき問題でもある。「草刈型」については、草刈遺跡全体、さらに千原台周辺、村田川流域における歴史的環境の中での位置づけを必要とする。大和田については、養老川中流域の歴史の中である。

なお、北部九州の「赤焼き土器」については、古墳時代から歴史時代に至っても、量的には必ずしも多くないながら、連綿と存在し続けるようである。これに対し、「草刈型」にしろ大和田にしろ、ほぼ短期間としか考えられない。歴史的環境の相異によるものと考えられる。どのような相違なのか。検討課題である。

また、本文では触れなかったが、奈良県ウナベ古墳の外提の調査に際して出土した一群の土器の存在にも注目しておく必要があると思われる。関川尚功氏は、埴輪工人との関連性からの理解を示している。

奈良国立文化財研究所「ウナベ古墳外提」『平城宮跡発掘調査報告VI』1975

田辺昭三 「初期須恵器について」『考古学論考』1982 小林行雄博士古稀記念論文集刊行会編 平凡社

関川尚功 「奈良県下出土の初期須恵器」『考古学論攷』第10冊 1984 奈良県立橿原考古学研究所

管見による類例の出土地は以下の通りである。(草刈、大和田を除く)

千葉県…市原市六之台遺跡(千葉県文化財センター調査。ただし、市センター調査遺跡とは、事業主体を異にするのみで、本来は一続きの遺跡である。)

群馬県…藤岡市堀ノ内遺跡、群馬町三ツ寺Ⅰ遺跡、渋川市空沢遺跡(以上 前掲2 酒井清治氏報文による)

奈良県…ウナベ古墳(上掲)

福岡県…嘉穂郡桂川町寿命王古墳((前掲5)文献による)、粕屋郡須恵町乙植ホ2号墳、4号墳(①)、宗像郡津屋崎町奴山33号墳(②)、田川市狐ヶ迫横穴群(③)、糸島郡二丈町塚田遺跡(④)、福岡市西区高崎2号墳(⑤)、築紫野市野里坂遺跡(⑥)、岡垣町野間窯跡群(前掲6)

佐賀県…佐賀市金立開拓遺跡⑦(図5参照)

文献 ①『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』X, 1977 福岡県教育委員会

- ②『奴山古墳群』津屋崎町文化財調査報告書 第3集, 1981 津屋崎町教育委員会
- ③『狐ヶ迫横穴群』田川市文化財調査報告書 第1集, 1981 田川市教育委員会
- ④『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第7集, 1982 福岡県教育委員会
- ⑤『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集, 1970 福岡県教育委員会
- ⑥『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集, 1970 福岡県教育委員会
- ⑦『金立開拓遺跡、九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書4)』1984 佐賀県教育庁文化課

(8) 大川 清「市原市永田・不入須恵窯跡」1975 国士舘大学考古学研究室

(9) 須田 勉「坊作遺跡の調査」『上総国分寺台発掘調査概要Ⅳ』1977 同遺跡調査団

(10) 高橋康男「永田・不入窯」『房総における歴史時代土器の研究』1987 房総歴史考古学研究会

(11) 田所 真「市原市坊作遺跡」『房総における歴史時代土器の研究』1987 房総歴史考古学研究会

(12) これまでの研究を即座に否定するものではないが、次の点については特に検討すべきである。国分寺の創建を国家的事業とした上で、そこに供給する須恵器も国家的事業と見做するような言論が所々に見受けられることである。たとえば、仏器の存在は確かに寺院への供給を指向するものであるが、本来の仏器は金属製品ではなかったか。それを土器で補おうとしたことの意味も考える必要がある。また国家的事業と言いながら、各国毎に異なった形態で出現してくることは、国毎の造営に委ねられていることの現れだろう。委ねられる方とすると、既存の体制の中での対応をまず考えたのではないかと思われる。少なくとも、管轄令においては、一定の割合以上の器物の補充についての記載があり、その時点において一定の生産、流通の構造が存在していた可能性がある。この点については、国府の所在地そのものが不明である現時点においては、これ以上の言及を進めることができないが、視野に入れておく必要がある。

(13) 浅香年木『日本古代手工業史の研究』1971 法政大学出版局

(14) ただし、このことは、同時期に須恵器の生産が終了することを意味するわけではない。各地域における歴史的状況の相違に応じて、差異が生じるのは当然である。少なくとも、いわゆる中世以降にまで生産が継続しているケースが極端に少ないことは動かし難いのではないか。

(15) 歴史理論上の問題については、多くの議論を要するところであり、膨大な研究の蓄積があることは言うまでもない。少なくとも、主要な業績についての検討をふまえた上で言及を進めるべきであるが、今回はほとんど取り込むことができなかった。これ以後の言及は、今後の検討課題の一つとして捉えておくべきものである。多分に直観的、思いつきの域を出ないものであるが、思考過程における「直観」そのものは、弁証法的思考においても、肯定されているところであり、とりあえずその点を唯一の拠り所としたものである。

なお、律令期における社会構成史上の位置づけについては、それを総体的奴隷制の最終段階とする、安良城盛昭氏の所説に従った。

安良城盛昭「律令体制の本質とその解体」『日本封建社会成立史論 上』1984 岩波書店

- (16) ヘーゲル(武市建人訳)『歴史哲学』(岩波文庫版)1971 岩波書店
(17) マルクス(手島正毅訳)『資本主義的生産に先行する諸形態』(国民文庫版)1963 大月書店
(18) ヘーゲルとマルクスにおける、哲学的な系譜については、次の文献を参考にした。

上山春平『弁証法の系譜—マルクス主義とプラグマティズム』1963 未来社

- (19) 一口に「交換」とはいっても、多用な形態があることは勿論である。贈与であるか、物々交換であるか、貨幣を介したものであるか。それ自体についての歴史的なあり方についても検討しなければならないのは当然である。ここでは、取りあえず、歴史的な段階的な差異は捨象して、一般的な、人間の意志を介した物の移動を「交換」としておく。
- (20) 物と物との交換が成立するには、相互補完的な場合がある。これが、生産力発展の不均等などの状況の変化により、補完関係が崩れる場合もあったのではないか。その場合、優位に立つ側としては、物の交換を要求するのではなくて、たとえば雇役といった労働力との交換を要求することは考えられないか、ということである。大規模な墳墓の造営や、灌漑事業にあるいは、兵役に徴発されるような状況が進行したのではないか。このような体系が汎日本的に、制度的に確立された段階が、律令社会であったのではないか。
- (21) 笹生 衛「安房・上総に対するコメント」『房総における歴史時代土器の研究』1987 房総歴史考古学研究会

- (22) これまで「永田・不入産」と報告されているにすぎず、筆者もそれぞれ実見したわけではない。ここでは、各報告者の見解を尊重しておく。ただ、市原市石川窯跡においても、永田・不入窯の製品と区別し難い遺物が採集されており、はたして、これまで永田・不入産とされてきたものを、そのまま認めていいか検討の必要がある。

なお、今回、千葉県立房総風土記の丘博物館の多大な協力を得て、同館収蔵の永田・不入窯出土の全遺物を実見する機会を得た。ここで留意しておきたいのは、底部に回転糸切りの痕跡を残すものが、非常に少ない点である。このことが新たな問題を提起するわけではないが、今後、消費地出土の須恵器と生産地を対比する上で、念頭においてもいいのではないかと考えられる。(表1参照)なお、田所真氏からは多くの援助を得た。記して謝意を表する次第である。

これまでに市原産須恵器(永田・不入、石川産)と思われる製品を出土している遺跡は以下の通り。(山口直樹氏、後掲報文による。)

市原市…藪・南総中学・萩の原・池ノ谷・坊作・宮前・草刈、袖ヶ浦町…清水川台、千葉市…大道・荻生道、東金市…山田水呑、佐倉市…臼井南

山口直樹「千葉県市原市 永田、不入窯跡」1985 (財)市原市文化財センター

表 1 永田不入窯窯跡別器種構成表

	有台坏	無台坏	坏	坏計	蓋	皿	高盤	壺・瓶	カメ	鉢	その他		小片	不明
永田 1	18	33	37	88	11	1	1	8	5	1			4	3
2	8	9	1	18										
3		1		1				2			横瓶			
4														
5	197	305	582	1084	159	35	8	34	16	2	甗、小蓋	碗	111	11
6					1									
7	3	2		5				3						1
8		1		1	1									
9		2		2										
10		1		1	1					1				
11														
12		2		2										
13	1			1	1									
14	38	4	38	80	57	21	16	9						
不入 1	1	10	7	18	1	1			1				7	
2	23	58	97	178	22	1	9	27		2	小蓋			
3	55	38	136	229	63	2	4	30	6	2			11	28
4	43	59	54	156	3	4		3	1				6	

永田・不入窯 窯跡別器種構成表について

ここに掲げた表は、千葉県立房総風土記の丘博物館収蔵の永田・不入窯出土遺物のほぼ全体にわたる器種構成を表すものである。「ほぼ」としたのは、永田 5 号窯についてのみ、分類が終了しなかったからである。それ以外の窯跡の製品については、全てを網羅してある。この表から直ちに、何かを抜き出すこともなかなか難しいのではないと思うが、参考までに掲げる。

尚、器種分類については、大まかな分類であり、法量等については検討していない。また瓶・壺などの分類も必ずしも徹底していない点を明らかにしておく。また、永田 4, 11 号窯については当該遺物が存在しなかったことにより空白となっている。資料数が少ない窯跡は、トレンチ調査で存在が確認されたものの、本体には手をつけずそのまま保存された窯跡であることを付け加えておく。

房総における改葬系区画墓の出現期

—— 方形(円形)区画改葬墓の提唱 ——

木 對 和 紀

はじめに

1. 房総における終末期古墳
2. 房総における改葬系区画墓
3. 終末期小形古墳と改葬系区画墓の盛土の存在

4. 所謂円形・方形周溝状遺構における埋葬施設と盛土の関係

5. 終末期古墳から改葬系区画墓へ
— 方形(円形)区画改葬墓の提唱 —
おわりに

はじめに

古墳と改葬系区画墓の概念はすでに述べた^(註1)。ここでは前稿の不備を補うために、特に古墳の消滅と改葬系区画墓の出現期を問題とし、8世紀前半代以降を中心とする時期に対して論考するものである。

1. 房総における終末期古墳

房総における終末期古墳^(註2)に採用される主体たる埋葬施設は、横穴式石室系・横穴式木槨系・地下式横穴系・箱式石棺系・木棺直葬系に大別される。(図1 山伏作5号墳～図7 千草山SX103号址)これらはいずれも仰臥伸展葬の可能な空間を有するものであり、時期が新しくなるにつれ変則化する傾向も認められる。

墳丘規模は周知の岩屋古墳^(註3)における一辺およそ80mを最大とし、羽根戸遺跡^(註4)における一辺4.8mが最小である。出現期は前方後円墳の築造が終焉を迎える7世紀前半代以降であり、8世紀の中～後葉にかけての時期に消滅するものと考えられる^(註5)。

2. 房総における改葬系区画墓

房総における改葬系区画墓を、図7 ナキノ台90号址～図12 軽戸永林10号址までにまとめた。これらはいずれも周溝を有し、火葬を含む改葬や、簡略化された埋葬施設と思われる小土壇を伴うものである^(註6)。規模は打越岱遺跡004号址^(註7)の一辺約20mのものや、外迎山遺跡12号

址^(註8)の1辺11m強の比較的大型のものも存在するが、大部分は一辺5～8m程度の小型のものが主体を占める。これらの遺構の最小のものには、天神台遺跡における一辺4m弱のもので、内部施設に地下式改葬墓を伴う例がある^(註9)。時期的には、検出される遺物や、一部において火葬が導入されている事実から、8世紀前半～9世紀代にかけての遺構と考えられるが^(註10)、房総以外の地域では、宝塔相輪部や小皿、白磁・人骨・鉄釘・古銭等が検出されている例があり、これらの遺構が終焉を迎えるのは、中世以降に下る可能性がある^(註11)。

3. 終末期小型古墳と改葬系区画墓における盛土の存在

改葬系区画墓においては、周溝及び方台部内に何の埋葬施設も検出されないものが多い。外迎山遺跡報告書の中で、これらの遺構は極めて旧表土に近い位置に何らかの埋葬施設が存在していたものと想定し、さらに大型・小型のものを含めて、それなりのマウンドが存在していたものと推定した^(註12)。また、古墳の小型化するものは、現況におけるマウンドの存在が認められないものの、深い地山掘込墓壙を有して木棺等を埋葬する例が多い。この問題に関しては、最近吉岡遺跡群^(註13)の報告書において良好な資料を得ることができた。

まず羽根戸遺跡において検出された方墳は、方台部短径4.8mの最小墳丘規模であるにもかかわらず、中央部に木棺直葬の内部施設を深さ1m以上に達する地山掘込墓壙と共に検出している。このことは、終末期小型古墳は当初から低墳丘であるがゆえに、地山掘込墓壙を採用する裏付ともなり、ひるがえって考えれば方台部が同規模な改葬系区画墓は、旧表土中や低い盛土内に何らかの埋葬施設が存在していた可能性がますます強くなったと考えられよう。

次にこの問題に対する答とも言うべき遺跡として、西の塔遺跡^(註14)・軽戸永林遺跡^(註15)における例がある。塚として報告されたこれらの遺構のうち、軽戸永林遺跡における最大規模のものには、周溝が存在する。方台部径は11m前後であり、陸橋部を有している。旧表土及び盛土下層中より、焼土・炭化物・須恵器甕(須恵器甕)が検出されている。また周溝を伴わなかった他の遺構の土層断面図を観察すると、周溝状の落ち込みが旧表土を切って存在する様であり、これら一連の遺構は、盛土が存在した改葬系区画墓であろうと推定される。また焼土・炭化物が少なからず検出されており、内部施設は火葬系のものと考えられる^(註16)。

4. 所謂円形・方形周溝状遺構における埋葬施設と盛土の関係

終末期古墳と改葬系区画墓が存在する時期に共存し、現況における墳丘及び埋葬施設を完全に削平されてしまった遺構に、所謂円形・方形周溝状遺構が存在する^(註17)。これらの遺構は、もはや古墳か改葬系区画墓のいずれかに帰属することが決定的なものであるが、はたして古墳に属するのか改葬系区画墓に属するのかが不明瞭であり大きな問題でもある。図13・14をもと

に、この問題について論考してみたい。

まずこれらの遺構がすべて古墳であるものと仮定してみよう。図13は古墳における主体たる埋葬施設が存在する位置を示したものである。前述のごとく、これら一連の遺構は地山方台部(確認面)に対して何の痕跡も残さないことから、極めて旧表土に近い位置や(旧表土中含む)、あるいは盛土内に埋葬施設が存在していたものと考えねばならない(註18)。

次にこれらの遺構は、特に大型のものを除けば、10・8・5 m前後の規模に分類することが可能であり、それぞれ各周溝掘削において発生した排土を墳丘盛土として使用した場合の模式図として図14を作成した(註19)。作成にあたっては図4における雉子ノ台遺跡8号墳の墓壇及び石棺例を参考としたが、可能な限り規模を縮小し、石(木)棺規模は長さ2 m・幅1 m・高さ60 cm前後、堀込墓壇は長さ3 m・幅2 m、深さ1 m前後と仮定した。また少ない土量で高墳丘を得るため、テラス部分を設定し、墳丘勾配角度を45°とした。ただし、現存する古墳の大部分が墳丘勾配角度が30°以下なことから、一つの目安として30°のものも設定した。さらに墳頂部面積が墓壇収納可能な面積として16㎡以上になることと、地山に痕跡を残さない高さとして1.5 m前後の盛土が存在しなければならないことを絶対条件とした。

結果として一辺10 m・8 mクラスのものは、45°勾配の墳丘を1.5 m持ち、さらに墓壇十石(木)棺を内部施設として保持することが可能である。ただし、30°勾配となると8 mクラスのものは、旧表土以下に達してしまうものでなければ墓壇構築は不可能となり、無墓壇タイプのものでなければ存在しえなくなる(10 mクラスは、かろうじて旧表土面に棺底を置くことが可能であった)。さらに5 mクラスのものは当初からいずれも不可能であった。また10 mクラスのものは、45°勾配で2 mの高さまではさらに盛土することが可能な排土量と墳頂部面積が得られるのに対し、8 mクラスのものは10 mクラスに必的する周溝規模を有したとしても、高さ1.5 m以上の墳丘規模を持つことは、墳頂部面積的に不可能であり、さらに比較的構築しやすい地山堀込墓壇と異なり、墳頂部平坦面ギリギリの所で、しかも崩れやすい盛土内という状況で墓壇そのものが構築できたかという技術的な問題までが発生してしまう。

結論としてこの時期における一辺8 mクラスの同遺構が、すべて無墓壇タイプの内部施設を採用していたと考えるより、むしろ低墳丘の中に納まり得る小規模な内部施設を採用していた可能性の方が強く、これら小規模な円形・方形周溝状遺構の大部分は改葬系区画墓に属するものだと考えられる。これに対して、一辺10 m以上クラスのものは、物理的にも高墳丘及び古墳たる内部施設を有することが可能であり、規模が大きくなればなる程、古墳の範疇に含まれていくものと考えられるのである(註20)。

5. 終末期古墳から改葬系区画墓へ ——方形(円形)区画改葬墓の提唱 ——

房総における改葬系区画墓は火葬という新しい葬法を導入している事実から、8世紀前半代以降に出現する墳墓である^(註21)。ただし周溝・墳丘を保有し、終末期古墳(方墳)の多大なる影響を受けながら新たな墓制として出現するものである^(註22)。

ここにこれまで、仮称であった改葬系区画墓に対して「**方形(円形)区画改葬墓**」の名称を与えたい^(註23)。

房総における終末期古墳から方形(円形)区画改葬墓への変遷を考える上で重要な遺跡として、コロニー内遺跡・生谷遺跡・外迎山遺跡等があげられる。外迎山遺跡は8世紀の初頭前後、コロニー内遺跡及び生谷遺跡は、8世紀中葉以降に比定される方墳を中心として墓域が形成され、古墳消滅以降に方形(円形)区画改葬墓群が形成されはじめる。これらの遺跡においては、明らかに方墳から方形区画改葬墓へと変遷しているものと考えられ、8世紀前半を境として房総における古墳が次第に消滅していく様相が捉えられよう。

おわりに

房総地域の内でも古墳の消滅には時間差が生じ、終末期古墳と呼ばれるものには8世紀の中～後葉の時期まで存続するのに対して、方形区画改葬墓の初現は8世紀の前半代に比定される例が存在する。今後の調査研究の課題として、これらの時期・地域差や両者の併存関係、更には、律令制施行の中での墾田永世私財法等における一連の土地政策の中での、墓域としての土地占有の問題など解決しなければならない問題は山積となっている。

今後新たな資料が得られることによって、これらの問題が解決されることを切に望みながら終稿としたい。

註 1 木對和紀『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡 市原市文化財センター 1987

註 2 森 浩一「あとがきにかえて」『論集終末期古墳』塙書房 1973

白石太一郎「幾内における古墳の終末」『国立歴史民族博物館研究報告第1集』1982

同 『古墳の知識Ⅰ 墳丘と内部構造』東京美術考古学シリーズ19 1985

田中新史「出現期古墳の理解と展望—東国神門五号墳の調査と関連して」『古代』 77 1984

終末期古墳の出現期は7世紀前半とする考え方が主力である。私見としては、房総における終末期古墳の出現期は、駄ノ塚古墳(a)以降である。

(a) 杉山晋作「高塚古墳の終末」『考古学研究』129 1986

註 3 大塚初重「千葉県岩屋古墳の再検討」『駿台史学』37 1975

同 「龍角寺古墳群」『探訪日本の古墳』東日本編 1981 他

註 4 千田幸生他『吉岡遺跡群』四街道市吉岡遺跡調査会 1986

註 5 房総における前方後円墳の築造が終止符を打ってからのち、築造され続ける古墳の主丘は方墳である。ただし前期方墳と終末期方墳の顕著な形体差は、終末期方墳の各隅は直角に近くなり、四辺も直線的な形状となるところにある(a)。現在の所この様な終末期方墳が房総において出現する時期は、駄ノ塚古墳(b)における7世紀前半代以降のことであり、立山遺跡(c)における1・7号方形周溝状遺構の帰属時期は、周溝内より検出された6世紀代の遺物とは無関係であると考えている。

(a) 杉山晋作「日吉倉遺跡における古墳の特性」『遺跡日吉倉』1975

同 「古墳群形成にみる東国の地方組織と構成集団の一例」『国立歴史民族博物館研究報告第1集』1982

(b) 註2(a)に同じ

(c) 金丸誠『佐倉市立山遺跡』千葉県文化財センター 1983

同書によれば、旧表土～ソフトローム層上面までの所謂Ⅱ層は、遺跡全域にわたって削平されており、1・7号方形周溝状遺構より検出された6世紀代の遺物は、墳丘を削平された円形周溝(円墳)等の遺物が流れ込んだものと考えている。

註 6 火葬施設と考えられる遺構を検出した例に、打越岱(a)・外迎山(b)・諏訪台(c)・鼻欠(d)・辺田山(e)・土持台(f)・上原台遺跡(g)の例があげられる。再葬骨を検出した遺構の確実なものは、現在のところ諏訪台遺跡のみであるが、類似施設内に骨粉が存在した例に、ナキノ台、川焼台遺跡例(h)がある。小土壌を検出する例として、外迎山、千草山(i)・上原台、ムコアラク、飯重(k)、生谷(l)、辺田山遺跡の例があげられる。

これらの小土壙は、もはや伸展葬が不可能なばかりではなく、木櫃あるいは布・皮・蓆・紐等を使用し、火葬骨や再葬骨を簡単に包装して埋納した施設と考えられるものである。事実、茨城県武者塚1号墳内部施設内より布・皮・紐などが遺骨に付着して検出された例があり、当期平行期以降に出現したと考えられる改葬系区画墓の小土壙内に、すでにこれらの製品を使用して改葬骨を埋納していたことは、十分に考えられることである。

(a・b・cは、前後に掲載)

(d)井口 崇 『鼻欠遺跡』袖ヶ浦町教育委員会 1984

(e)柴田龍二 『千葉市辺田山遺跡』千葉県文化財センター 1986

(f)三浦和信他 『多古工業団地内遺跡群発掘調査報告書』千葉県文化財センター 1986

(g)『私達の文化財9』市原市文化財センター 1987

(h)渡辺修一『「群小区画墓」の終焉期(2)『方形周溝遺構』における埋葬施設の事例とその検討』『研究連絡誌』14 千葉県文化財センター 1985

(i)『第2回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』市原市文化財センター 1986

(j)田坂 浩他 「ムコアラク遺跡」『千葉東南部ニュータウン8』千葉県文化財センター 1986

(k)桑原 護 『飯重』飯重遺跡発掘調査団 1974

(l)田川 良 『生谷』生谷遺跡発掘調査団 1977

註7 井口 崇 「打越岱遺跡」『君津郡市文化財センター年報』No.4 1986

004号址は、低墳丘を有する大型の改葬系区画墓(火葬系)であり、他の3基を含めて、埋葬施設には火葬骨が伴っていた。また4基のうち2基には周溝内土壙も検出されている。

註8 前掲註1に同じ。火葬墓と考えられる内部施設と、当初から盛土があったと考えられる周溝内土壙に伴うと考えられる土器短頸壺も検出されている。

註9 浅利率一 「天神台遺跡」『市原市文化財センター年報』1985

同氏の御教示によれば、一辺7m前後以下のもので地下式改葬墓_(a)を検出した例は4基存在し、そのうちの1基より再葬された人骨1体を検出している。この他にも打越岱遺跡例に類似する火葬施設を中央部に配する例や、地下式土壙墓を中央部に配する例_(b)などが存在するという。

(a)田中新史 「古墳時代終末期の地域色—東国地下式系土壙墓を中心として」『古代探叢』II 1985

地下式改葬墓・地下式土壙墓の名称は、同氏の提唱するものを使用した。

(b)田所 真 「諏訪台遺跡」『市原市文化財センター年報』1986

同遺構配置図参照

註10 各遺構から検出される遺物においては、8世紀前半に比定される前掲註7(f)32号址や8世紀中～後葉の時期に比定される同29号址等があるが、大半の遺構は8世紀中～後葉の時期に比定される遺物を伴う。また火葬導入は、8世紀初頭というのが定説となっており、(一部7世紀代にも類似例が古墳の主体部に存在する様ではあるが)改葬系区画墓の出現期が8世紀前半であることはほぼまちがいないであろう。また10世紀以降に下る改葬系区画墓の確実なる遺物検出例は現在のところ房総では見あたらない。

註11 「鳥羽遺跡見学会資料」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984

「右京第130次調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』1984

「大熊段1号墳周辺遺跡」『鳥取県埋文ニュース』鳥取県埋蔵文化財センター 1985

「荘園・館・経塚」『展示図録2』兵庫県埋蔵文化財調査事務所 1985

右京第130次例では、周溝内より宝塔相輪部と供に11世紀～12世紀初頭に比定される皿が約50枚検出されており、大熊段遺跡においては、1辺4mの方形(コの字形)の周溝で区画された方台部内に、火葬墓と木棺墓が検出され、それぞれ15世紀に比定される遺物が検出されているという。これらの遺構と房総における改葬系区画墓は、時期的に若干の隔たりがある様で、直接結びつくものと考えことは時期尚早であるかも知れないが、中世において類似する施設が存在することは十分留意すべきことであろう。

註12 外迎山遺跡12号址における埋葬施設検出面は、旧表土層上面であり、古老の話によれば、重機によって削平される以前は、墳丘が存在していたという。

註13 前掲註4に同じ

註14 //

註15 //

註16 私見における西の塔、軽戸永林遺跡例は、塚として報告された遺構の大半に焼土、炭化物が旧表土上面～盛土下面において検出されていることから、火葬址上に直接盛土が行なわれた例として捉えている。

註17 以下方形周溝状遺構に関する論考を列挙する。ただし前掲したもの除く

1. 後藤和民 「千葉市すすき山遺跡発掘調査報告」『貝塚博物館紀要』5 加曽利貝塚博物館 1974
2. 栗本住弘 「千葉市誉田県立コロニー内遺跡」千葉県文化財センター 1977
3. 金丸 誠 「房総における方形・円形周溝について」『研究連絡誌』1 千葉県文化財センター 1982

同氏の言う円形周溝の大半は、墳丘・埋葬施設とも削平されてしまった古墳であると考えられる。また千代田遺跡3号址出土遺物については、同遺跡が古墳時代後期の集落跡でもあることから、直接伴うものではないと判断している。

4. 川岸良二 「方形周溝状遺構研究序説(Ⅰ)」『研究紀要』2 東邦中学校 1982

同 「方形周溝状遺構研究序説(Ⅱ)」『研究紀要』3 東邦中学校 1984

同氏による盛土の計算方法は若干の疑問を覚えている。

5. 渡辺修一 「『群小区画墓』の終焉期—所謂『方形周溝遺構』をどうみるか—」『研究連絡誌』6 千葉県文化財センター 1983

註18 地山(確認面)に対する墓壇の存在がなかったことは、少なくとも、地山を深く掘り込む墓壇が存在しなかったと言及できるのみで、旧表土や盛土内に存在した可能性のある他の埋葬施設が当初から存在していなかったと言い切れるものではない。ここではこれらの遺構が何であるのかを証明するための消去法を採用するものである。

註19 14図における埋葬施設例は、墓壇十石(木)棺のものである。トーンにおいて示す地山は、旧表土層以下である。古墳の盛土下に旧表土が存在するのは通例であり、少なくとも古墳築造開始面は旧表土層である。ソフトローム層において確認されるすべての遺構は、本来の高さ(深さ)を削平されてしまったものであり、周溝の幅、深さとも、少なくとも旧表土上面まで復元して考えねばならない。10mクラスの一つの目安として、周溝掘込角度を45°、深さ1m、溝底幅50cmと仮定し、規模が縮小するにしがたい、それぞれの数値を変化させ、周溝排土量のみで墳丘を構築しようと試みた。これらの数値はあくまでも目安ではあるが、結果として周溝排土量のみで十分墳丘は構築可能とされた。(ただし、物理学的に発掘排土をすべて方台部に盛りきることは、事実上不可能であり、周溝以外より盛土を調達したことは十分に考えられるものであるが、群集する終末期古墳及び改葬系区画墓の各遺跡における遺構配置関係よりそれほど広範囲に渡っていたものとは考えられない。

註20 規模が10mを超えるものでも打越岱004号址や外迎山12号址の様に、必ずしも古墳であるものとは断言しえない。ここでは、これら10m以上の規模もつ方形周溝状遺構に対して方墳系区画墓の名称を与えておく。

註21 石田茂作他「墳墓」『新版仏教考古学講座』第7巻 雄山閣1984

註22 房総における終末期古墳の主丘は方墳であり、この影響を多大に受けて出現する改葬系区画墓もまた主形は方形を呈している。これらのことから、もはや古墳(方墳)に変わる墓制として8世紀前半以降に出現する墳墓であることは明白であり、ここに方形(円形)区画改葬墓の名称を与えることが妥当かと考えている。

註23 前掲註11における兵庫県例や鳥取県例に、方台部内に木棺直葬を採用する中世「区画墓」が存在する。弥生・古墳時代の墳墓や、房総において8～9世紀に存在する方形(円形)区画改葬墓と区別する意味で、これらの遺構に対しては、方形(円形)区画木棺墓の名称が現在のところ、より妥当な名称ではないかと考えている。またこれまで方形周溝状遺構とされてきた一連の遺構については、規模や明瞭なる埋葬施設が検出されない以上、方墳系区画墓、あるいは改葬系区画墓の名称を使用するのがより具体的であると考えている。

引用参考文献(掲載資料)

- 1 梶山林継 『請西』木更津市請西遺跡調査団 1977
- 2 白井久美子他 『千葉東南部ニュータウン8』千葉県文化財センター 1979
- 3 浅野雅則他 『飯塚遺跡群発掘調査報告書』八日市場市教育委員会 1986
- 4 木對和紀 『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡』市原市文化財センター 1987
- 5 栗本住弘 『千葉市誉田県立コロニー内遺跡』千葉県文化財センター 1977
- 6 田川 良 『生谷』生谷遺跡発掘調査団 1977
- 7 千田幸生他 『吉岡遺跡群』四街道市吉岡遺跡群調査会 1986
- 8 渡辺修一 『研究連絡誌』14千葉県文化財センター 1985
- 9 大村 直 『下鈴野遺跡』市原市文化財センター 1987
- 10 白石太郎 『古墳の知識Ⅰ 墳丘と内部構造』東京美術考古学シリーズ19 1985
- 11 「千草山遺跡」 『市原市文化財センター年報』 1986
- 12 井口 崇 「打越岱遺跡」『君津郡市文化財センター年報』 4 1986
- 13 三浦和信也 『多古工業団地内遺跡群発掘調査報告書』千葉県文化財センター1986
- 14 『私たちの文化財9』市原市文化財センター1987
- 15 矢戸三男他 『佐倉市向山谷津・明代台・木戸場・古内遺跡』 1987
- 16 金丸 誠 『佐倉市立山遺跡』千葉県文化財センター 1983

その他の引用参考文献

- 網千善教他 『考古学ジャーナル』194ニューサイエンス社 1981
- 井口 崇他 『鼻欠遺跡』袖ヶ浦町教育委員会 1984
- 同 「打越岱遺跡」『君津郡市文化財センター年報』4 1986
- 糸川道行 「所謂『変則的古墳』に関する基礎的考察」『研究連絡誌』4 千葉県文化財センター 1983
- 大塚初重 「武蔵・瀬戸岡における奈良時代墳墓」『駿台史学』1953
- 同他 『日本考古学を学ぶ(1)』有斐閣 1980
- 同 『探訪 日本の古墳 東日本編』有斐閣 1981
- 小沢 洋 「富津市割見塚古墳の諸問題Ⅰ」『史館』19史館同人 1986
- 柿沼修平 『土宇』日本文化財研究所 1979
- 金丸 誠 「房総半島における方形・円形周溝について」『研究連絡誌』12 千葉県文化財センター 1985

- 倉田芳郎 『千葉・南総中学遺跡』南総中学遺跡調査団 1978
- 倉林眞砂斗 「集落の様相にみる古墳築造の条件—空間的視点からの方法論的予察—」『考古学研究室研究紀要』6 東京大学文学部 1987
- 栗田則久 「千葉東南部地区における方墳の様相」『研究連絡誌』5 千葉県文化財センター 1983
- 黒埼 直 「近畿における8・9世紀墳墓」『研究論集』IV 1980
- 桑原 護 『飯重』佐倉市遺跡調査会 1974
- 小林行雄他 『考古学ジャーナル』164ニューサイエンス社 1979
- 斉藤 忠 「火葬骨壺の一型式に就いて」『考古学雑誌22-11』1932
- 同 『日本史小百科 墳墓』近藤出版社 1981
- 佐野五十三 「駿河妙見古墳群の再検討—終末期古墳の一樣相—」静岡県埋蔵文化財調査研究所『研究紀要Ⅰ』1986
- 柴田龍司他 『千葉市辺田山谷遺跡』千葉県文化財センター 1986
- 白石太一郎 畿内における古墳の終末『国立歴史民族博物館研究報告第1集』1982
- 杉山晋作 「古墳群形成にみる東国の地方組織集団の一例—公津原古墳群とその近隣—」『国立歴史民族博物館研究報告第1集』1982
- 同 「高塚古墳の終末」『考古学研究』129考古学研究会 1986
- 須田勉他 『上総国分寺台発掘調査概報ⅩⅡ諏訪台古墳』市原市教育委員会 1984
- 清藤一順他 『佐倉市星谷津遺跡』千葉県文化財センター 1978
- 滝口 宏他 『上総国分寺台調査概報』市原市教育委員会 1976
- 同 『上総国分寺台発掘調査概報』市原市教育委員会 1981
- 田中新史 「出現期古墳の理解と展望—東国神門五号墳の調査と関連して—」『古代』77 1984
- 同 「古墳時代終末期の地域色—東国地下式土壇墓を中心として」『古代探叢』Ⅱ1985
- 種田斎吾他 『京葉』1973
- 田村良照 『川崎市内における横穴墓群の調査』玉川文化財研究所 1986
- 中村恵次他 『遺跡 日吉倉』日吉倉遺跡調査団 1975
- 同 他 『東寺山石神遺跡』千葉県文化財センター 1977
- 同 『房総古墳論攻』故中村恵次氏著作集刊行会 1979
- 野村幸希他 『仏教考古学講座第7巻墳墓』雄山閣 1984
- 長谷川 厚 「歴史時代墳墓の成立と展開(1)—特に相模・南武蔵の火葬墓の様相を中心として—」『古代』75・76合併 1983
- 平野元三郎 「上総姉崎町の火葬骨器」『古代』29・30合併 1958
- 水野正好他 『考古学ジャーナル』276ニューサイエンス社 1987

森 浩 一 『墓地』社会思想社 1984
同他 『論集 終末期古墳』塙書房 1973
矢戸三男他 『阿玉台北遺跡』千葉県都市開発公社 1975
吉田章一郎 『千葉県山武町森台古墳群の調査』森台遺跡発掘調査団 1983
米内邦雄他 『千代田遺跡』1972
和田晴吾 「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』134考古学研究会 1987
渡辺政治 「上総地方の横穴墓について」『研究連絡誌』18千葉県文化財センター 1986

『武者塚(武者塚1号墳調査概要)』武者塚古墳発掘調査団 1983
『武者塚(武者塚1号墳発掘調査速報)』武者塚古墳発掘調査団 1983
「武者塚一号墳」『茨城県遺跡・古墳発掘調査報告書IV』茨城県教育委員会 1986
『長岡京市埋蔵文化財センター年報』長岡京市埋蔵文化財センター 1984
『荘園・館・経塚』兵庫県埋蔵文化財調査事務所 1985
『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会 1987

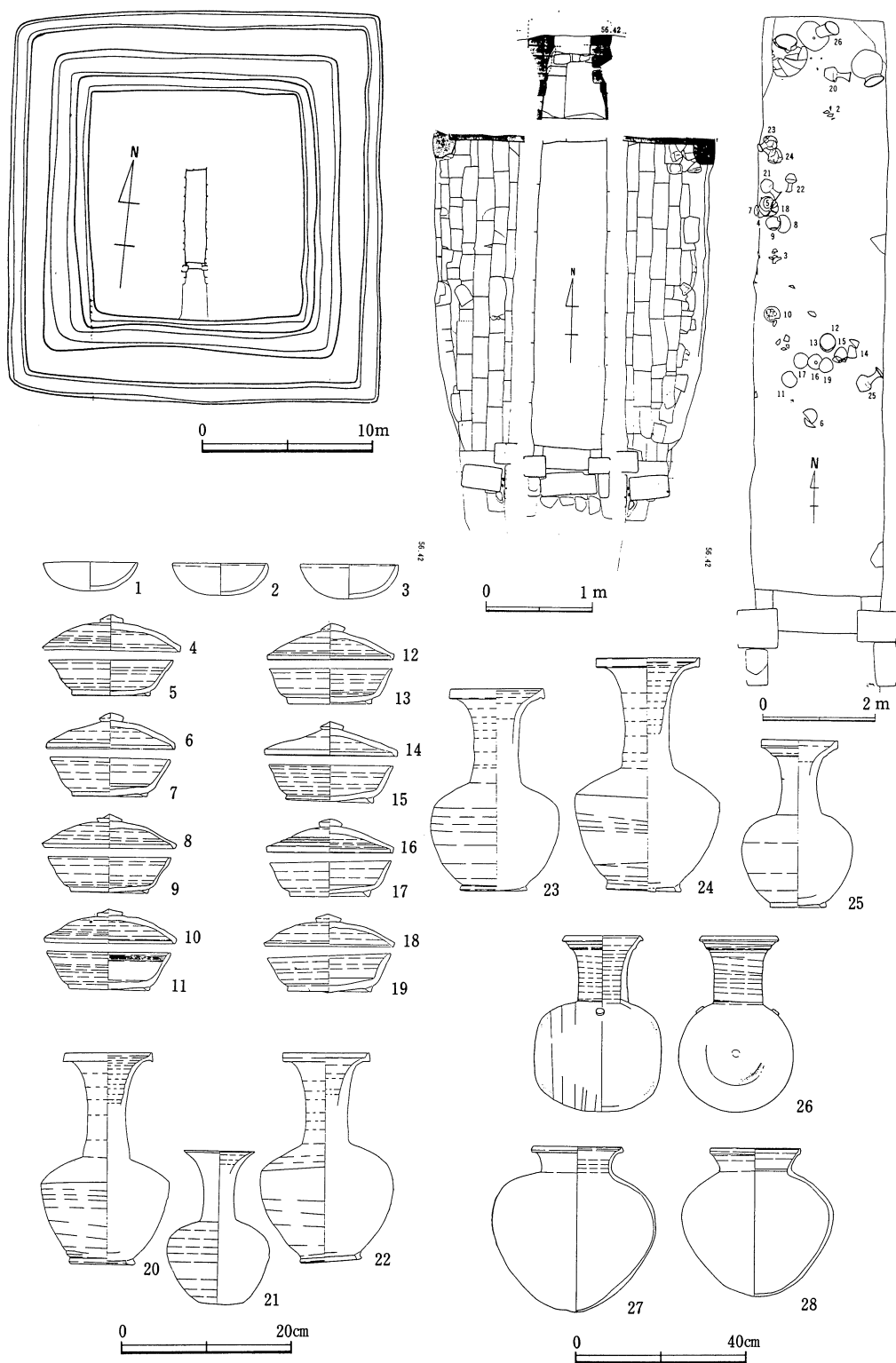


図1 房総における終末期古墳(横穴式石室)請西山伏作5号墳と出土遺物

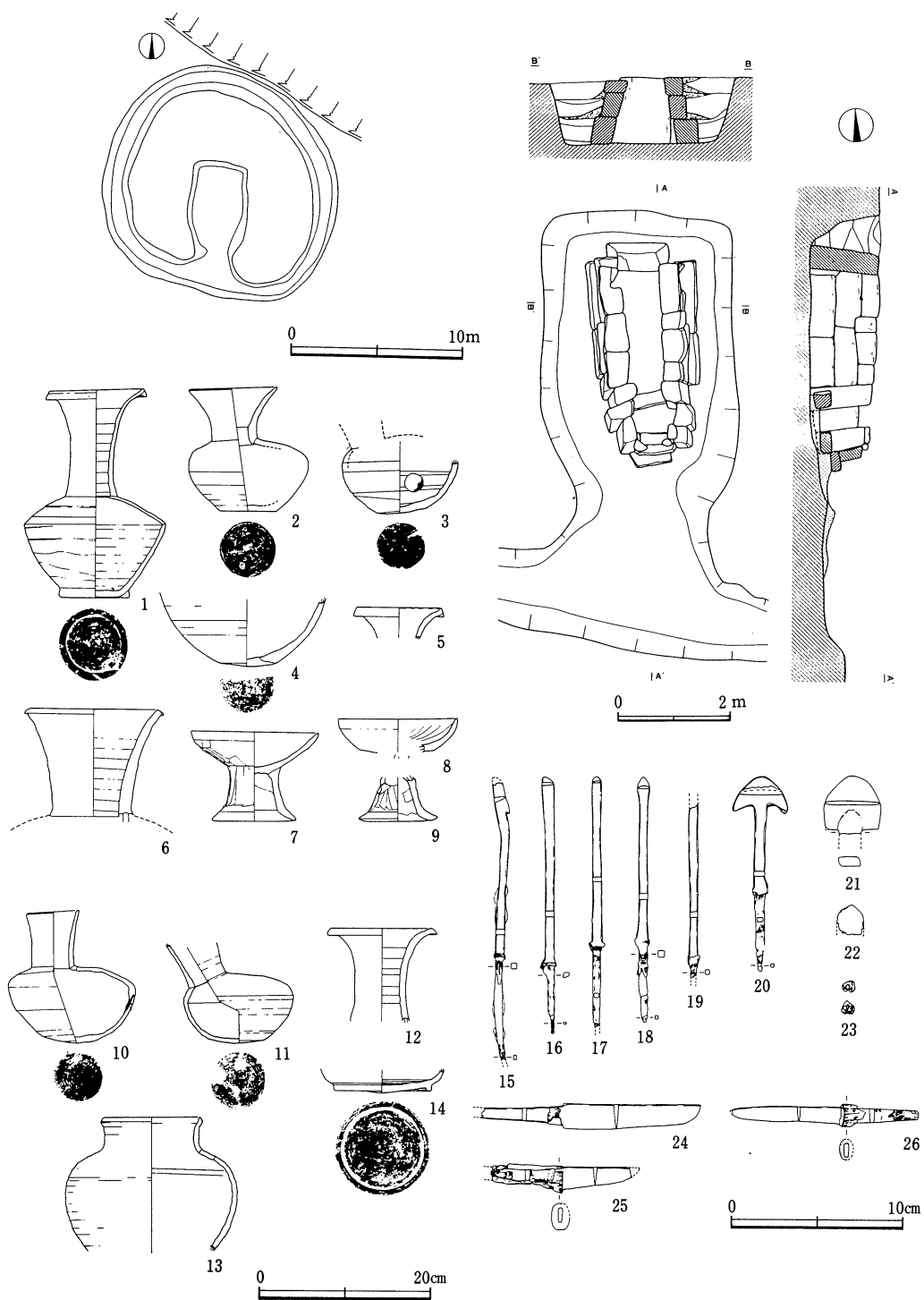
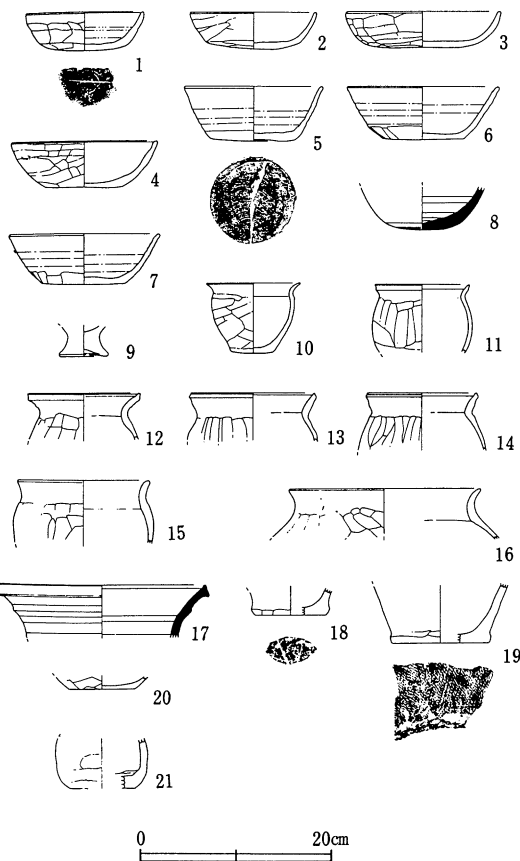
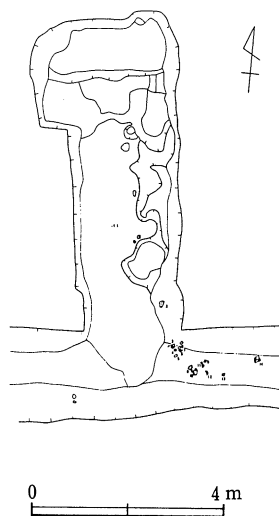
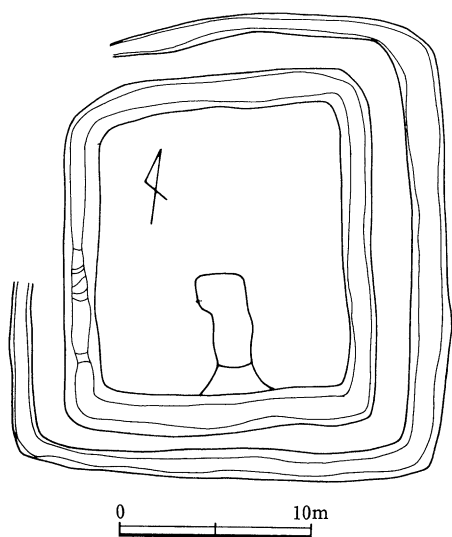


図2 房総における終末期古墳(横穴式石室)小金沢19号墳と出土遺物



雉子ノ台古墳群は7世紀後半～8世紀前半を中心とする古墳群であり、内部施設に人骨の残存する例が多い。

また、8号墳からは地山掘込墓壇と共に長さ2m、幅1m、深さ90cm前後の箱式石棺が検出されており、内部から仰臥伸展葬された2体の人骨が検出されている。

2体の身長は、1m70cm前後と1m55cm前後に推定され、終末期古墳における石棺・木棺等の一つの大きさを示す例として注目している。石材に比べ腐食しやすく、無形化してしまう木棺は痕跡だけの検出がほとんどであり、また地下式横穴墓などの棺座と考えられる台状の高まりが同程度であることは、両者共に伸展葬であったことの裏付と考えられる。

5、6、7はやや時期が下る可能性も考えられることから、追葬が行なわれた可能性も考えられる。

図3 房総における終末期古墳(横穴式石室片袖構造)雉子ノ台6号墳と出土遺物

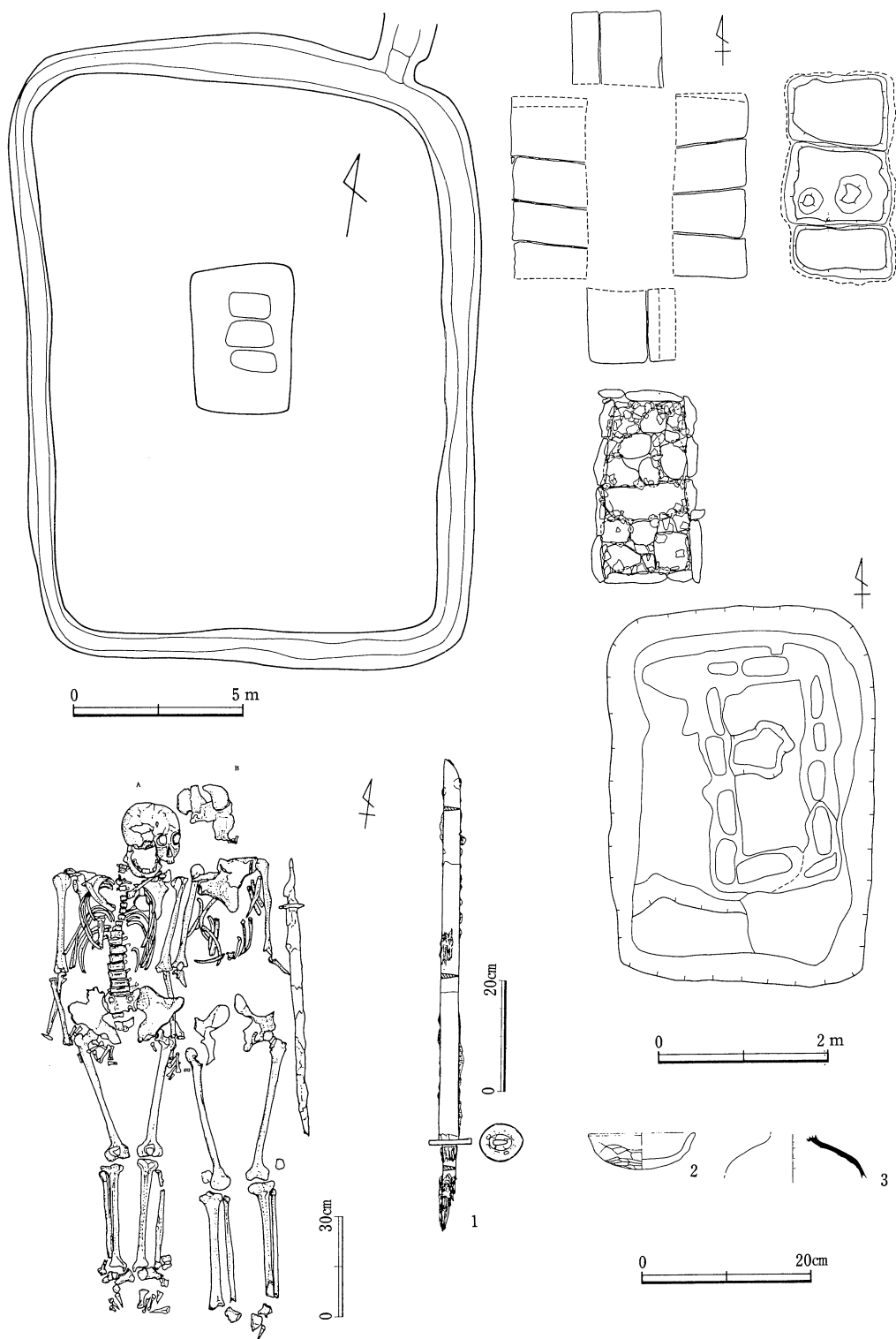


図4 房総における終末期古墳(箱式石棺十地山掘込墓)雉子ノ台8号墳と出土遺物

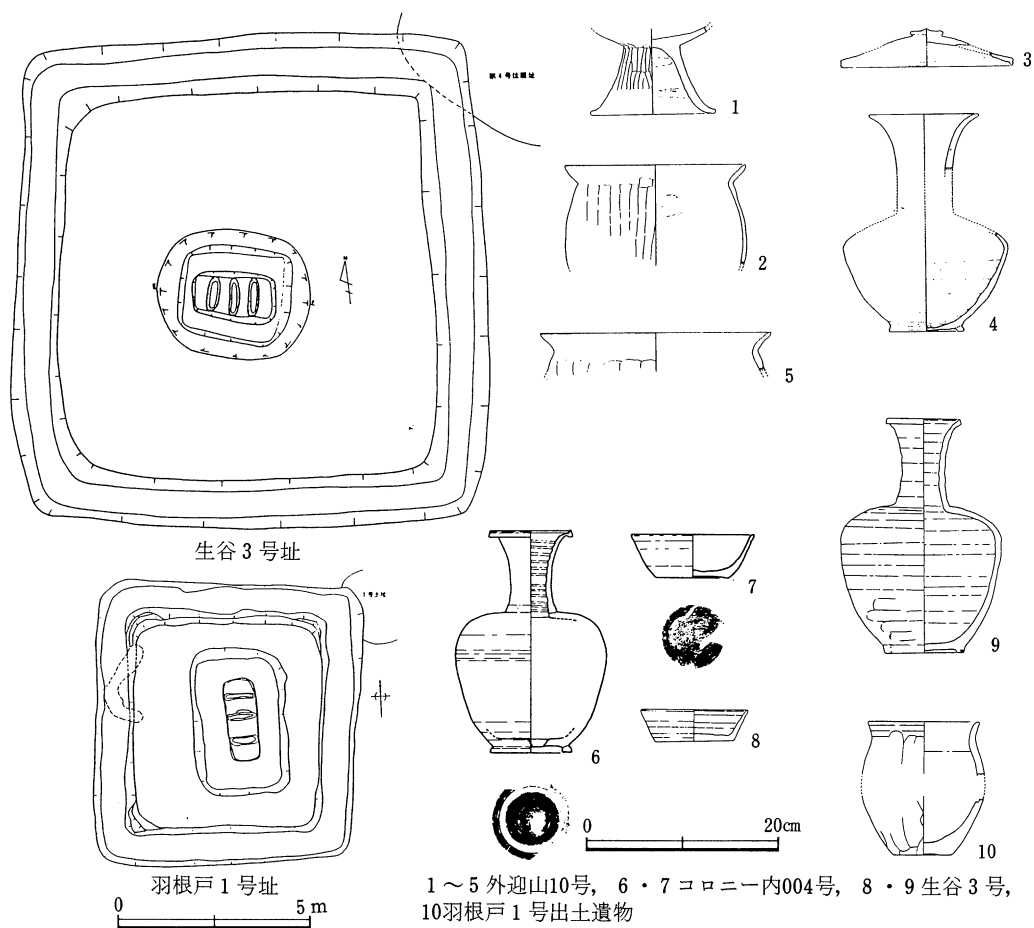
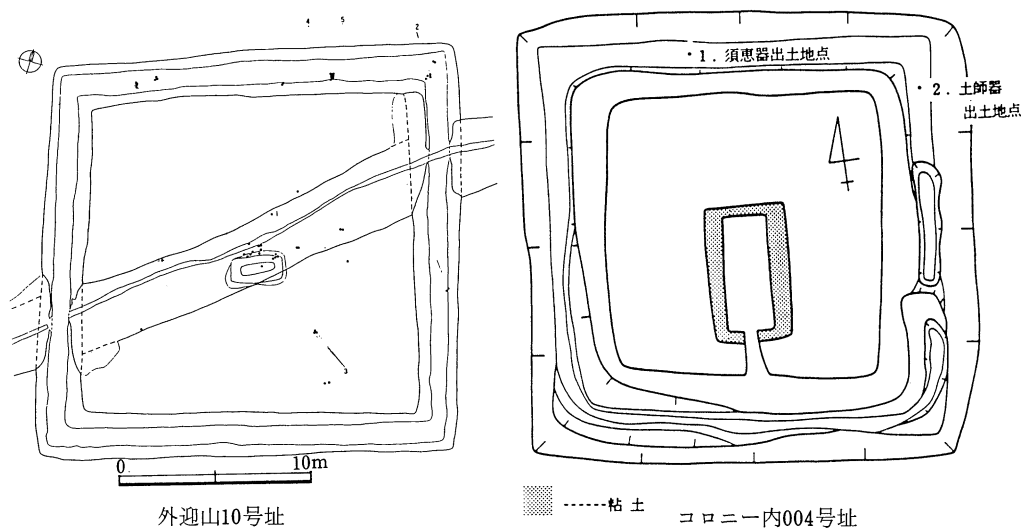
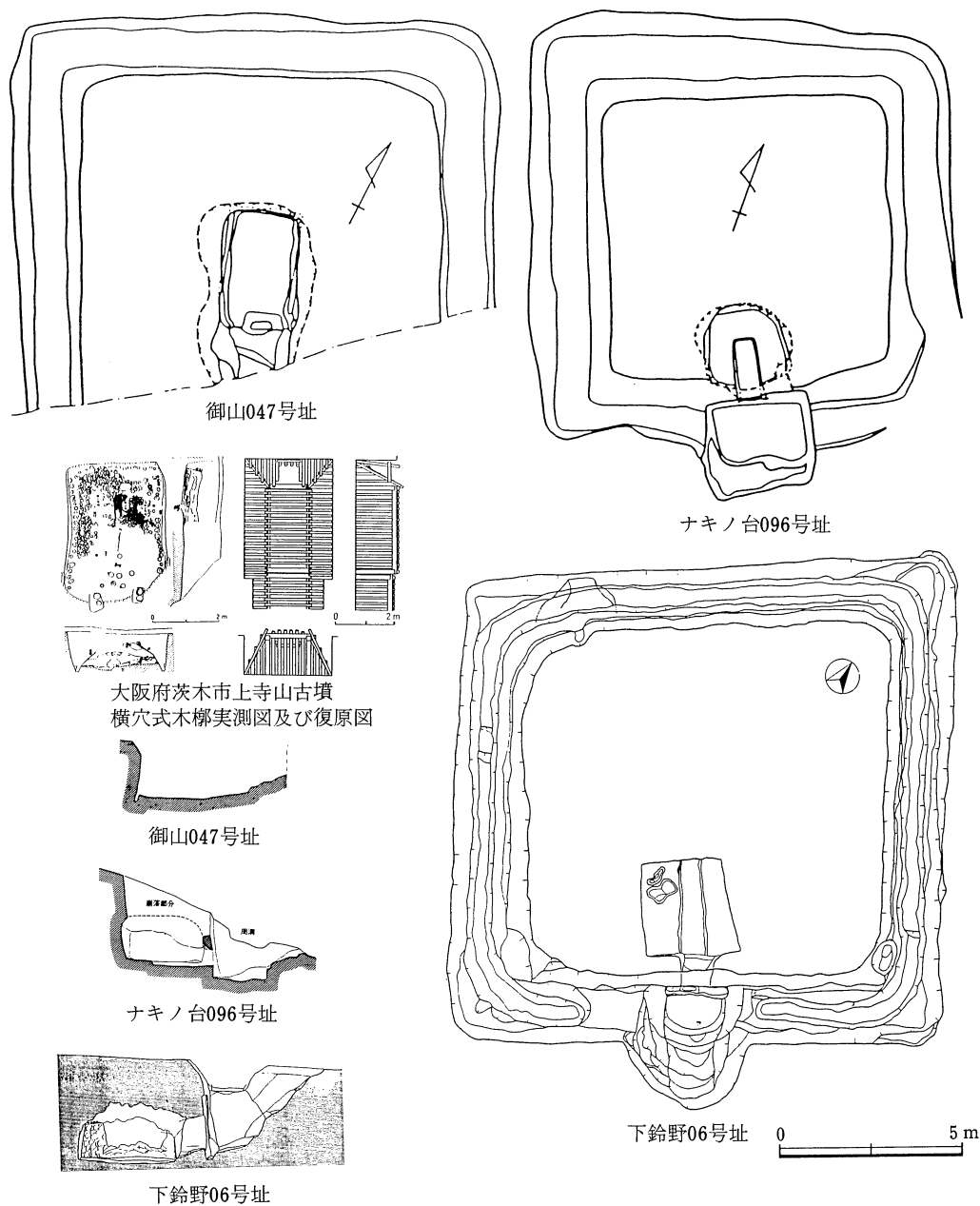


図5 房総における終末期古墳(木棺直葬系及び横穴式石室系粘土室)



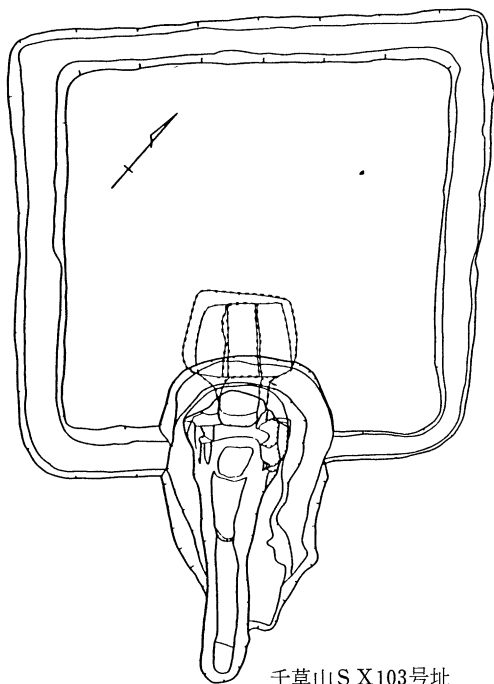
御山047号址内部施設は、横穴式木槨による埋葬施設である。この他、ナキノ台096号址、下鈴野06号址、千草山SX103号址は、地下式横穴墓を内部主体として採用している。共に横穴式石室及び横穴墓の影響を受けているものであり、伸展葬可能な空間を有している。次に紹介する地下式改葬系の内部施設を採用するものとは、葬法において明瞭に区別される。

御山・ナキノ台は渡辺修一「群小区画墓」終焉期(2)研究連絡誌第14号(1985)より転載。

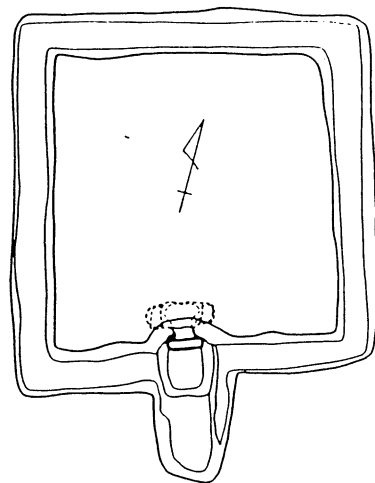
上寺山古墳は白石太一郎「古墳の知識Ⅰ」東京美術考古学シリーズ19より転載。

原則として報告書刊行のものは転載書名を掲載しない。

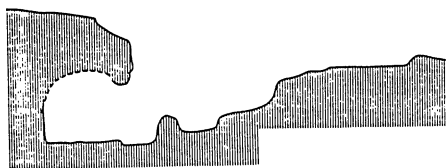
図6 房総における終末期古墳(横穴式木槨系及び地下式横穴系)



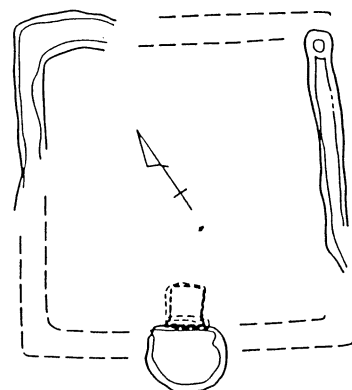
千草山 S X 103号址



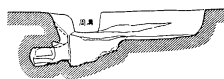
ナキノ台090号址



千草山 S X 103号址



川焼台174号址



ナキノ台090号址



川焼台174号址



各施設断面

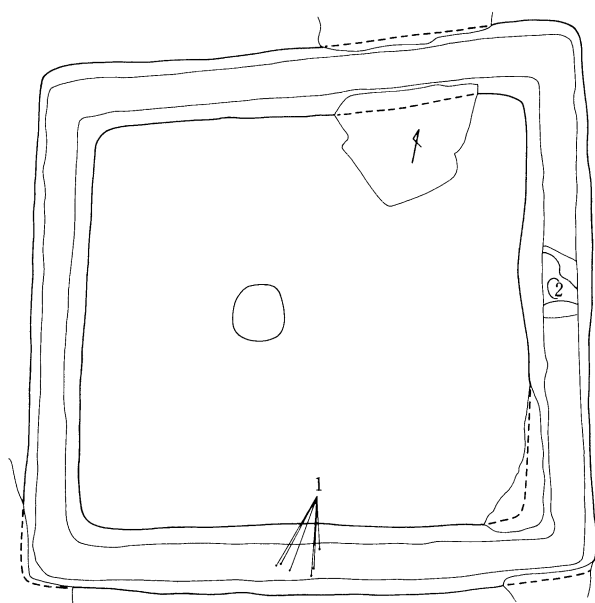
千草山 S X 103号遺構は、伸展葬可能な地下式横穴を内部施設として採用。玄室内からは骨粉と共に馬の顎骨と歯が検出されている。

ナキノ台090号址・川焼台174号址の玄室内からは共に骨粉が検出されている。これらの類似施設では市原市諏訪台遺跡においても検出されており、玄室内には改葬骨が検出されている。共に伸展葬が不可能な内部施設であり、(田中新史氏の分類によれば地下式改葬墓であり、区画を伴わず単独で検出されるものも、諏訪台遺跡等では検出されている)これらの遺構は改葬骨を収納する埋葬施設と考えられる。

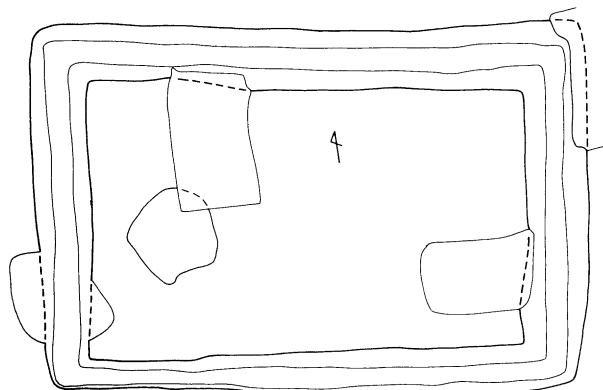
「千草山遺跡」市原市文化財センター年報1985より転載。

前掲 研究連絡誌14号1985より転載。

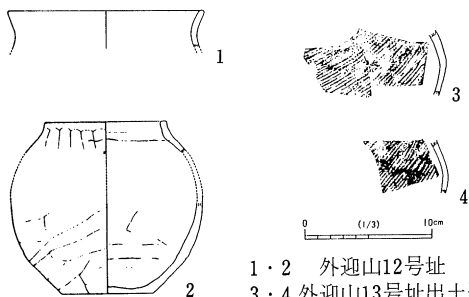
図7 房総における終末期古墳と改葬系区画墓(再葬系)



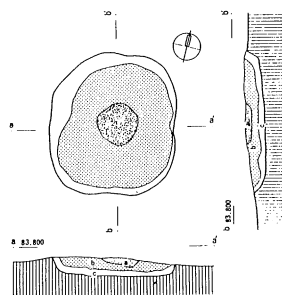
外迎山12号址



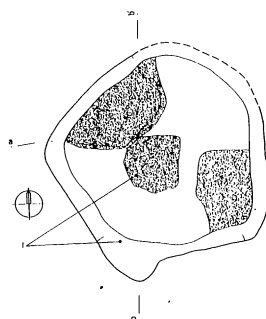
外迎山13号址



1・2 外迎山12号址
3・4 外迎山13号址出土遺物



外迎山12, 13号址内部施設



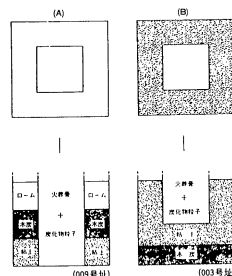
内部施設

外迎山12号址は、黄灰色粘土(b)中央に茶褐色粘質土が検出されている。

外迎山13号址は、焼土・山砂を多量に炭化物を少量含んでいる。

いずれも伸展葬による埋葬は不可能である。同様の遺構は、鼻欠・打越岱・諏訪台の各遺跡で検出されており、打越岱・諏訪台のものは、火葬骨が検出されている。

これらのことから、粘土や山砂・木炭を使用するこれら一連の内部施設は火葬系のものと考えられる。



打越岱遺跡方形周溝状遺構
埋葬主体部模式図

図8 房総における改葬系区画墓(火葬系)

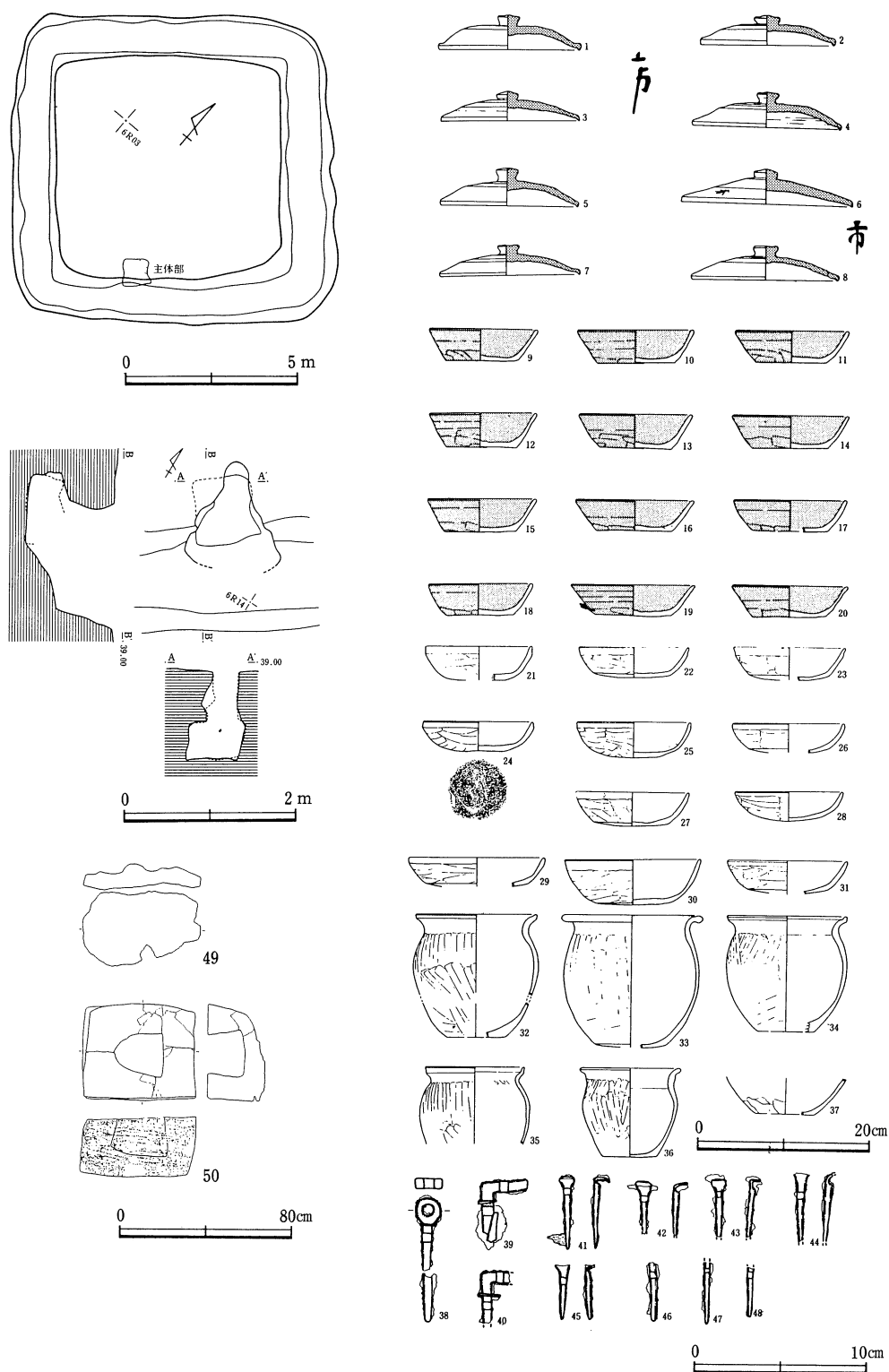


図9 房総における改葬系区画墓(火葬系)土持台29号址

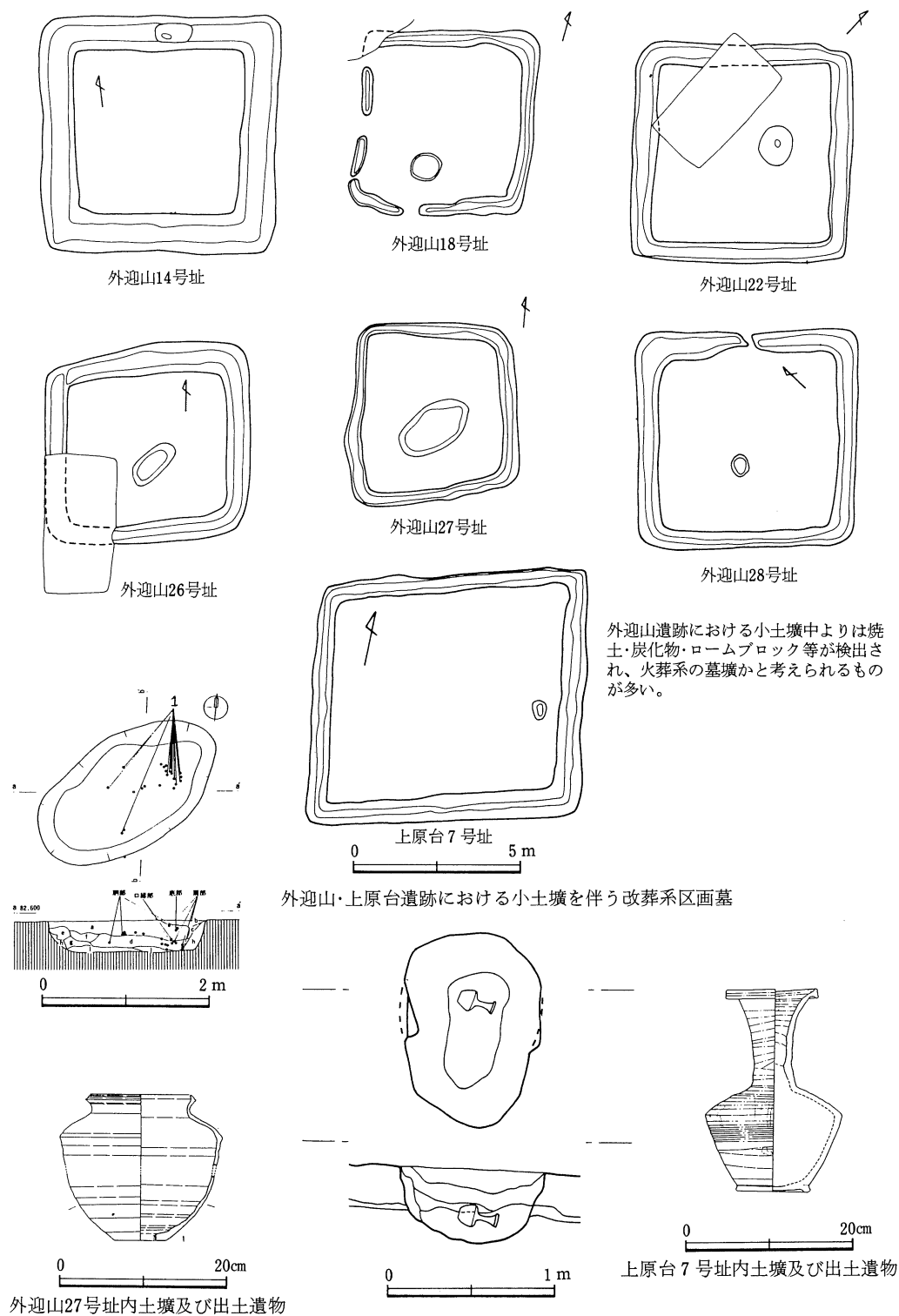
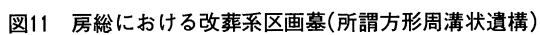


図10 房総における改葬系区画墓(小土壙)



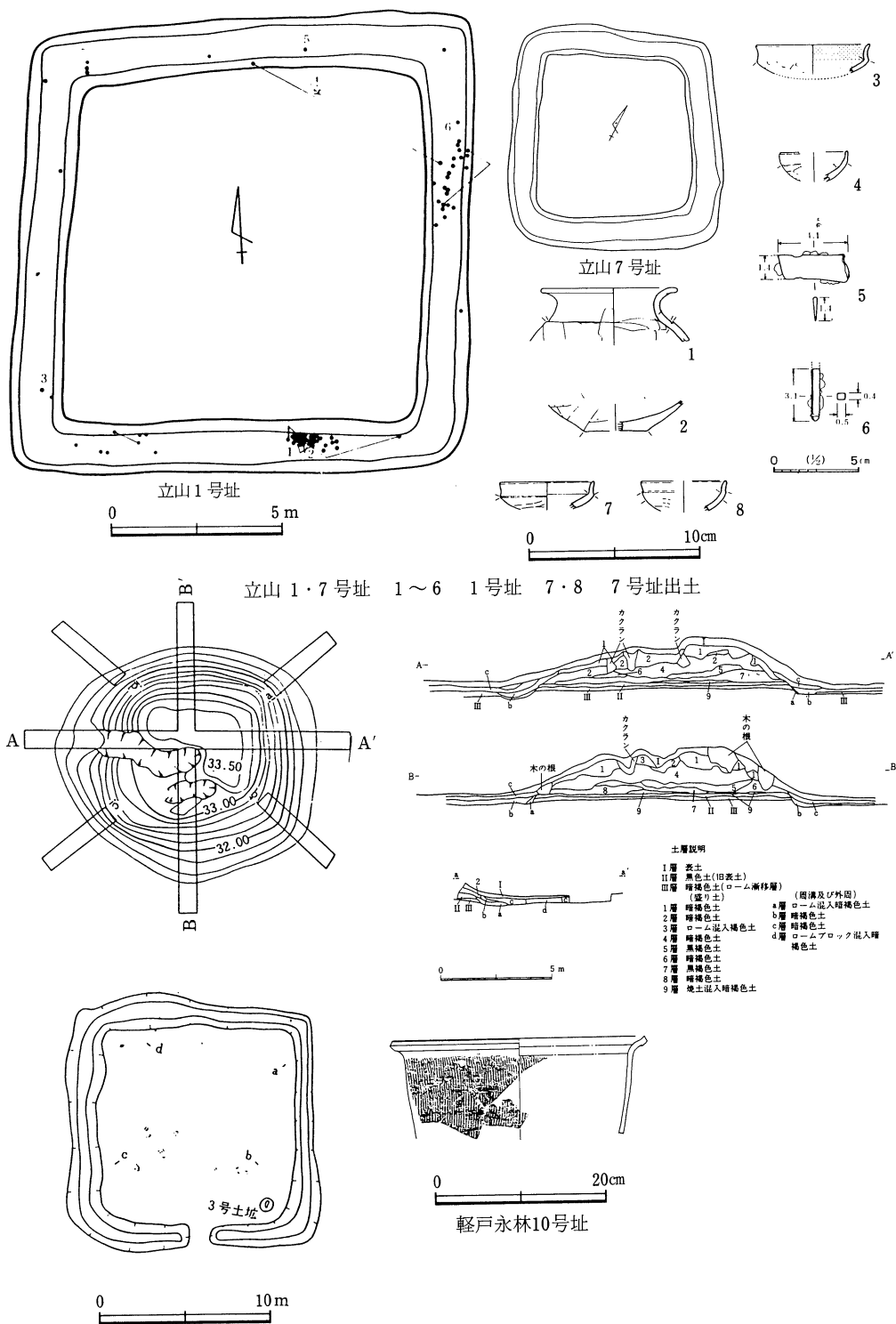
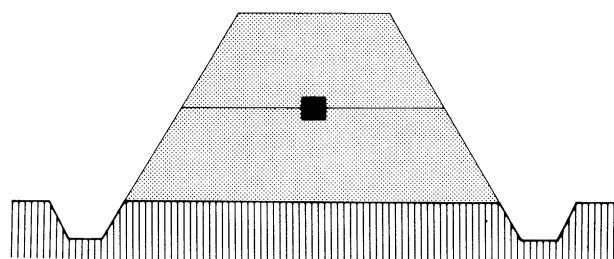
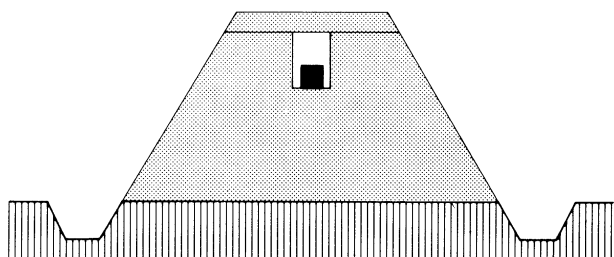


図12 房総における改葬系区画墓



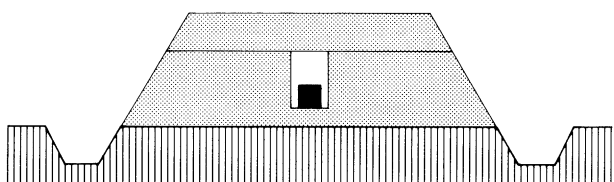
1. 墳丘内無墓壇

千葉市石神2号墳
市原市大厩浅間様古墳



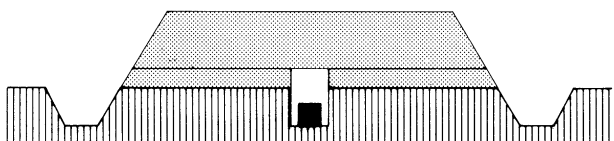
2. 墳頂掘込墓壇

市原市小田部古墳



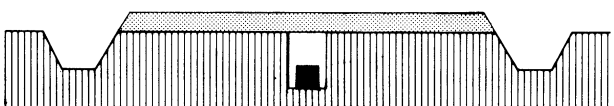
3. 墳丘内掘込墓壇A

市原市根田1号墳
市原市上総山王山古墳



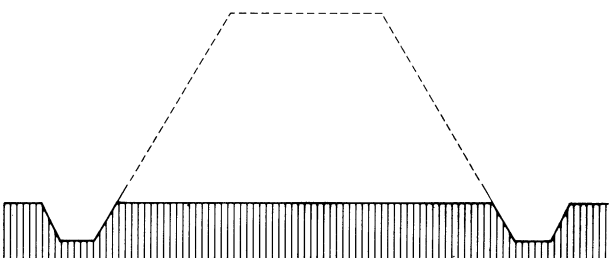
4. 墳丘内掘込墓壇B

市原市外迎山10号



5. 地山掘込墓壇

四街道市羽根戸



6. 墳丘・内部施設が完全に削平されて
しまった一連の方形周溝状遺溝等

図13 古墳における埋葬施設の位置(模式図)

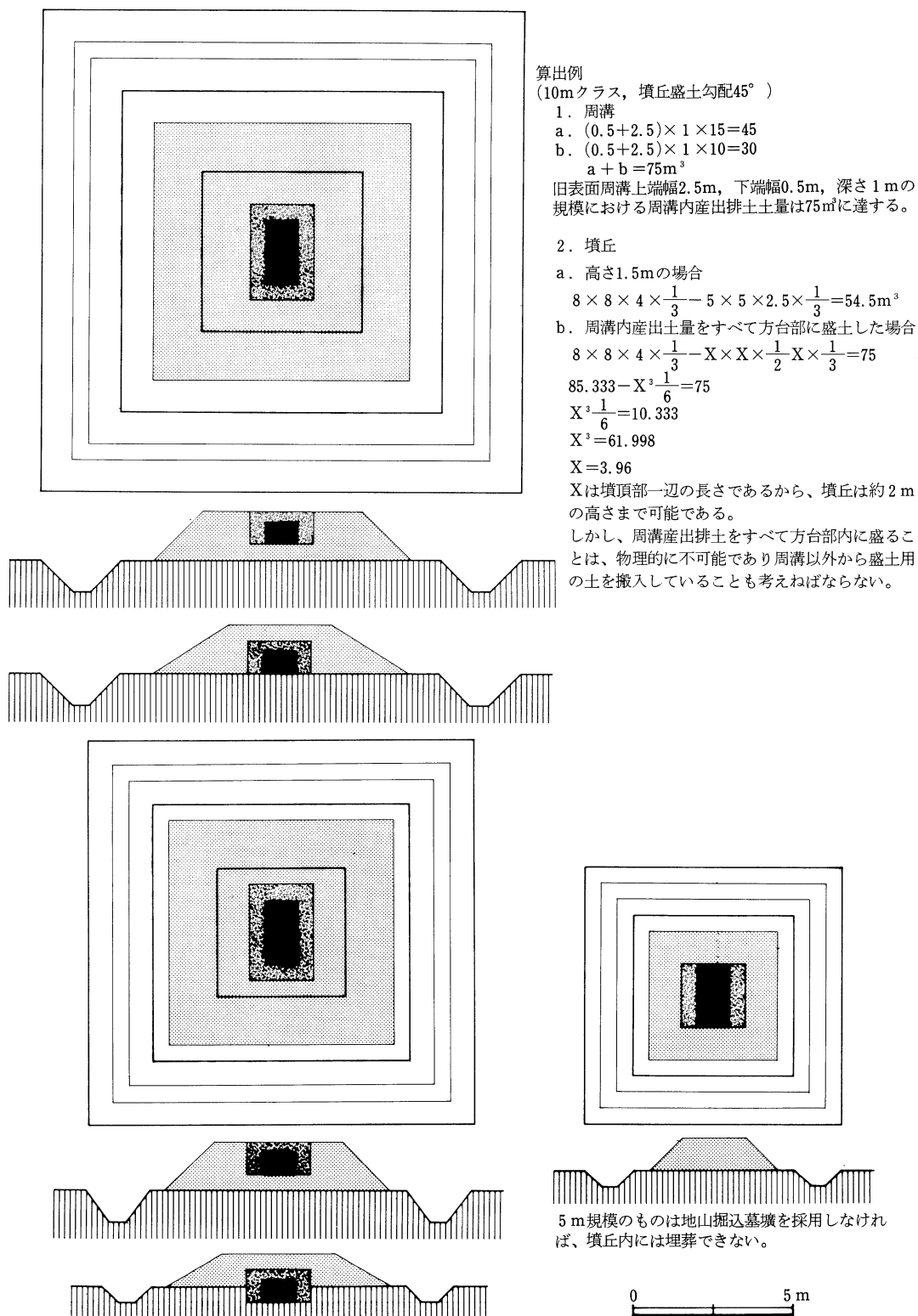


図14 古墳における周溝排土量と盛土及び内部施設の関係(模式図)

千草山遺跡の再検討

田 中 清 美

1. はじめに

3. 時期区分

2. 分類

4. 竪穴住居の変遷

1. はじめに

本考でとりあげる千草山遺跡とは、昭和50年から51年にかけて発掘調査された、千葉縣市原市能満字西千草山1,450地先他に所在する約23,500㎡の範囲である。調査報告書は、千草山遺跡発掘調査団より「千葉縣市原市千草山遺跡発掘報告書」として1979年に発行されている。千草山遺跡は、房総半島の東京湾より約5km入った、南側を除く三方を小谷に囲まれた舌状を呈する標高約30mの台地上である。当遺跡は、以前より布目瓦が採集され、昭和38年の調査では、土壇状の基壇や上総国分寺と同範の二十四葉単弁蓮華文軒丸瓦などが出土して、「千草山廃寺跡」とも言われている⁽¹⁾。今回の調査では、千草山遺跡の北西平坦部にあたり、縄文時代早期の炉穴8基分、中期竪穴住居跡1軒、古墳時代後期初頭頃の円墳(墳丘は残存しない)1基、古墳時代後期から平安時代にいたる竪穴住居跡72軒分、掘立柱建物跡9棟分以上などが検出されている。また、均正唐草文軒平瓦片が散集されている。

本考では、この中の古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居跡について、それらからの出土土器を中心として、一部簡単に分析を行ない、当遺跡を再考してみたい。

2. 分類

刊行された報告書で取り上げた土器は、床面直上とカマド内より出土した遺物を中心に掲載している。また、覆土内出土についても復元可能な土器を含めている。しかし、全体としては、出土土器の量は少なく、今回は、さらに覆土内の破片を追加して取り上げた⁽²⁾。分類作業としては、まず検出した72軒分の竪穴住居跡より出土した土器を器種別に型体分類を行ない、その分類型別に各住居跡の様相を調べて、切り合いや既存の編年及び指標となる土器などを参考に編年操作を行ない。各時期別の竪穴住居跡の変遷や特徴を簡単に追ってみることとしたい。

注

(1) 平野元三郎 昭和39年「市原市上総国府関係遺跡」『千葉県遺跡調査報告書』千葉県教育委員会

(2) なお、一部須恵器については、田中新史氏の実測図を利用してトレースさせていただいた。

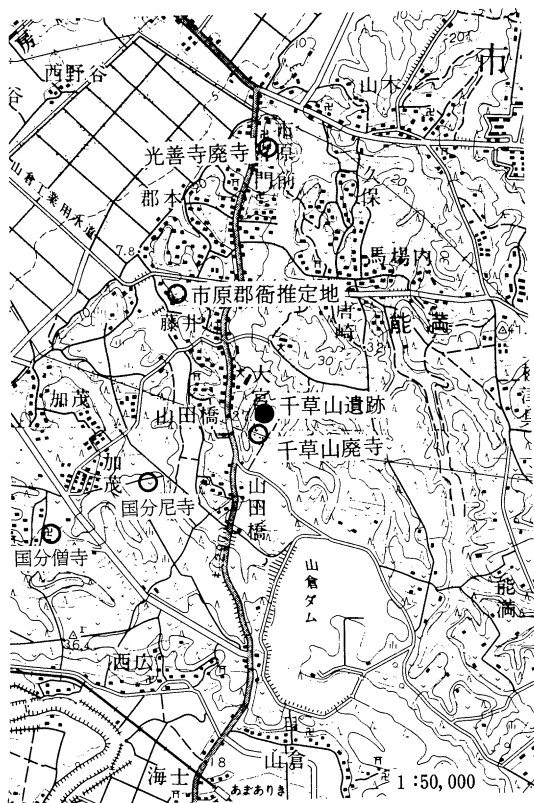


図1 千草山遺跡位置図

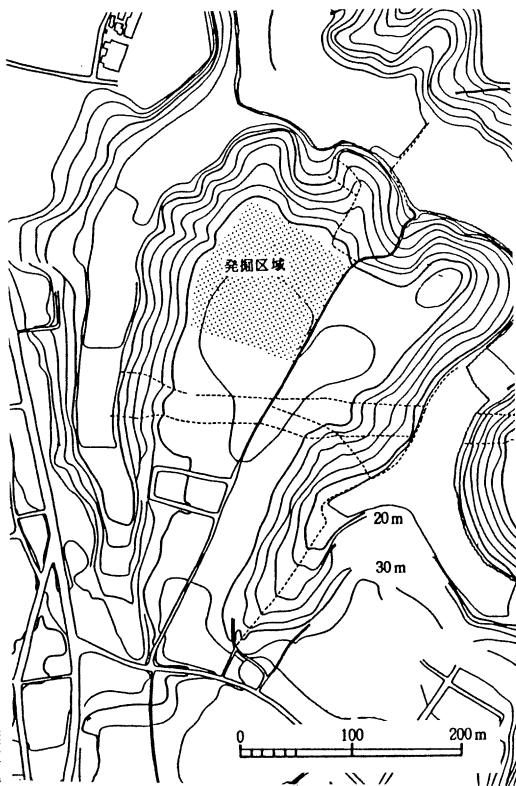


図2 周辺の地形図



図3 千草山遺跡竪穴住居跡配置図

(1) 土師器坏

Aは、非ロクロである。

A－a．丸底で体部は浅い碗状を呈し、器高4.0cm前後、口径13.7cm前後を計る。外面口縁部は、横ナデ、体部は、ヘラナデ、内面は、全面横方向のヘラミガキが施される。内面は、黒色処理(漆仕上げも含む)がなされる。また、粘土積み痕跡が一部に認められる。

A－b．丸底で体部は浅い碗状を呈し、aに似るが、小型である。器高2.8cm、口径11.8cm。

A－c．丸底で碗状を呈し、器高は、4.0～4.6cm。口径11.5～12.5cmを計る。外面口縁部は横ナデ、体部は横方向のヘラケズリ、内面は、ヘラナデかヘラミガキが施される。内面黒色処理の坏も2点みられる。

A－d．丸底で小型の碗状を呈する。器高3.8cm、口径10.1cmを計る。外面に赤彩がなされる。外面口縁部は横ナデ、体部はヘラケズリ、内面は、全体に横方向のヘラミガキ。

A－e．丸底で口縁部は稜をもち、直立する。器高3.5～4.3cm、口径11.5～13.5cmを計る。1点が内面黒色処理である。外面口縁部は、横ナデ、体部は、横方向のヘラケズリ、内面口縁部は、横ナデ、体部は、横方向のヘラミガキがなされる。

A－f．形体、成整形ともeに似るが、全体に小型で器高が4.7cmとやや高い。口径は10.6cm。

A－g．丸底で口縁部は、稜をもち内傾する。器高は3.6～4.2cm、口径は、10.7～12.9cmを計る。

外面口縁部は、横ナデ、体部は、横方向のヘラケズリ、内面口縁部は、横ナデ、体部は、横方向のヘラミガキとナデ。

A－h．形体、成整形ともgに似るが、全体に小型である。器高2.7～3.8cm、口径9.3～9.5cm。

A－i．丸底で口縁部は、稜をもち外反する。器高は3.9～4.2cm、口径は、12.0～12.4cmを計る。外面口縁部は、横ナデ、体部は、ヘラケズリ、内面口縁部は、横ナデ、体部はヘラナデ。

A－j．丸底で口縁部は、稜をもたず直立する。器高3.4～5.5cm、口径11.6～15.0cm、外面口縁部は、横ナデ、体部は、ヘラナデまたは、ヘラケズリ、内面口縁部は、横ナデ、体部は、ヘラナデまたは、ヘラミガキ。1点のみであるが、粘土紐接合痕を残す坏がある。

A－k．jよりも口縁部の全体に対する割合が小さい。他は、形体、成整形ともjに似る。器高3.7～5.1cm、口径10.2～13.5cm、1点だけ、内面が黒色処理の坏もみられる。

A－l．形体、成整形ともjに似るが、全体に小さく、やや碗状を呈する。器高4.9cm、口径9.6cmを計る。外面口縁部は、横ナデ、体部は、横方向のヘラケズリ、内面口縁部は、横ナデ、体部は、斜め方向のヘラケズリがなされる。

- A－m．丸底で口縁部は、稜をもたず内傾する。器高4.0～5.7cm、口径10.9～13.5cmを計る。
外面口縁部は、横ナデ、体部は、横方向のヘラケズリまたはヘラナデ、内面口縁部は、横ナデ、体部は、横方向のヘラナデまたは、ヘラミガキ、全面に横方向のヘラミガキをなされる坏もある。内面に黒色処理する坏も1点みられる。
- A－n．mに形体、成整形とも似るが、全体の形が、やや偏平で小型である。器高は3.8～4.3cm、口径は、10.2～11.5cmを計る。2点ほど内面黒色処理がみられる。
- A－o．丸底で稜をもたず、口縁部は内傾し、小さな碗状を呈する。器高4.1cm、口径7.4cmを計る。内外面の口縁部は、横ナデ、体部は、外面がヘラケズリ、内面は、ヘラナデ。
- A－p．丸底で稜をもたず、口縁部は、大きく外反する。器高は4.2cm、口径は、13.0～14.1cmを計る。外面は、斜め及び横方向のヘラミガキ、内面も横方向のヘラミガキ。
- A－q．丸底で稜をもたず、口縁部は、小さく外反する。全体に小型で、器高は、3.0～4.8cm、口径は、11.1～13.3cmを計る。口縁部は、内外面とも横ナデ、体部は、外面がヘラナデまたはヘラケズリ、内面は、ヘラナデまたはヘラミガキである。2点が内面黒色処理がなされ、1点は、粘土紐接合痕がわずかに残る。
- A－r．丸底で口縁部は、稜をもたず、全体に対する割合が大きく、やや開きぎみに外反する。器高4.2cm、口径13.0cmを計る。口縁部は、内外面とも横ナデ、体部は、外面が、横方向のヘラナデとヘラケズリ、内面は、横方向のヘラミガキが施される。
- A－s．平底で、開きぎみの碗状を呈し、口縁端部がわずかに外反する。器高4.0～4.9cm、口径12.6～13.1cmを計る。外面口縁部は、横ナデ、体部は、ヘラケズリの後一部ヘラミガキ、内面口縁部は、横ナデ、体部は、ヘラナデの後ヘラミガキ。焼成は良好である。
- A－t．少し小さめの平底で、体部は、やや開きぎみの碗状を呈し、厚手である。粘土紐接合痕を一部に残す。器高4.1cm、口径11.5cm、口縁部は、両面とも横ナデ、外面の体部は、横方向のヘラナデ、内面は、横方向のヘラミガキがなされる。
- A－u．平底で、開きぎみのやや浅い碗状を呈する。器高は、4.1～4.7cm、口径は、12.1～14.2cm。口縁部は、両面とも横ナデ、外面体部は、横方向のヘラケズリまたはヘラナデ、内面体部は、横方向のヘラナデまたは、ヘラミガキがなされる。
- A－v．平底で、浅く小型。体部は、わずかに丸みをもって立ち上がる。器高3.3～3.5cm、口径10.7～11.3cmを計る。口縁部は、両面とも横方向のヘラナデ、体部は、外面が横方向のヘラケズリ、内面が横方向のヘラナデまたはヘラミガキがなされる。
- A－w．uに似るが、口縁部が、わずかに直立する。器高4.7cm、口径12.1cmをはかる。
- A－x．少し広めの平底で、浅く開きぎみに立ち上がる。厚手である。器高4.6cm、口径14.6cm。摩耗が激しく、整形等は、不明瞭である。

A-y. 広い平底を呈する。盤状の坏である。器高3.7cm、口径15.6cmを計る。外面は、横及び斜め方向のヘラケズリ、内面口縁部は、横ナデ、体部は、横方向のヘラミガキ

Bは、ロクロ成形である。

B-a. 逆台形でわずかに浅く小型、体部の立ち上がりに少し丸みをもつ。底部は、回転糸切り離しの後に、底部と体部外面下端を手持ちヘラケズリがなされる。器高4.9cm、口径14.6cm。内面は、横方向のヘラミガキの後、黒色処理が施されている。

B-b. 逆台形で、やや浅く、少し小型の坏である。底部は、回転糸切り離し後無調整。器高3.6~4.2cm、口径12.4~12.9cm。

B-c. bに似るが、体部の立ち上がりに丸みをもつ。底部は、回転糸切り離し後無調整。器高4.0cm、口径12.7cm。

B-d. b・cに比して、器高が高く、口径が小さい形体を呈する。器高4.6cm、口径12.5cm。底部は、回転糸切り離し後無調整。

B-e. 底部が小さく、体部は、やや開きぎみに立ち上がるやや小型の坏。底部は、回転糸切り離し後無調整。器高4.8cm、口径12.0cm。

B-f. 偏平で皿状を呈する坏。底部は、回転糸切り離し後無調整。器高2.7cm、口径13.5cm。

B-g. 少し小形で体部は、やや丸みをもって立ち上がる。底部は、回転糸切り離し後、周辺を手持ちヘラケズリ。器高5.0cm、口径13.3cmを計る。

B-h. 底部を回転ヘラ切り離し後無調整。内面は、ヘラミガキで黒色処理。底部破片のみ。

B-i. ハの字状の小さな高台付の底部をもち、底部切り離しは、回転ヘラケズリ。厚手。

B-j. 高台はiに似るが、少し薄手で、底部は、回転糸切り離し後無調整、器高5.1cm、口径13.0cm、内面は、横方向のヘラミガキで黒色処理がなされる。

B-k. 碗状でやや開きぎみの体部をもつ坏で、底部は、回転ヘラ切り離しの後、ハの字状の小さな高台が付く。器高4.7cm、口径14.4cm。

B-l. 少し大きめの碗状を呈し、底部は、回転糸切り離しの後、手持ちヘラケズリ調整、またハの字状の高台が付く。内面は、ヘラミガキで黒色処理(内黒)されている。

B-m. bに似るが、bより小型になっている。

(2) 土師器鉢(碗については、坏と鉢の中に分けて含めている。)

a. 大型で、深い碗状を呈し、いわゆる磁鉢型である。器高9.2cm、口径15.8cm。外面は、横方向のヘラナデ、内面は、方斜状のヘラミガキ。少し薄手で焼成は、少し不良。

b. 大型で、大きく開く碗状を呈する。大きさに大小が有り、器高は、5.8~7.7cm、口径は、14.9~22.2cm。口縁部は、両面とも横ナデ、体部は、外面が、横及び斜め方向のヘラケズリあるいは、ヘラナデ、内面は、横方向のヘラミガキあるいは、ヘラナデ。

- c. 厚手で、少し小型の碗状を呈する。粘土紐接合痕がわずかに外面に残る。器高6.5cm、口径14.3cm。口縁部は、両面とも横ナデ、体部は、外面が横方向のヘラケズリ、内面は、横方向のヘラミガキがなされる。
- d. 丸底であるが、体部と底部の境が明確であり、体部は、浅い碗状、口縁部は、小さく内傾する。器高3.8cm、口径11.1cm、口縁部は、両面とも横ナデ、体部は、外面が横方向のヘラケズリ、内面が横方向のヘラナデ。
- e. dに似るが全体にやや大型である。器高5.2cm、口径11.1cm。
- f. 丸底で、碗状を呈し、口縁部は、丸みをもって内傾する。器高4.2～6.8cm、口径11.5～13.5cm。口縁部は、両面とも横ナデ、体部は、外面が横方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデの後ユビナデがなされる。2点が内面黒色処理が施される。
- g. fに似るが、fより小形で厚手である。器高5.7cm、口径12.7cm前後。
- h. 丸底で碗状を呈し、口縁部は、稜をもち、わずかに直立ぎみに内傾する。器高6.4cm、口径11.1cm前後。口縁部は、両面とも横ナデ、体部は、外面が横方向のヘラケズリ、内面は、横方向のヘラナデ、1点が内面黒色処理がなされる。
- i. 丸底で浅い鉢形を呈し、口縁部に稜をもち、わずかに外反する。器高6.2cm、口径17.2cm、口縁部は、両面とも横ナデ、体部は、外面がヘラケズリ、内面がヘラナデ。
- j. 平底で、やや長く直立する口縁部をもつ。器高8.0～11.2cm、口径12.4～15.5cm。口縁部は、両面とも横ナデ、外面は、ヘラケズリとヘラナデ、内面は、ヘラナデ。摩耗が多い。
- k. 平底で、やや小さな碗状を呈し、口縁部は、少し長く、内傾する。器高6.6cm、口径9.4cm、口縁部は、両面とも横ナデ、体部は、外面がヘラナデ、内面は、横方向のヘラミガキ。
- l. 平底で、小型の碗状、口縁部は、内傾する。少し摩耗する。器高4.6cm、口径6.7cm。
- m. lに似るが大型である。器高6.8～11.1cm、口径13.5～17.1cm。口縁部は、両面とも横ナデ、体部は、外面が横方向のヘラケズリ、内面は、横方向のヘラナデの後ユビナデ。
- n. やや小さい平底で、碗状を呈し、口縁部は、内傾する。器高7.2cm、口径11.5cm。口縁部は、両面とも横ナデ、体部は、外面が横方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデ。
- o. 平底で、やや大形、口縁部は、直立した後に少し外反する。器高7.3～9.5cm、口径15.5～15.8cm。口縁部は、両面とも横ナデ、体部は、外面が縦方向のヘラケズリ、内面は、横方向のヘラナデ。
- p. 平底で、逆ハの字状に開く体部をもつ。器高8.4cm、口径15.5cm前後。両面とも横方向のヘラケズリ後ヘラナデ。
- q. 平底で、小形の碗状を呈し、口縁部がわずかに直立する。器高4.5cm、口径10.3cm。粘土紐接合痕がわずかに残る。両面とも、口縁部が横ナデ、体部が横方向のヘラナデ。

- r. 平底で、形体は小型の甕に似る。長胴ぎみで、口縁部は、短かく外反する。器高13.7cm、口径14.1cm。口縁部は、両面とも横ナデ、胴部は、外面が、縦及び斜め方向のヘラケズリとナデ、内面は、横方向のヘラナデ。
- s. 平底で、甕に似た形体を呈し、球状の胴部をもち、口縁部は、小さく外反する。器高13.9～15.5cm、口径14.6～17.7cm。口縁部は、両面横ナデ、胴部は、外面が、縦及び斜め方向のヘラケズリ、内面は、横方向のヘラナデ。

(3) 土師器甕

- a. 少し長胴で、最大径は、胴部やや上位にもち、口頸部は、少し凹凸が有り、口縁部は、ややつまみあげられて外反する。口縁部は、両面とも横ナデ、胴部は、外面が縦及び斜め方向のヘラケズリの後ヘラミガキ、内面ヘラナデ、一部ヘラミガキ。
- b. 大型の球状を呈する胴部をもち、最大径は、胴中位で径29.6～29.9cm。形体や成整形は、aに似る。
- c. 長胴で胴最大径は、中部やや上位、口縁部は、くの字状にちかく外反する。口縁部は、両面とも横ナデ、胴部は、外面がヘラケズリ、内面はヘラナデ。
- d. 長胴で、最大径は、口縁部にもち、胴最大径は、上位に有り、口縁部は、ゆるやかに外反。
- e. 長胴で、最大径は、胴中位にもち、口縁部は、ゆるやかに外反。
- f. 長胴で、最大径は、口縁部に有り、胴部は、あまり張りがみられない。
- g. 長胴で、最大径は、口縁部に有り、胴部最大径は、中位で、口縁部は、横方向にちかく外反する。
- h. gに似るが、gより大型である。
- i. 長胴で、最大径は、口縁部にもち、胴部最大径は、上位。口縁部は、少し長く外反する。
- j. 長胴で、胴部最大径は、胴上位。口縁部は、小さく外反する。
- k. 少し器高が低く、最大径は、胴上位で、口縁部は、直立ぎみに外反する。
- l. 球状の胴部をもち、口縁部は、小さく外反する。
- m. 大型で球状を呈するとみられ、口縁部は、小さく、くの字状に外反する。
- n. 大型で球状を呈するとみられ、口頸部は、コの字状にちかく、口唇部は、つまみ上げられて、わずかに直立する。
- o. 小型で球状を呈し、口頸部は、コの字状を呈し、口唇部は、横に開く。
- p. 小型で球状を呈し、口縁部は、外反し、口縁部外側に面をもつ。
- q. 小型で球状を呈し、口縁部は、小さく、くの字状に外反する。
- r. さらに小さく、鉢ともみられるが、球状で、口縁部は、小さく、くの字状に外反する。

s. 小型で、口縁部は、くの字状に外反する。胴部は球状。薄手である。

(4) 土師器甑

すべて一孔の形体である。

- a. 少し大型で、胴部は丸みをもって大きく立ち上がり、口唇部は、つまみあげられ、面がある。
- b. 少し小型で、いわゆる砲弾形を呈する。口唇部に面をもつ甑もみられる。
- c. bに似るが、胴の立ち上がりは、少し直線的で、口縁部は、短かく開いている。
- d. 砲弾形で、下端(孔)ほど径が細くなる。
- e. 長胴で、胴部は丸みをもち、孔は広い。内面のヘラミガキはていねいである。
- f. 長胴で、胴部上位に張りをもつ。
- g. 長胴ぎみの形体で、やや直線的に開く。

(5) 土師器高坏

- a. 脚が細く柱状を呈し、坏部は、偏平である。
- b. 脚は長く、丸みをもってハの字状に開き、坏部は、逆ハの字状に立ち上がる。
- c. 脚が短かく直立する。坏部は碗状で短い。全体に小型の高坏である。
- d. 弧状をもって広がる脚部とやや小さめの浅い碗状の坏部をもつ。
- e. 短かく、やや直線的に開く脚部、坏部は、浅く開く。
- f. 脚は、太く丸みをもって張り出し、坏部は、やや小さめの浅い碗状である。
- g. 脚は、太く直立ぎみに立ち上がり、坏部は、小さめで浅い。
- h. 脚部は、弧状に立ち上がり、坏部も碗状に大きく開く。
- i. 脚部のみの破片で、直線的に立ち上がる。また、脚中位に焼成前の穿孔がみられる。

(6) 台付甕

- a. 小型で、台部は小さく丸みをもつ、甕部は少し傾いている。
- b. 台部付近の破片で、aより大型である。
- c. 台部片であるが、太く直立ぎみに立ち上がる。坏の脚部の可能性もある。

(7) 土師器埴

- a. 小型で球状の体部をもち、直立ぎみの口縁部がつく。外面は、ヘラミガキ。

(8) 須恵器坏蓋

- a. 口縁部がやや丸みをもって直立する。口縁部外面に稜をもつ。天井部外面には3段の回転ヘラケズリがなされる。色調は、暗青灰色を呈する。器高4.8cm、口径11.0cm。
- b. 口縁部が小さく直立し、口縁部外面に稜をもつ。天井は欠損し不明。色調は、灰褐色を呈し、器高は、4.6cm、口径は、12.6cmを計る。

- c. 碗状を呈し、口縁部内面に沈線をもつ。器高は4.5～4.6cm、口径は、10.2～11.6cm。色調は、暗灰褐色と、青灰褐色を呈する。天井部は2～3段の回転ヘラケズリが認められる。
- d. 形体等はcに似るが小型である。器高4.2cm、口径10.0cm。天井部は2段の回転ヘラケズリが認められる。色調は、黒灰色を呈する。
- e. 碗状を呈し、口縁部外面にわずかな稜をもつ。全体に丸みがあるつくりである。器高4.6cm前後、口径11.2～11.6cm前後である。色調は、灰褐色と、黒灰色などを呈するが、一部酸化されている部分をもつ蓋1点有り。天井部は、2～3段の回転ヘラケズリ。
- f. 碗状を呈し、天井部は回転ヘラケズリにより平坦になっている。器高3.4～3.7cm、口径9.6～10.3cm。色調は、青灰褐色と灰褐色を呈する。
- g. 口縁部は、小さく直立ぎみで、全体に浅く小型である。器高3.4cm、口径9.4cm。色調は、青灰色を呈する。天井部は、回転ヘラケズリ。
- h. 小型で碗状を呈する。天井部に2段の回転ヘラケズリがなされ、色調は、灰褐色、器高4.4cm、口径9.3cm。

(9) 須恵器坏身

- a. 小型で、やや台形に近い形体で、受部は小さい。色調は、暗灰色を呈し、器高は、4.0cm、口径は、9.1cm。底部は、回転ヘラケズリ。
- b. aに比べて、やや大きく、受部も少し高い。器高4.1cm、口径10.3cm。色調は、灰褐色を呈し、底部は、回転ヘラケズリ。
- c. bより小さく、少し浅い形体である。器高は4.5cm、口径は、11.2cmをはかる。灰褐色。
- d. aより小さく、受部は、小さく、斜めにわずかに立ち上がる。底部は、2～3段の回転ヘラケズリ、色調は、暗灰色を呈する。器高4.1cm、口径8.8cm。
- e. dよりさらに小さく、底部は、2段のヘラケズリ、器高2.9cm、口径8.9cm、色調は、灰褐色を呈する。

以上の他に、須恵器高坏の脚部片(図10、52号住出土)、須恵器大甕の胴部片(53-B号住出土ほか)、灰釉陶器長頸壺(図10、50号住出土)、灰釉陶器碗(図10、24号住出土)等がみられる。

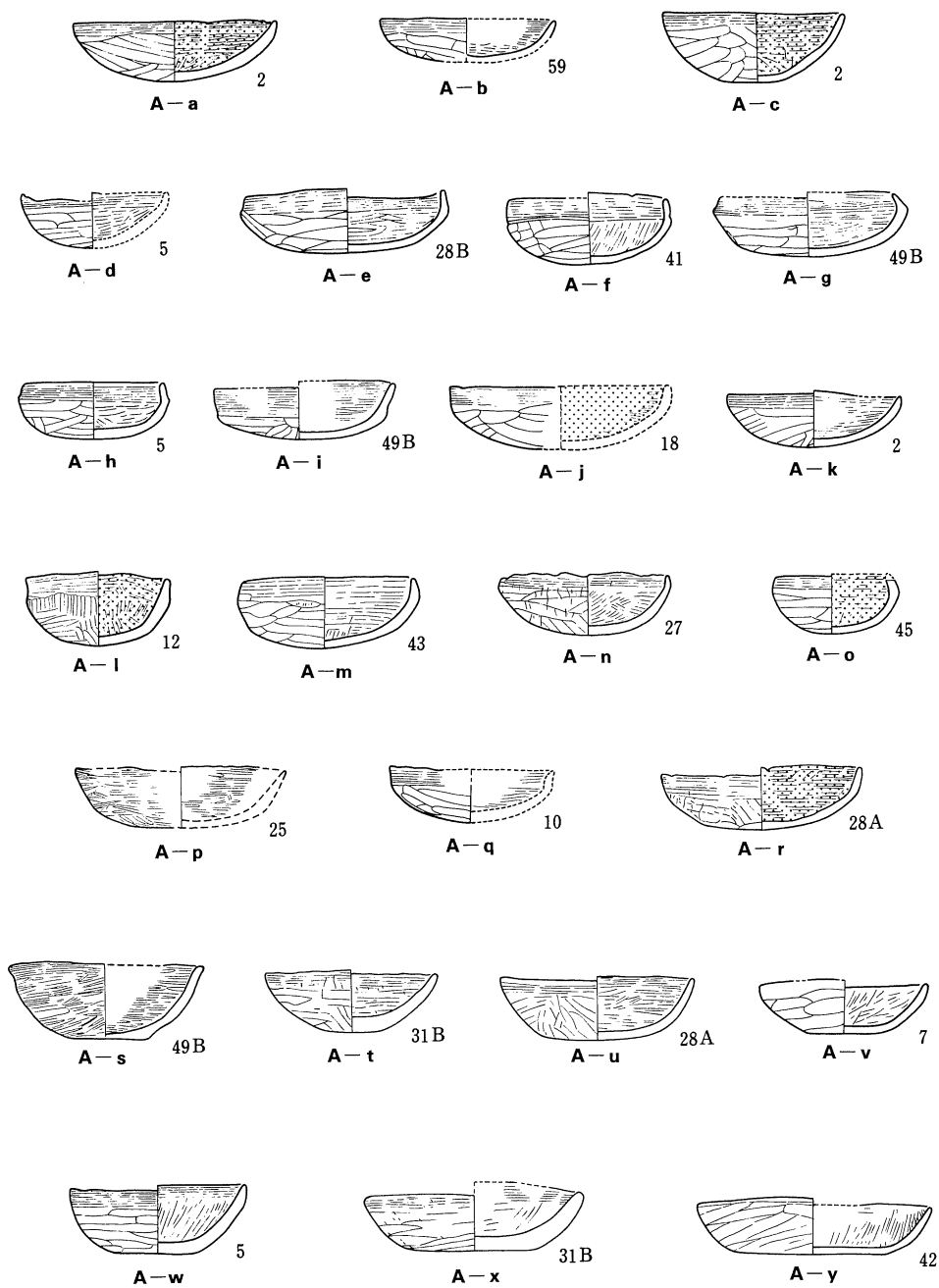
次に今までの分類を基に各住居跡別に出土土器の種類を整理してみると次の表のとおりになる。

なお、小片で復元不可能な土器片は取り扱っていない。

住居跡別出土土器分類表

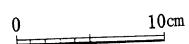
住居跡名	出 土 土 器	住居跡名	出 土 土 器	住居跡名	出 土 土 器
1	鉢m、高坏h, d	23	坏B-b?	44	鉢p
2	坏A-a, c(2), j(2), m, k(3)	24	甕l	45	坏A-n, o. 鉢a, h. 高坏d, g. 甕m, j. 須坏蓋g
3	甕片	25	坏A-p. 鉢p, s. 甕g. 甕e	46	坏A-q. 高坏a, h. 鉢p. 甕b
4	坏A-k	26	須坏身c	47	坏A-a(2), c, j, i. 高坏c, d. 甕r. 甕d, f. 須坏蓋e. 須坏身c, d
5 A、B	坏A-h, d, j, w. 鉢j. 高坏d, g. 甕c. 須坏身a, c, e	27	坏A-j, n. 埴. 鉢c. 甕c, e, j, k. 甕g. 須坏蓋b	48	坏B-e, a
6 A	坏A-k(2), n. 高坏f, g. 甕d	28A	坏A-p, e, r, u. 須坏身d	49A	坏A-c, j. 鉢h, b. 高坏i. 須坏身b
6 B	坏B-m, f, l. 甕m	28B	坏A-e, q. 鉢d, f, g(2), n, o. 甕a, c	49B	坏A-s, i, g, m. 鉢i, j. 甕b
7	坏A-k, v. 鉢s. 甕g	29	高坏d	50	須長頸壺a
8	甕i	30	鉢s	51A	坏A-s, g. 甕e
9	?	31A	高坏d(2). 坏A-k(2), q	51B	?
10	坏A-q(2)	31B	坏A-g, t, x. 台付甕a. 須坏蓋f	52	須高坏他
11	?	32	坏A-q, e. 高坏d. 甕g, d. 甕c. 須坏身d	53A	坏b, g, k
12	坏A-l. 甕g, c	33	坏A-i, j, k. 鉢j. 高坏b, f	53B	坏B-b, h, i, g, k, a
13	高坏c	34	坏A-n, m, g. 鉢g	54A	坏A-q. 高坏d. 甕f. 須坏蓋b
14	甕c(3)	35	坏A-g, v. 須坏蓋e	54B	鉢o. 坏A-e?. 甕d
15	坏B-b	36	坏B-e	55	高坏g?
16	高坏d. 坏A-k. 鉢j	37	甕i	56	高坏a
17A	坏A-h. 鉢b, r. 高坏b. 甕i	38	坏B-e ?	57	坏A-l. ?甕l
17B	坏B-l(2)	39A	坏A-c. 高坏d. 甕c. 須坏蓋h	58	坏A-n. 高坏d. 甕p. 須坏蓋e
18	坏A-j, g. 鉢l, m, f. 甕i. 甕b	39B	坏B-c, i	59	坏A-b, r, q. 鉢h. 台付甕c
19	須坏蓋c(2), f	40	?	60	甕j, s, p, q. 甕b. 高坏d(2)
20	坏A-c, k. 高坏f. 甕l	41	坏A-f, m. 甕s	61	坏A-e. 鉢d, g
21	坏A-g, j. 鉢p. 甕d, c. 甕e, g	42	坏A-y	62	坏A-e. 甕h. 甕a. 須坏蓋a
22	坏B-g(2), j	43	坏A-i, m. 甕i		

※()は個体数



※内面黒色処理はスクリーントーンで表わし、漆仕上げも含む。

図4 土師器坏の分類(非ロクロ)



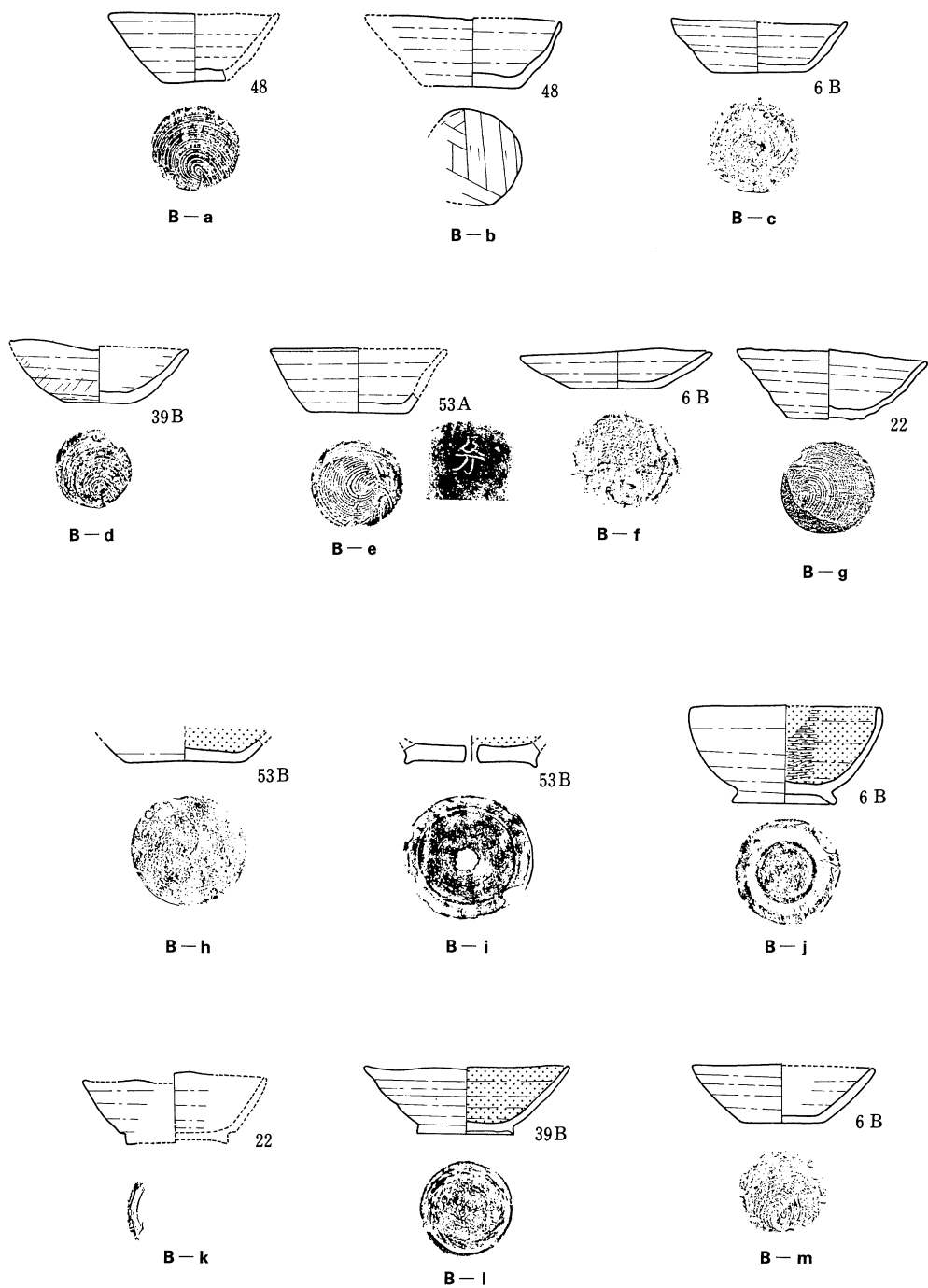


図5 土師器坏の分類(口クロ)

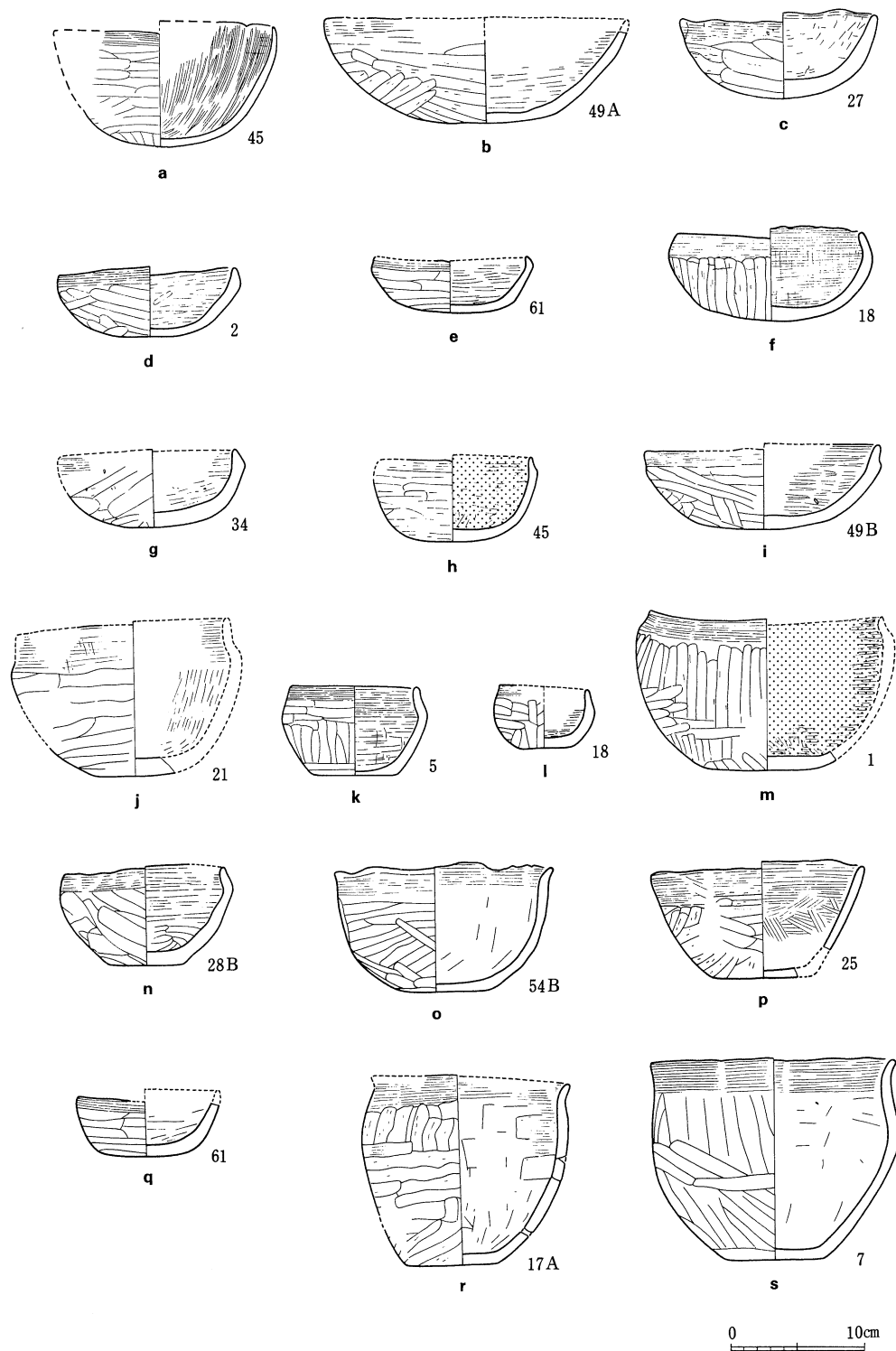


図6 鉢の分類

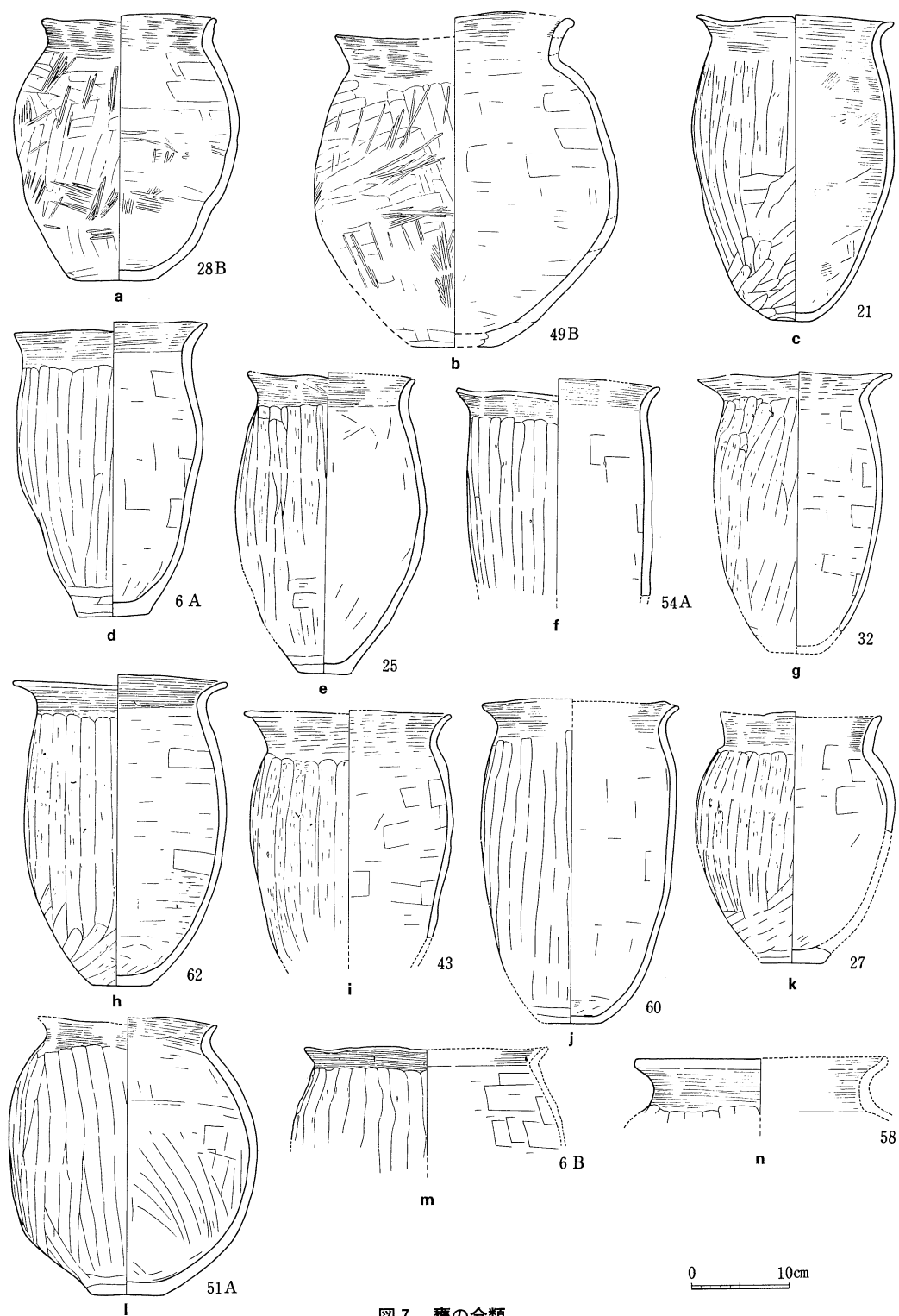
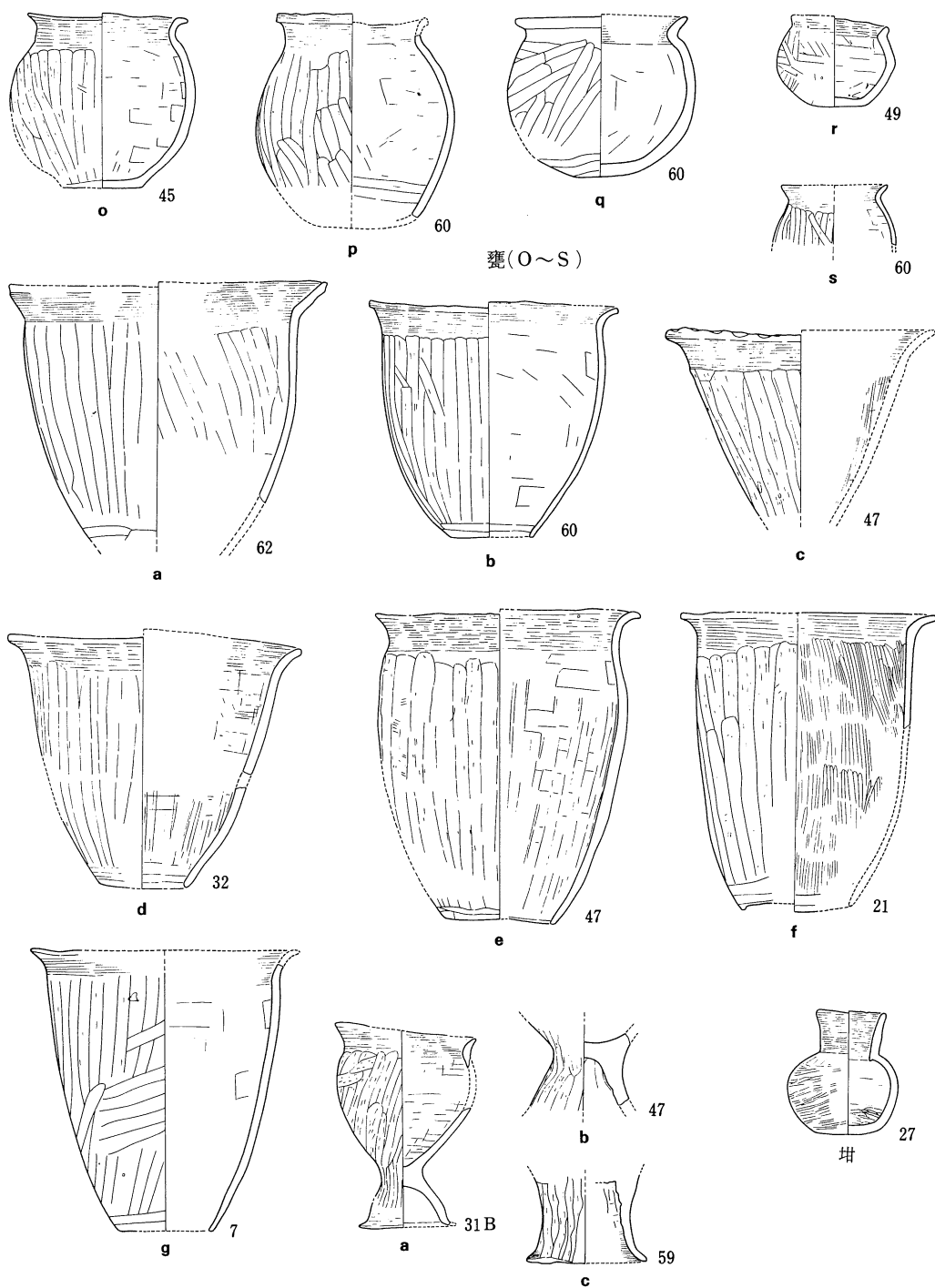


図7 甕の分類



甔 (a~g)

台付甕 (a~c)

0 10cm

図8 甕、甔、台付甕の分類及び埴

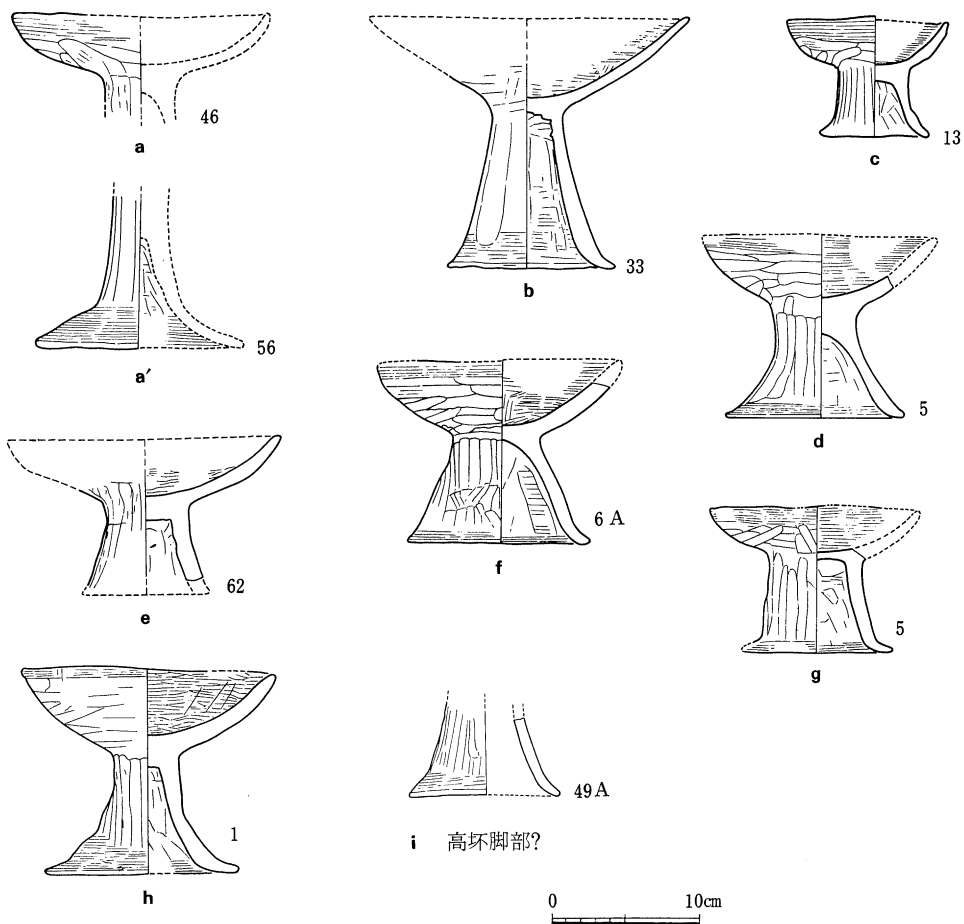
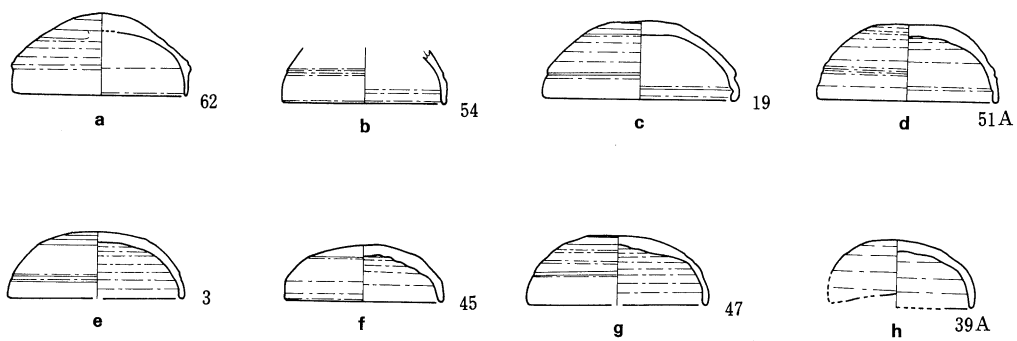
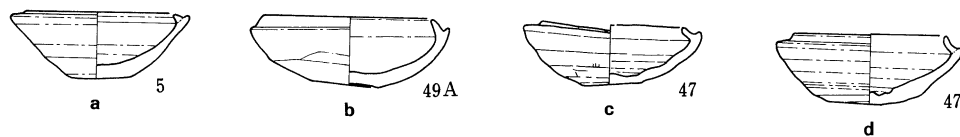


図9 土師器高坏の分類



蓋(a~h)



身(a~e)

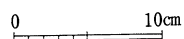
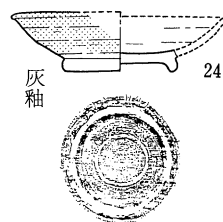
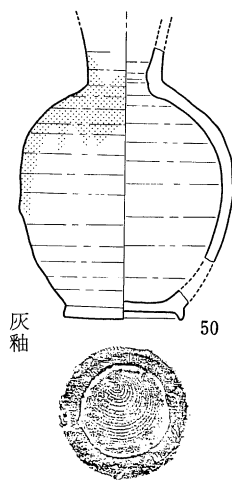
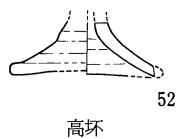
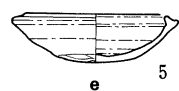


図10 須恵器の分類と灰釉陶器

3. 時期区分

土器の編年については、遺構の切り合い関係を、まず着目すべきであるが、当遺跡では、数少なく次のように11ヶ所である。(古い住居跡から新しい住居跡へと矢印で表わす)

6 A → 6 B, 9 → 8, 11 → 10, 17 A → 17 B, 28 B → 28 A, 31 B → 31 A, 39 A → 39 B, 49 B → 49 A, 53 B → 53 A, 54 B → 54 A, 59 → 58, 59 → 60。

このうち、いわゆる鬼高→国分の切り合いは、6 A と B、17 A と B、39 A と B の 3 ケ所で、ほとんど復元可能な遺物のない住居跡は、9 と 11, その他については、時期が近接しており、良好な資料と考えられる。わずかであるがこれらを基本として、さらに、先学の研究成果等をふまえて、区分してみたい。しかし、上述のように切り合い関係も数少なく、出土土器の量もわずかであり、不確実な面もあることを念頭に記しておく。

I 期 須恵器坏類が小型化する段階であり、坏蓋に a、c、f がみられる。口径は10cm前後である。土師器坏は A-b、r、j、n、e、q がみられ、丸底で口縁部に稜をもたない坏類が多い。一部に e のように稜をもつものも存在する。また、内面黒色処理される坏もみられる。鉢は、d、f、g、h、j、n、o、c がみられる。平底と丸底が有り、内面黒色処理される鉢も存在する。甕は、a、c、d、h、e、j、k がみられる。a は、口縁部がつまみ上げられ、外面胴部をヘラケズリ後ヘラミガキがなされ、いわゆる常総型甕に入るとも考えられる。甑は、a、g が有り、高坏では、e、b、f がみられる。また、埴が、27号より出土している。

II 期 この時期も小型の須恵器坏の身と蓋を伴っている。坏蓋では、g、e、h がみられ、身では、d、c がある。土師器坏は、A-e、q、n、o、i、m、a、c、j、s、g、h が出土している。口縁部に稜をもつ坏とない坏が有り、内面黒色処理される坏もみられる。鉢は、m、a、h、p、b、r があり、磁鉢状の鉢など各種がみられ、また内面黒色処理も存在する。甕は、g、d、m、j、i、r、e、c、s、p、b があり、大小を含め、各種が存在する。甑は、c、d、f、b で f 以外は、砲弾状を呈している。高坏は、d、h、g、c、a、b がみられ、特に a と d 類が比較的多い。また、脚の長い高坏がみられる。他に、須恵器高坏の脚部や台付甕の脚部付近?も存在する。

III a 期 当期は、平底の坏類がみられる段階である。また、小型の須恵器坏類も存在している。土師器坏は、A-q、h、d、j、w、n、m、p、e、r、u、k、v、g がみられる。平底は、v と w で、v は、小型である。須恵器坏は、蓋が b、e、身は、a、c、d、e が存在する。鉢は、j、g、p、s、d の各種があり、坏と同様に内面黒色処理された鉢がみられる。甕は、f、c、e で長胴甕が多い。甑は、f、g のみ認められる。高坏は、d、g が出土している。本期は、平底の坏の量が次の III b 期に比べると少ない。

Ⅲ b 期 平底の坏が多くなるが、依然、丸底や口縁部に稜をもつ坏及び小型の須恵器坏も存在する。土師器坏は、A-i、g、m、s、q、j、t、x、k、n、a、c、fで、平底は、s、t、xである。sは、やや雑なつくりであるが両面ヘラミガキがなされ、焼成は良好である。須恵器坏は、蓋が、fのみ認められる。鉢は、i、f、pが存在する。内面黒色処理も少し認められる。甕は、b、c、d、lがあり、bは、球状を呈し、口唇部がわずかにつまみあげられ、胴部外面は、ヘラケズリ後ヘラミガキが存在する。また、少し小型の台付甕aもみられる。高坏は、f、gで脚部は、短かく太い形である。甗は、e、gで長胴ぎみである。

Ⅳ期 Ⅲ b 期と同様、平底の坏と口縁部に稜をもつ坏及び小型の須恵器坏が伴出する。切り合い関係で49B(Ⅲ b 期)→49A(本期)と31B(Ⅲ b 期)→31B(本期)とに分けられるため、それらのセット関係を主として区分した。土師器坏は、A-j、g、l、c、j、kが出土している。須恵器は、坏身bが存在する。後の流れ込みかどうかは、不明であるが、ほぼ完形である。鉢は、l、b、h、pである。坏と同様に内面黒色処理される鉢も少し認められる。甕は、i、c、gが存在する。甗は、bがみられ、高坏は、d、iがそれぞれ存在する。

Ⅴ期 資料が少ないため不確実であるが、土師器坏A-pが存在する時期で丸底であるが、ほとんど体部と坏部の差が明確で偏平な坏であり、両面ともヘラミガキが施される。赤彩などはなされていない。鉢は、pとs、甕はe、甗はgが伴出する。

Ⅵ期 Ⅴ期同様、資料が少ない。土師器坏のA-yが出土している。いわゆる盤状であるが、赤彩はなされていない。また、伴出土器として、碗状の坏片(内面横方向のヘラミガキ)が1点みられる。yは、焼成は良好であり、外面はヘラケズリ、内面は、ヘラミガキであるが、暗文はみられない。

Ⅶ期 Ⅵ期とは、かなり時期が離れると考えられる。ロクロ土師器の存在する段階で、土師器坏B-h、i、g、k、a、e他にbとみられる坏がある。他に(須恵器)大甕片が存在する。aは、内面黒色処理がなされ、外面に「寺」の墨書がなされる。

Ⅷ期 土師器坏は、B-k、d、a、b、cがみられる。甕はl、他に(須恵器)甕片、灰釉陶器の碗で三角高台をもち黒笹90号型式と考えられるものが出土している。当期は、53B(Ⅶ期)→53A(本期)の切り合い関係がある。

Ⅸ期 土師器坏がやや小型になる段階である。坏は、B-m、f、lがみられる。甕は、mである。本期を含めⅦ期～Ⅸ期も、資料が少ない。

以上、10期に分類したが、資料に乏しく不明瞭な時期がある。これらについて、その時期を先学の編年にあてはめると、次のように考えられる。

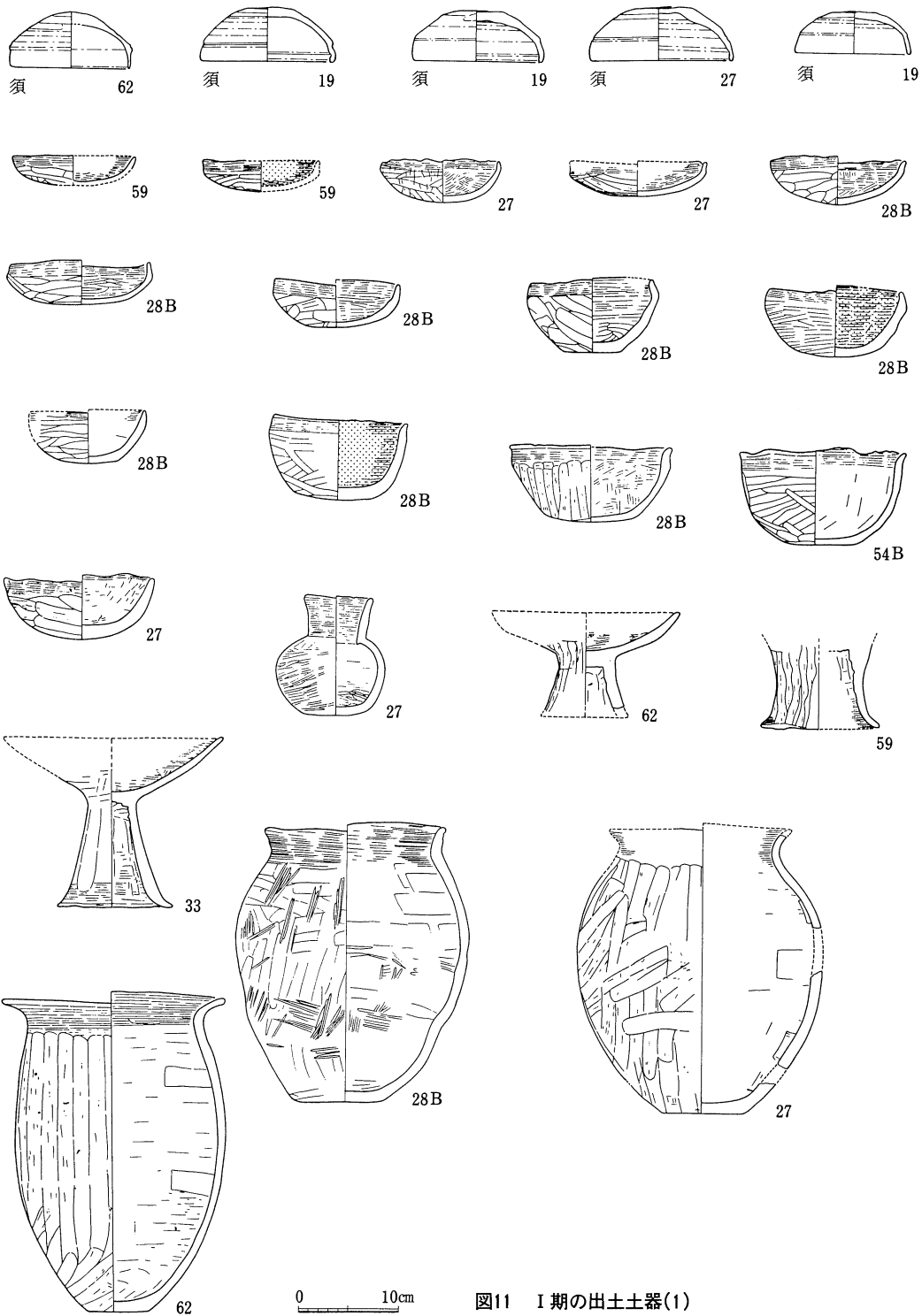


図11 I期の出土土器(1)

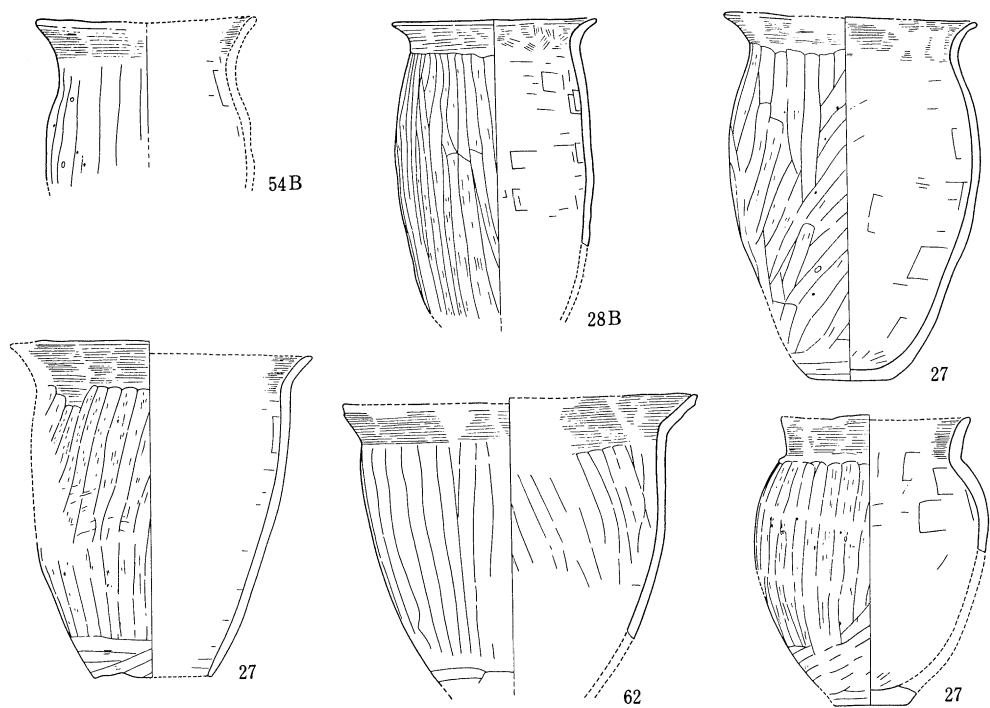


図12 I期の出土土器(2)

0 10cm

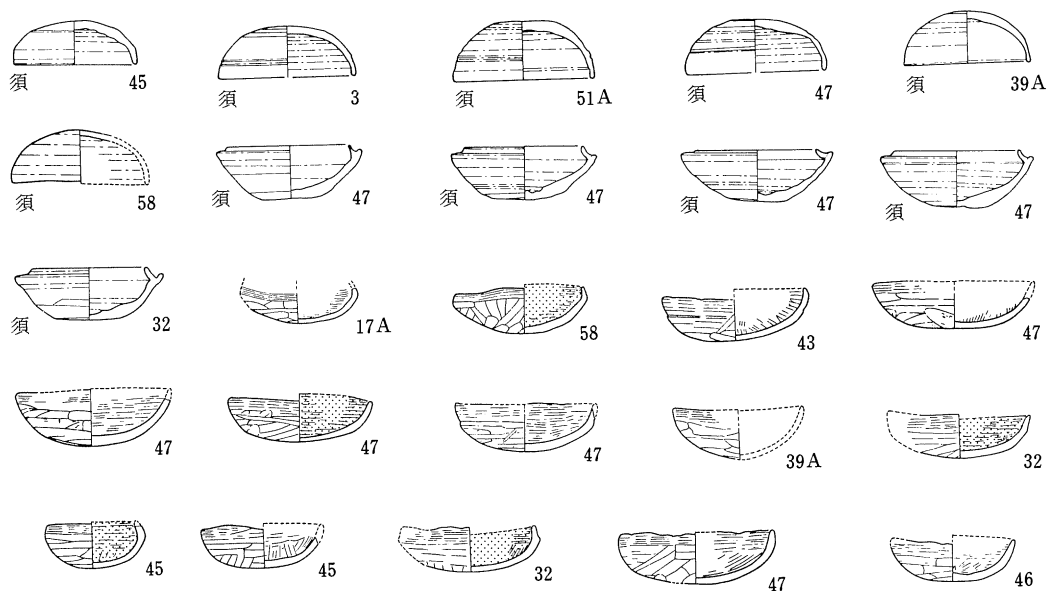


図13 II期の出土土器(1)

0 10cm

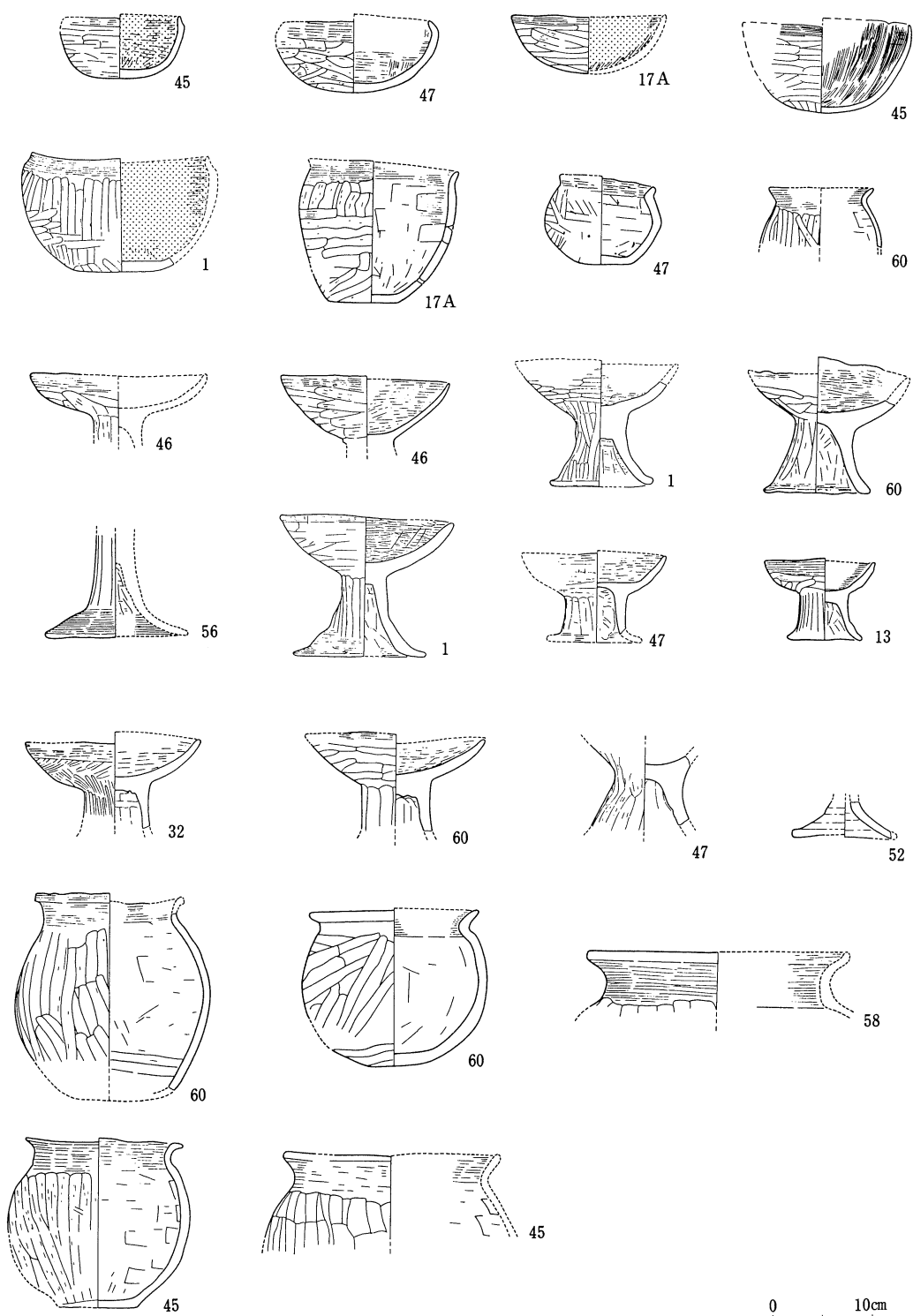


図14 II期の出土土器(2)

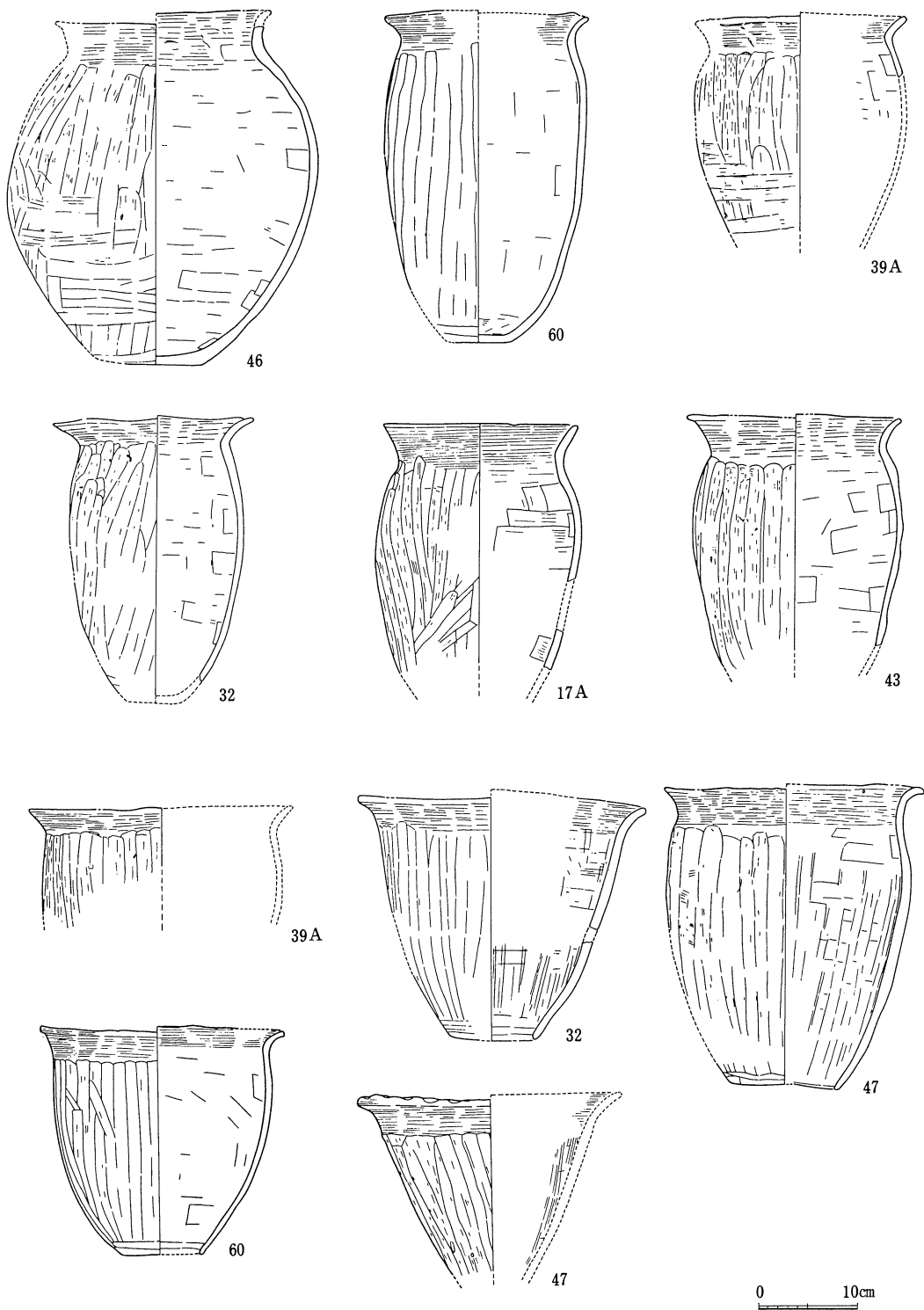


図15 II期の出土土器(3)

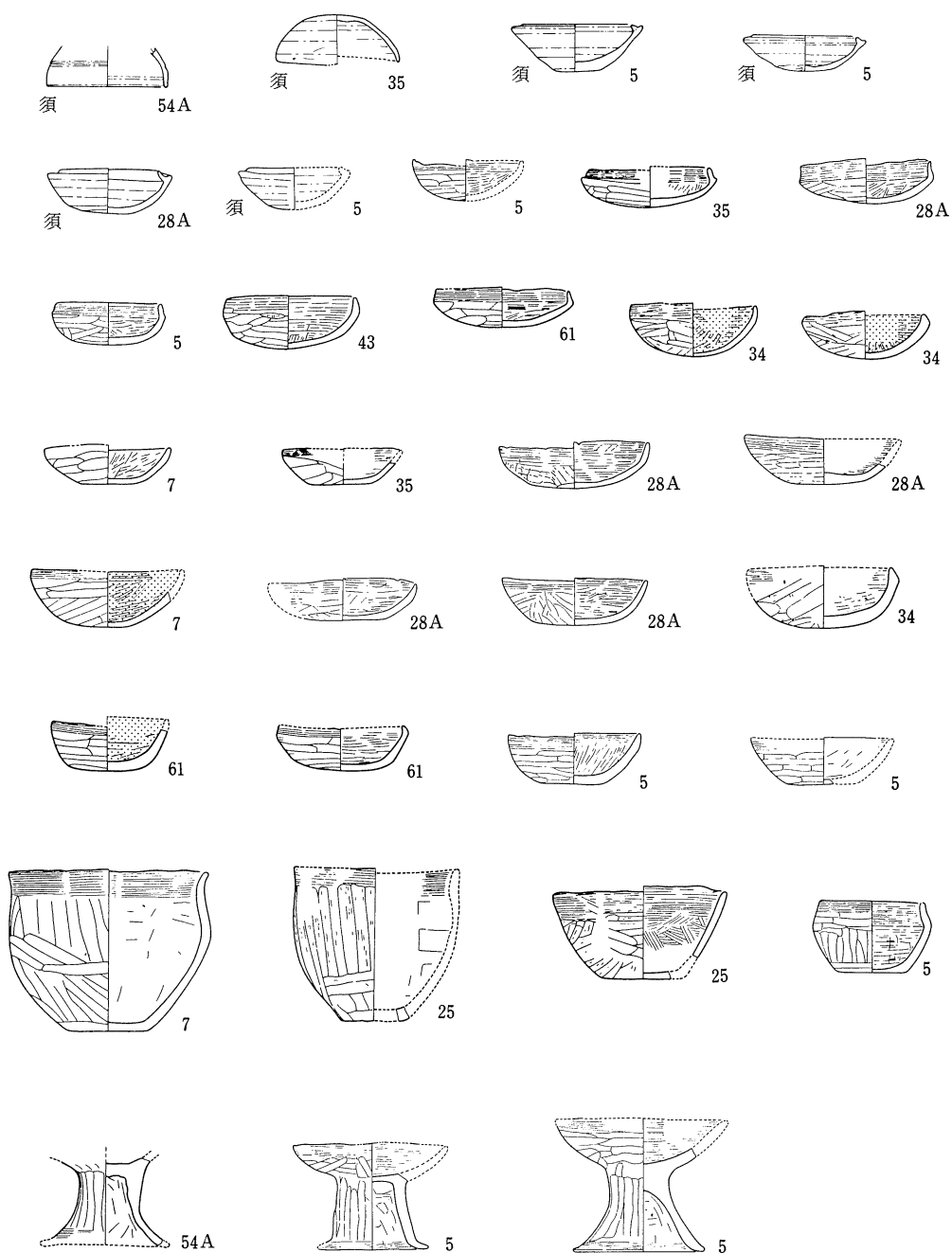


図16 III a 期の出土土器(1)

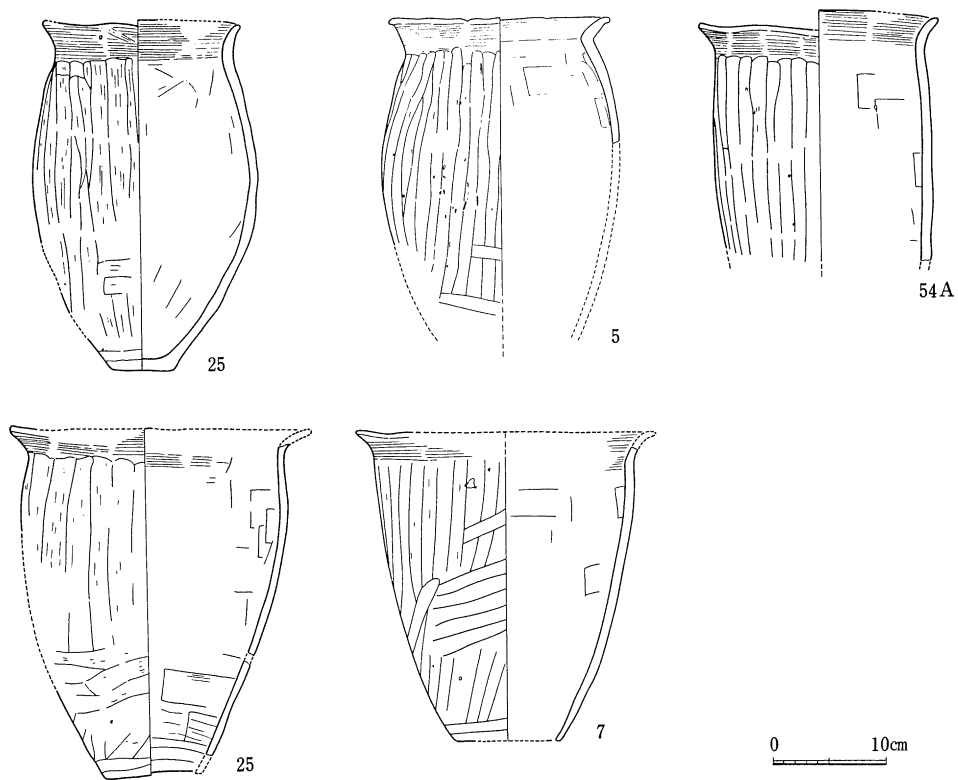


図17 Ⅲ a 期の出土土器(2)

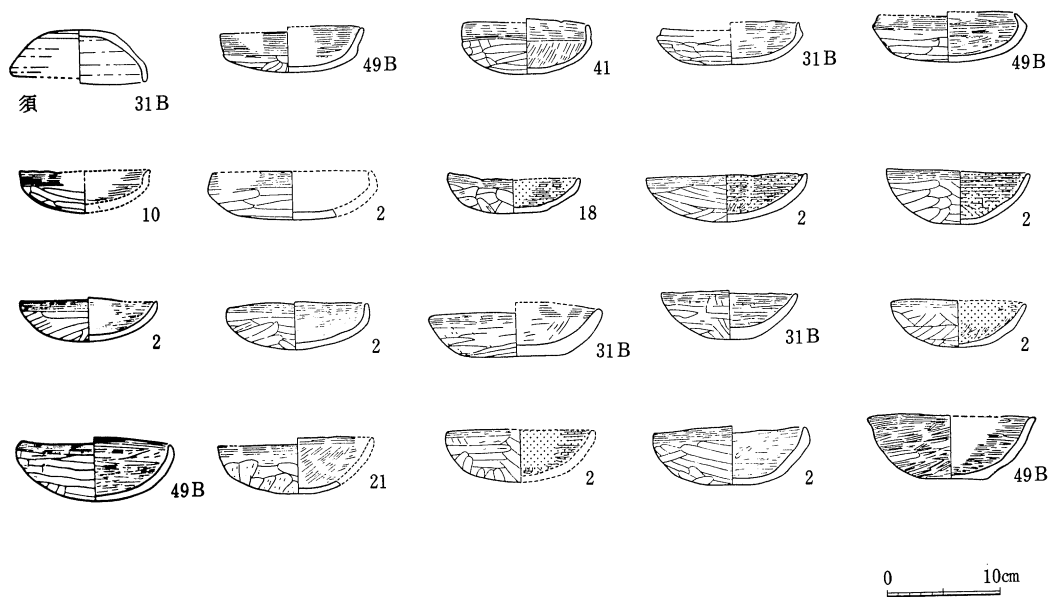


図18 Ⅲ b 期の出土土器(1)

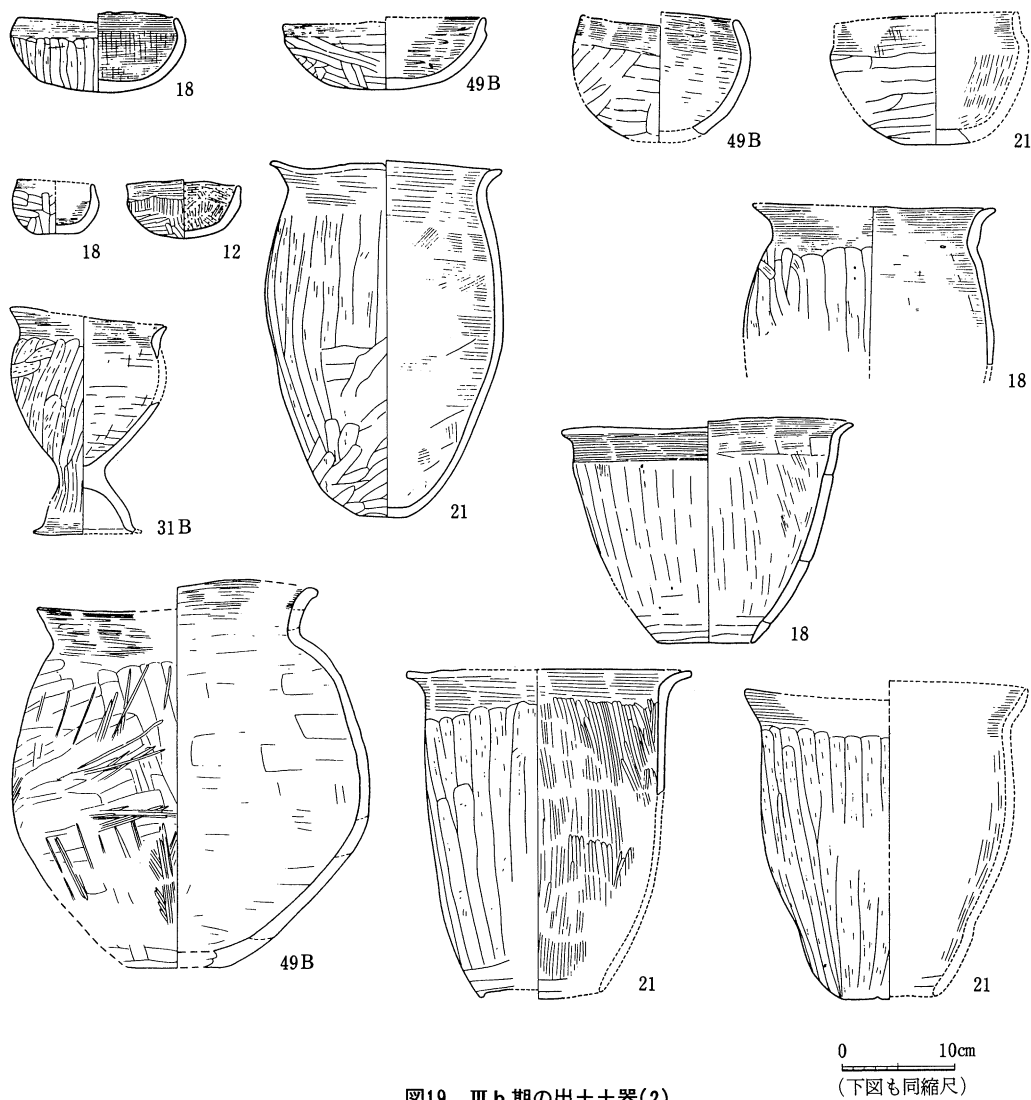


図19 III b 期の出土土器(2)

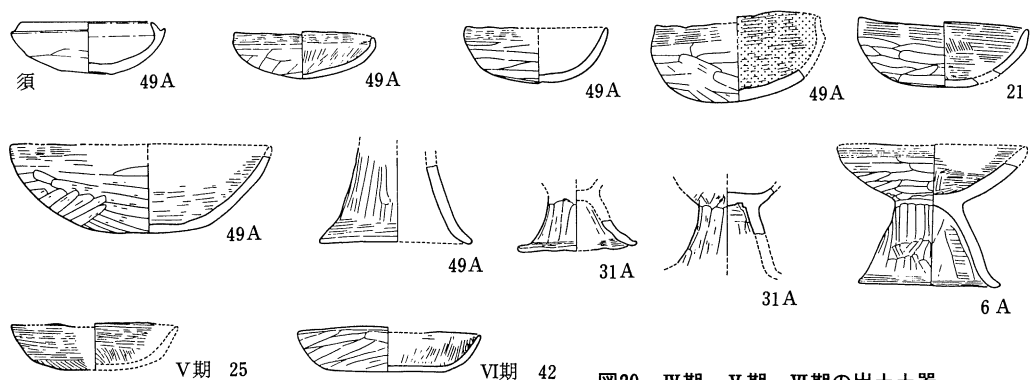


図20 IV期、V期、VI期の出土土器

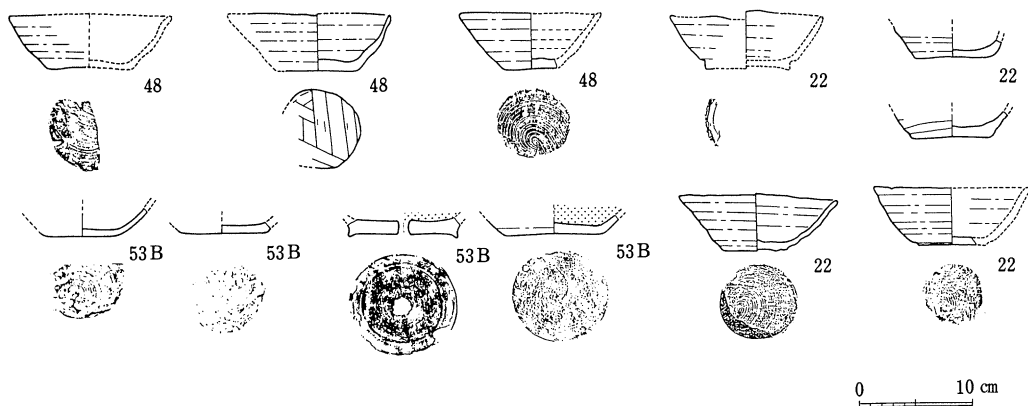


図21 VII期の出土土器

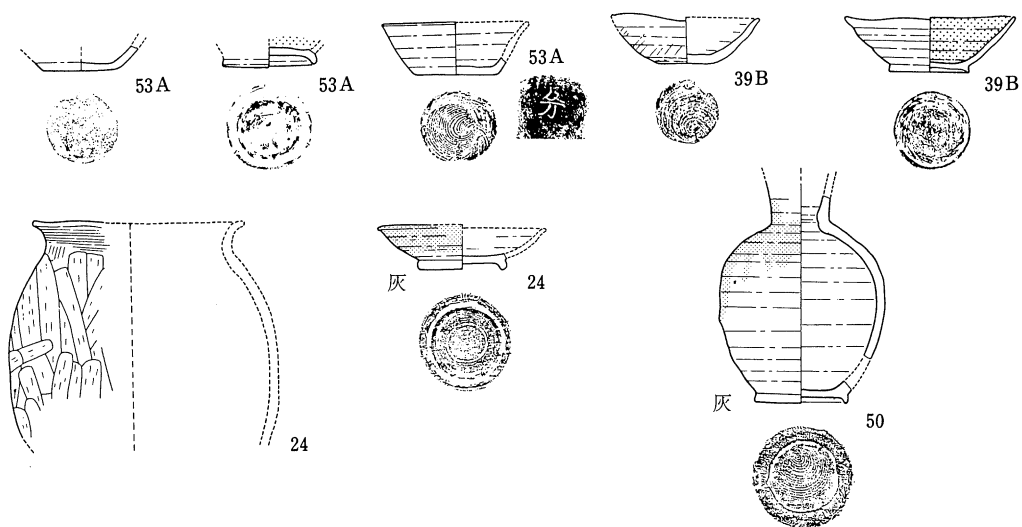


図22 VIII期の出土土器

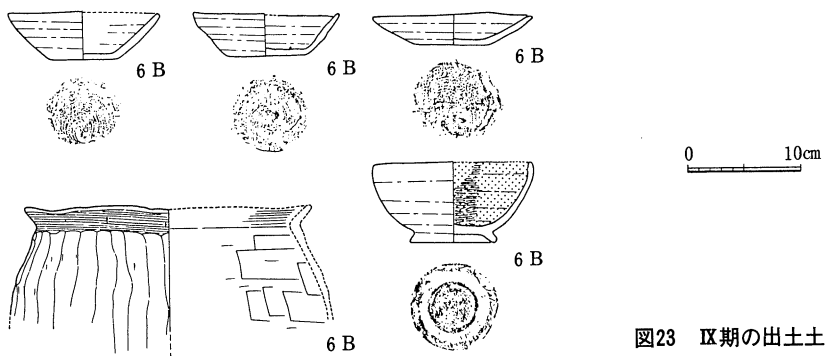


図23 IX期の出土土器

千草山 木對編年(養老川流域)₍₃₎ 田所編年(坊作遺跡)₍₄₎ 浅利編年(稻荷台遺跡)₍₅₎

I 期	VI期の古い段階		
II 期	VI期の新しい段階		
III a 期	VII期の古い段階		
III b 期	VII期の新しい段階		
IV 期	VII期～VIII期頃		
V 期	VIII期		
VI 期		B 期	
VII 期		V 期～VI 期	III 期
VIII 期		VI 期頃	IV 期
IX 期		VI 期～VII 期	IV 期～V 期頃

と推定される。

注

(3) 木對和紀「養老川流域における古墳時代後期土器編年試案」1987

(4) 田所 真『Ⅱ上総国1市原市坊作遺跡』『房総における歴史時代土器の研究』1987房総歴史考古学研究会

(5) 浅利幸一『同上2市原市稲荷台遺跡』『同上』1987、同上

4. 竪穴住居の変遷

以上により区分された時期別に竪穴住居跡をあてはめてみると次のようになる。

()はやや不明確な時期の住居跡

I 期	19、27、28B、(29)、33、54B、59、62
II 期	1、3、13、17A、32、39A、43、45、46、47、52、56、(58)、60
III a 期	5、7、25、26、28A、(30)、34、35、(41)、54A、55、(57)、61
III b 期	2、6A、10、20、21、31B、41、49B、51A
IV 期	(8)、12、(16)、18、31A、44、(49A)
V 期	25
VI 期	42
VII 期	22、48、53B
VIII 期	(15)、17B、(23)、24、36、(38)、39B、50、53A
IX 期	6B

この区分によりさらに、各時期別の遺構の特徴をあげてみる。

I 期は、8 軒と推定され、各住居跡の位置は、19を除いて東南側に集中する。規模は、27を最大(7.50m)とし、最小は28B(3.00m)の主軸を測る。主軸方位は、 $N-30^{\circ}\sim 43^{\circ}-W$ を示す。

主柱穴は、29以外は、4本とみられる。また62は、間仕切り溝をもつ。焼土を検出した住居跡は、19、27、28B、29、54Bであるが、火災と推定できるような炭化材等を出土したのは、28Bのみである。堅穴を人為的に埋めもどしたと考えられるのは、29、33である。

II 期では、遺跡全体に住居跡が広がり、14軒と推定される。規模は、最大が60(7.80m)、最小が3(3.20m)を測る。主軸方位は、 $N-2^{\circ}-E$ から $N-38^{\circ}-W$ と不規則であるが、ややI期より北側に向いている。主柱穴は、3以外は、4本で、17は、カマドの向い側の壁に張り出し部を設ける。焼土を検出した住居跡は、39A、43、46、58である。埋めもどされたと考えられる堅穴は、13、45、46、47である。

III a 期も、全体に広がっているが、北側は少ない。軒数は、13軒と推定される。規模は、5号が最大で(8.00m)、最小は、7(2.80m)である。主軸方位は、 $N-2^{\circ}-E$ から $N-38^{\circ}-W$ を示すが、西向きの方が多い。主柱穴は、7以外4本とみられ、5は、カマド向い側の壁に張り出し部を、また、各柱穴に間仕切りがそれぞれ付設される。また、5は北西側に拡張がなされる。焼土は、25、26、54Aより検出されている。また、埋めもどされたとみられる堅穴は、5、28A、30、34、35、54Aである。

III b 期は、同じく全体に広がった位置に9軒が配置されると推定される。規模は、最大が6A(6.80m)、最小は、41(3.40m)を測る。主軸方位は、 $N-15^{\circ}-E$ から $N-48^{\circ}-W$ とややばらつきがみられる。主柱穴は、21と51A以外は、4本と考えられる。焼土は、21、49Bより検出された。埋めもどされたと考えられる堅穴は、10と51Aのみである。

IV期は、7軒と少なくなり、配置は、北側と南側にまとまっているようである。規模は、最大で、49A(6.50m)、最小は12(3.50m)を測る。主軸方位は、 $N-49^{\circ}-W$ から $N-30^{\circ}-E$ でややばらつきがある。主柱穴は、12と18以外は、4本と推定される。焼土は、18のみ検出されている。また、埋めもどされたと考えられる堅穴は、8、16、31A、49Aである。

V期～VI期は、それぞれ1軒ずつであり、調査地の南側に位置する。規模は、25(4.90m)、42(3.05m)である。主軸方位は、25($N-10^{\circ}-W$)、42($N-38^{\circ}-E$)を示す。主柱穴は、各々4本と考えられ、焼土は、25より検出され、埋めもどしは、両者ともみられない。

VII期は、3軒で、西と東側に分かれて位置する。規模は小型で、22(3.30m)、48(3.30m)、53B(2.85m)を測る。主軸方位は、22($N-10^{\circ}-E$)、48、53B($N-44^{\circ}$ 、 $48^{\circ}-E$)を示す。主柱穴は、不明で、床面にはピットが存在するものの不明確である。焼土の検出や埋めもどされたと推定できる堅穴はない。

図 24
I 期の住居跡配置図

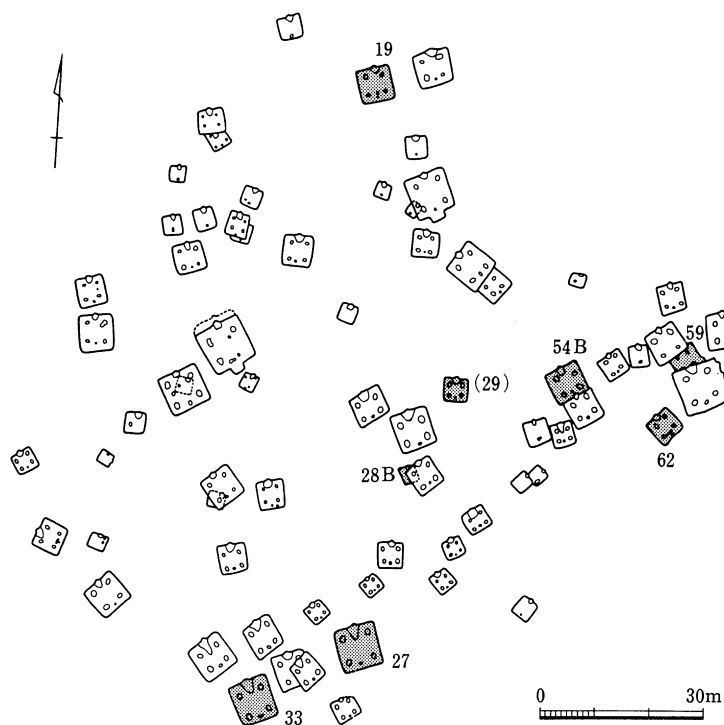


図 25
II 期の住居跡配置図

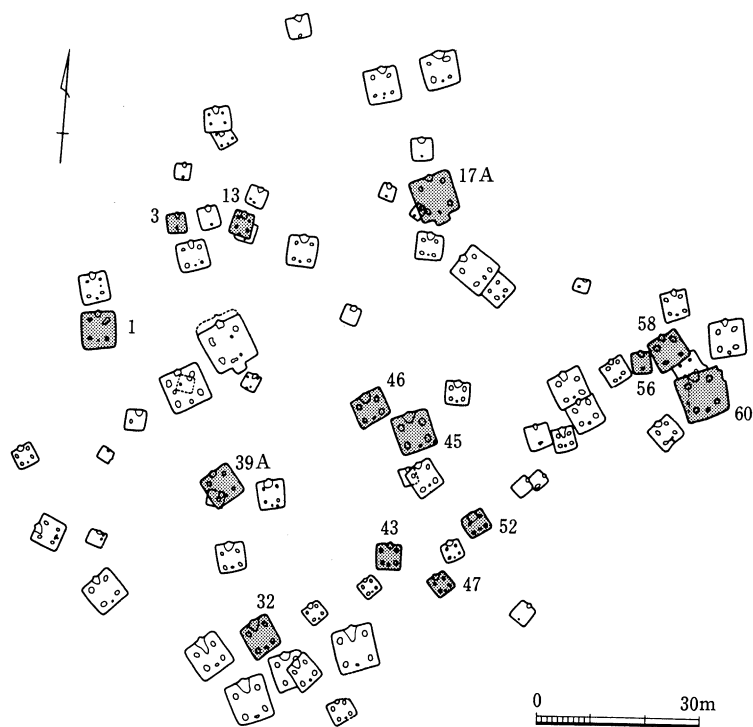


図 26
Ⅲ a 期の住居跡配置図



図 27
Ⅲ b 期の住居跡配置図



図 28
IV 期の住居跡配置図



図 29
V 期 - VI 期の住居跡配置図



図 30
Ⅶ期の住居跡配置図

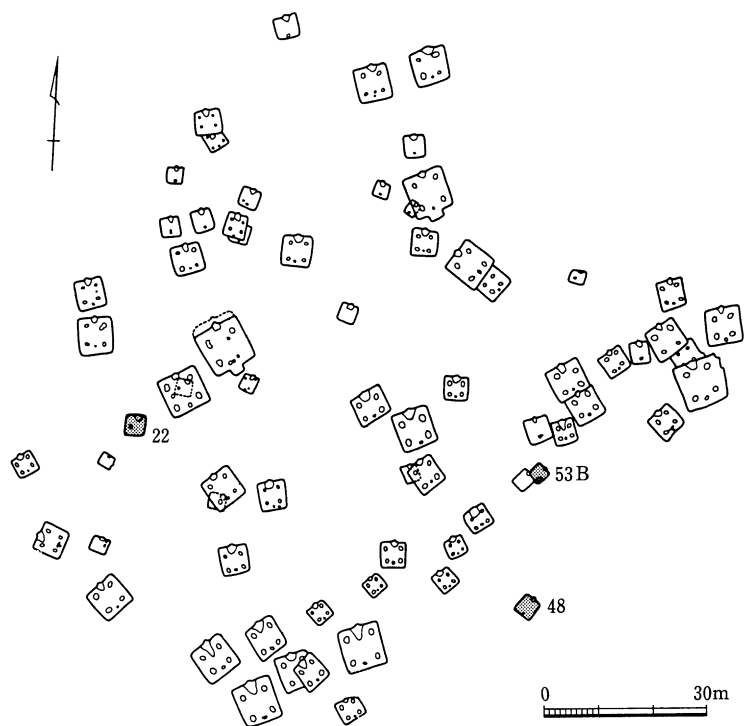
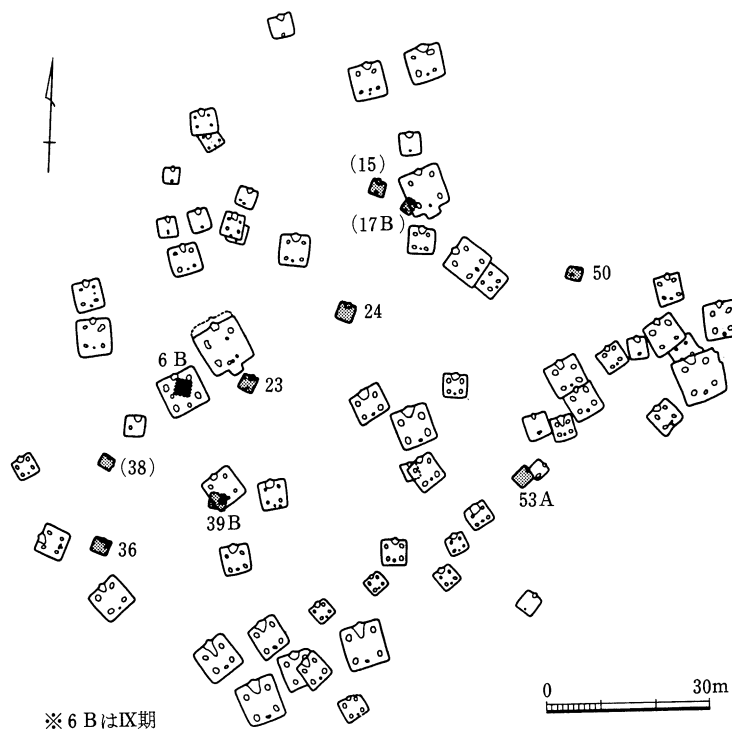


図 31
Ⅷ期～Ⅸ期の住居跡配置図



Ⅶ期～Ⅸ期は、9軒と再び増加し、西側を中心に全体に広がっている。Ⅸ期は、6Bのみである。規模は、小型が多く、最大で、24(3.10m)、最小は、17B(1.50m)を測る。主軸方位は、N-2°-EからN-49°-Eを示し、北側から北東側を向く。床面内のピットは、カマドの向い側など各住居跡別に不規則に所在する。焼土は、検出されない。また、埋めもどされた堅穴も認められないが、検出された面が浅く、床面の位置がⅠ期～Ⅶ期より上位のレベルに設定されているため、覆土の観察がわずかしかなできないためとも考えられる。

また、特殊遺物は、Ⅱ期に1、60より土製小玉、47より土製勾玉、Ⅲa期に、5より金銅製耳環、26より銅製耳環、30より鉄製の刀子、Ⅶ期に、22と53Bより布目瓦、Ⅷ期は、23より神功開寶、38より鉄滓、鉄釘片、15、23、24、36、39B、53Aより布目瓦がそれぞれ出土しているが、全体としては、出土量は少ない。

以上、遺物などの対象資料の少ない中で、簡単に変遷を考えてみたが、遺物が小片のため、形が復元できずに、時期を特定されない堅穴住居跡が6軒ほど有り(6)、本来は、これらの堅穴も他のカマド等を含めた要素で究明されなくてはならないが、今回は除いている。また、千草山遺跡は、北側に突出する舌状台地全体であり、今回の対象地区は、その北西側の一部分で、全体を含めた変遷の考察により、多くの問題も判明すると思われる。(7)

注

- (6) Ⅰ期からⅥ期の時期に属すると推定される。
- (7) 今回対象とした地区の東側隣接地を昭和60～61年度に市原市文化財センターが調査を実施している。

主な引用参考文献

- (1) 房総歴史考古学研究会「房総における歴史時代土器の研究」1987
- (2) 佐久間豊『斜格子状暗文を有する土師器坏について』「史館第15号」1983、史館同人
- (3) 西山克己『東国出土の暗文を有する土器(上)』「史館第16号」1982、史館同人
- (4) 同上『 同上 (下)』「史館第18号」1984同上
- (5) 『シンポジウム収録－房総における奈良・平安時代の土器』「史館第17号」1984
- (6) 佐久間豊『千葉県における奈良・平安時代土器の様相(上)』「史館第14号」1983
- (7) 〃『房総におけるロクロ土師器生産』「史館第19号」1986
- (8) 『シンポジウム資料－房総における奈良・平安時代の土器』1983、史館同人他
- (9) 村山好文他「Ⅶ調査の成果と問題点、A出土遺物の検討」『平賀』平賀遺跡群発掘調査会
- (10) 田辺昭三「陶邑古窯址群」Ⅰ 1966 平安学園考古学クラブ他
- (11) 中村 浩「和泉陶邑窯の研究」1981柏書房 他

- (12) 石田広美他「山田水呑遺跡」1977 山田遺跡調査会
- (13) 中村 浩「陶邑」Ⅲ 大阪文化財センター
- (14) 三浦和信「第5章調査の成果、第2節古墳・歴史時代」『酒々井町伊篠白幡遺跡』1986 (財)千葉県文化財センター
- (15) 藤岡孝司「第3章まとめ」『八千代市北海道遺跡』1985 (財)千葉県文化財センター
- (16) 阪田正一「第3章まとめ」『八千代市権現後遺跡』1984 ”
- (17) 折原洋一他「第4章考察」『千葉県成田市宗吾西鷲山遺跡発掘調査報告書』昭和61年 宗吾西鷲山遺跡調査会
- (18) 平田貴正他「第Ⅵ章考察」『千葉県東金市作畑遺跡発掘調査報告書』昭和61年 作畑遺跡調査会
- (19) 小高春雄「第Ⅳ章第3節第3項古墳時代・歴史時代」『主要地方道成田松尾線Ⅴ』昭和62年 (財)千葉県文化財センター
- (20) 福間 元他「Ⅳ小台遺跡の集落構成」『千葉県印旛郡栄町小台遺跡発掘調査報告書』1981 小台遺跡調査会
- (21) 佐久間豊他「第5章考察第2節3出土土器について」『千葉県袖ヶ浦町清水川台遺跡発掘調査報告書』(財)君津郡市文化財センター
- (22) 田所 真「千葉県市原市池ノ谷遺跡、福増遺跡」1985 (財)市原市文化財センター
- (23) 鈴木英啓「千葉県市原市潤井戸西山遺跡」1986 (財)市原市文化財センター
- (24) 浅利率一「千葉県市原市下ヶ谷台遺跡」1987 (財)市原市文化財センター
- (25) 米田耕之助「千葉県市原市沢遺跡」1987 (財)市原市文化財センター
- (26) 石倉亮二他「タルカ作遺跡出土土師器の分類と鬼高期集落の構造」『佐倉市タルカ作遺跡』1985 (財)千葉県文化財センター
- (27) 宮内勝己他「第2章考察3古墳時代・歴史時代の遺物」『千葉県佐倉市高崎新山遺跡発掘調査報告書』1987 (財)印旛郡市文化財センター
- (28) 有沢 要他「岩富漆谷津・太田宿」1983 佐倉市教育委員会
- (29) 雨宮龍太郎「古代村落と仏教」一磁鉢をめぐる人々『研究連絡誌第2号』昭和58年(財)千葉県文化財センター
- (30) ” 「後期古墳時代有吉遺跡の研究」『研究紀要』昭和60年 (財)千葉県文化財センター

市原市文化財センター研究紀要 I

印刷 昭和62年 3 月20日

発行 昭和62年 3 月30日

発行 財団法人 市原市文化財センター
〒290-02 千葉県市原市馬立817番地
TEL 0436(95)2755

印刷 三陽工業(株)市原支店
〒290 千葉県市原市五井5510の1
TEL 0436(22)4348
